

妖怪のヒーローアカデミア

座右の銘は天衣無縫

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

無かったから書いただけ！ 以上！

TwitterのURL

https://mobile.twitter.com/zayutennim
uhou

目次

始まりはボーイミーツガール？ どの恋愛小説ですかソレ？	1
自由がウリなのに受験生に自由が与えられて無い件について。	8
自由がウリなのにまず最初に教師の自由を押し付けられた件について	20
実は身内からは『どっちかって言うとヴィラン向きの性格じゃね？』とはよく言われます！	30
人には知られたくない事、触れられたくない事の1つや2つ……あるんですよ。	40

気分が落ち込んだ時は何時もの自分のマネをしてみると意外と効果があったりするんですよ。	50
トラウマ	60
射命丸文 オリジン（仮）	77
兎にも角にも健康って大事ですよ、痛感しました	93
体…育…祭？	101
騎馬戦って下の人は凄い運動量になりますよね（作者の体験談）	115
普通、騎馬戦って団体戦だった気がするんですが、気のせい？ アツ、ハイ。	125

十五分って短いのか長いのかよく分かり

ませんよね | 136

試合に勝って勝負に負けました | 148

ハッ！ 突然の大スクープの予感！

159

天狗だから、武術は結構得意です！

175

決着！ | 184

表彰式 | 203

命名式 | 210

職場体験、またの名をコネ作りの機会

221

始まりはボーイミーツガール？　どこの恋愛小説ですかソレ？

始めは中国で光る赤子が生まれたのが始まりだった。

だが、その始まりは『まあ、中国だしいつものガセ動画だろ』という事で相手にもされ無かった。

が、それが本当にガセ動画なら今の社会、超常的な『個性』が日常となり、まさに一世代前のアニメやらマンガやらのような世界にはならない訳で。

日常は『ウソのような現実』で塗りたくられ、世界は変わった。

世界人口の八割が『個性』を所有する事となった。

まあ、それで何も起こらないわけも無く、これまた一世代前のアメコミみたく自分の能力を使って暴れ始める『悪』が誕生した。

誰が呼んだか『ヴィラン』。

そしてその『ヴィラン』に対抗すべく、警察とは別に新たな正義の職業が誕生した。

それが『ヒーロー』。

まんまアメコミじゃねえか、とか言っってはいけない。

何はともあれ、そんな正義の味方だが、やっぱり危険が伴うという事で選ばれた人間、即ちエリートしかなれない。

そしてそんなエリートの中でも更にエリートが目指すヒーロー育成学校が二つ。

『東の雄英』『西の士傑』と呼ばれる高校だ。

両校共に毎年のヒーロー科の受験倍率は100を超える。

そんな高校の片方、『雄英高校』の今年の受験が始まるうとしていた。

パシヤリ、パシヤリとシャッターの音がする。

「おお、これがあの雄英高校ですか。国立十最高クラスの高校だけあって大きい

ですね。年間の予算とか幾ら位なんでしょうか。」

試験当日、雄英高校の前。

誰もが緊張で顔を強張らせる中、一人だけ持っているカメラで雄英高校の校舎を撮影している女子がいた。

因みに他の受験者からの評価は『カメラに関係する個性』『クソ度胸のある女子』『記念受験』の三つの内のいずれかである。

正解は二つ目の『クソ度胸のある女子』である。

個性は背中から黒い鳥の翼のようなものがあるのでよく見れば違うことが分かる。

「あやややや、いつの間にかこんな時間ですか。流石に試験に遅刻する訳にもいきませんし、ちよつと急ぎましようか。」

そう言うのと右、左、後ろ、前、上、と周囲を確認してからほんの少しだけ背中を翼を広げた。

直後、風を残してその場から居なくなつた。

『今日は俺のライブへようこそ！ エヴィバデイセイヘイ！』

「イエーイ！！」

筆記試験が終わり、次の実技試験の為に集められた受験生達。

そんな受験生達に大声で呼びかけるプロヒーローのプレゼントマイクだったが、流石にこんな状況で返事をする受験生は居なかった。

一人を除いて。

『ナイスレスポンスだぜ、受験番号3645のお嬢ちゃん！ サンキューー！！』

今日の朝、カメラで校舎を撮影してた女子である。

周りから『ウツソだろコイツ』的な目で見られていてもニッコニコと笑い続ける辺り、その度胸が伺える。

『さて、リスナー諸君！ これから実技試験の概要をサクッとプレゼンするぜ！ 準備は良いか!!』

「オツケーラー!!」

『またまたサンキュー! そんなじゃ、始めんぜ!』

実技試験の内容は制限時間十分の『模擬市街地演習』

持ち込みは自由。会場はA〜Gまでであり、受験生はそのどれかで実技試験を受ける。

演習場には三種類の『仮想敵』が多数配置されており、その強さに比例して倒した時のポイントが設けてある。

自分の持ちポイントを出来る限り上げるのが目的であり、他の受験生への妨害は即失格である。

「質問よろしいでしょうか!」

一人の受験生が手を上げ、質問を始めた。

要約するとプリントには四種類の『仮想敵』があるのに、説明されていないのは何故か?

という事であった。

(あややや、せっかちな人ですねえ。まだ説明されて無いだけでしょように。)

頬杖を付きながら、そんな事を考える女子。

そんな女子を尻目に質問に対する説明が行われた。

四種類目は0ポイントの敵。

各会場に一体設置され、暴れ回る傍迷惑な存在である。

『そんじゃあ、最後に受験生諸君には雄英の校則をプレゼントしよう! かの英雄ナポレオンⅡボナパルトは言った。『真の英雄とは人生の不幸を乗り越えていく者』と!

——Plus Ultra! それでは皆、良い受難を!!』

バスに揺られ、雄英高校の敷地内を走ること数分。

実技試験会場に到着した。

パシヤ、パシヤ

「うわあ、敷地内にまんま街一つとは。しかもこれが七つですよね。一つの大都市レベルじゃないですか。」

((((どんな度胸してんだコイツは!!)))

一通り撮り終えた後、カメラを仕舞い、腰に付けていたポーチから取り出したのは紅葉の形をした団扇。

『ハイ、スタート!!』

「疾風『風神少女』!」

唐突に告げられた始まりの合図。

それと同時にその少女の姿がかき消えた。

今更ながら紹介しよう。

彼女の名は射命丸 文。

個性は『鴉天狗』

複合型に分類される個性で素の身体能力はそこらの増強型と張り合えるレベル。

空を飛べ、武術の才能があり、風を操ることが出来る。

因みに弱点は伝承にある天狗と同じである。

即ち、鯖と泳げない事である。

自由がウリなのに受験生に自由が与えられて無い件について。

一陣の風が吹いたと思ったら仮想敵のロボが吹っ飛んでた、何を言ってるかわかんねーと思うけ（以下略）

今年のとある雄英高校受験者が受験終了後にSNSにアップしたコメントである。

時を少し遡る。

雄英高校の実技試験の開始と同時に飛び出した射命丸文は自らの『個性』を存分に使い、試験会場内を飛び回り、見つけた側から仮想敵を吹っ飛ばしていた。

他人が戦っているロボには手を出さず、地面ストレスを飛んだ時に起こる風も『個性』で無くしているので妨害扱いにはならない。

本来なら推薦で入れてても可笑しくない程の実力を持つ彼女にとってこの試験はただのお遊びのようなものだった。

因みに推薦は応募用紙に記入漏れがあつて受けられなかった。

「60……………67……………72……………76……………83……………」

『残り7分と29秒！』

「あー！！ 2分半で100ポイントいかなかった！！」

こんな風に傍迷惑ほどポイントを稼いで遊んでられるくらいには余裕だった。

「あややややくく、取り敢えず200くらい稼いでおけば安全でしょうし、それが終わったら写真でも撮りますかね。」

それから少しして

「巨大ロボ！！ こ、これは……………格好のネタ！ 撮らねば後悔する奴ですね！」

巨大0ポイントロボが出現して周りの受験者達がすたこらさっさと逃げていた。すらフラツシユを焚きながら写真を取りまくっていた。

だが、そんなにフラツシユを焚いてロボが反応しない訳もなく、0ポイントロボは積極的に射命丸を狙い始めた。

だが、ただ攻撃範囲が広いだけの遅い攻撃は一切当たらず、写真を撮られまくる0ポイントロボ。

そんな光景を目にした受験生は

「あれは、まさかワザとフラツシユを焚いて注意を引き付けているのか!？」
盛大に良い方向に勘違いしていた。

『終了〜!!』

試験終了の合図と共に動きの止まった0ポイントロボ。

狙ったのかと思えるほど、やけに迫力を感じられるポーズなのでまた一枚パシャリ。掠つてすら居ないのにケガなんてする筈もなく、10分間それなりに動いた程度でバテるほどヤワな体力もしていない射命丸文は、取材する相手もいないので早々に引き上げることにした。

が、さつきからパシャパシャ撮つてた写真。

アレが色々と問題にならない訳もなく、写真は校舎を写したのも含めて全て没収となった。

是非もなし。

「あゝやややや、嫌になっちゃいますねコレは。」

雄英高校受験からの帰り道、シヨンポリとした射命丸が目撃された。

それを偶然見た同じ受験生は実技試験で実力を出し切れなかったのだらうと勝手に

想像した。

もちろん、ハズレもハズレ、大ハズレである。

実はフリーライターとしてバイトしている彼女。

記事を書くためのネタが全部取られたのだ。

どこからか彼女がフリーライターだと調べた雄英側が今日の試験の記事にしないように言ったのだ。

無論、国立高校を相手にしてまだ中学生に過ぎないフリーライターが強気に出れる訳も無く、泣く泣く記事にするのを諦めたのだ。

そもそも受験会場に『個性』とは一切関係ないカメラを持ち込もうと思う辺りバカだ
が。

カンニングしたと言われても文句は言えないのだ。

「まあ、いいです。入学したら雄英体育祭も待つてる事ですし、そこで優勝者への独占インタビューとか出来たらら……うへへへへへへへ。」

ニタニタと未来の事を考えながら笑う射命丸。

『取らぬ狸の皮算用』ということわざを知らないのか。

「いよおし！ そうと決まれば『果報は寝て待て』！ さっさと帰って寝ましょう！」

そう言つて元氣よく走り出す射命丸。

「周囲からの目は冷たく、ちゃんと見守ってくれるのは空に浮かぶ月と沈みかけの太陽だけだった。」

それから、数日後。

自宅でのんびんだらりと過ごしていた射命丸の元に雄英高校から通知が届いた。

何の気負いも無い射命丸は潜っていたこたつから出るのが億劫だという理由で母親から受け取ったその場で通知を開いた。

『私が投影された!!』

「おお、オールマイトじゃないですか。」

ナンバーワンヒーローがいきなり出てきたにも関わらず反応の薄い射命丸。

寝つ転がりながらミカン片手に映像を見続ける。

『え、何故私が映像に出てるのかって？ それは私が今年の春から雄英高校の教師として務めることになったからさ!』

「キタコレー！」

特大のネタの香りがした瞬間、先程とは比べ物にならない反応を示す射命丸。なにせあのオールマイトと一対一で取材できる可能性があるのだ。

これはフリーライターとして見過ごさないわけにはいかなかった。

『まあ、それは置いといて、だ。射命丸少女、見事合格！ 推薦の時は残念だったが、それはそれ。推薦を受けようとするだけあつて筆記は理系教科に幾つかミスはあつたが余裕で合格。そして実技試験!! 敵ポイントはピツタリ200! ぶつちやけ、狙つたでしよ君。』

「あやや、流石に露骨過ぎましたか。」

今更である。

そして母親からは睨まれている。

『さらに加えて、実技では救助活動ポイントというのがあつた! 所謂、隠し要素という奴だね。救助ポイントは32ポイント! 合計で232ポイントだ! おめでとう! 二位とはぶつちぎりの差を付けての一位通過だ! さあ、おいで射命丸少女! ここが! 君のヒーローアカデミアだ。』

映像が終わると、母親に無言で頬をむいむい引つ張られ、抱き締められた。

そして母親は「お祝いしないかね!」と出かけていった。

射命丸本人は、また無駄に多い親戚一同から色々と絡まれると思って少し落ち込んだ。

そして季節は受験シーズンの冬から移り、色々と始まる春へ。

雄英高校の正門前も生徒達で溢れかえっている。

そんな中、余り人のいない廊下を歩きこれから一年間を過ごす教室へと向かう人物が一人。

射命丸である。

性懲りも無くあちこちパシャパシャ撮影しながら教室へと向かう。

到着したのは一年A組。

巨体の異形型に合わせて作られたと思われる大きな扉を開けて中に入り、

「どうも!! 始めまして! 清く正し」机に足をかけるな! 雄英の先輩方や机の制作者

方に申し訳ないと思わないか!?」「思わねーよ、テメエ!」どこ中だよ端役が!」
思いっきり被った。

取り敢えず一枚パシヤリ。

ここで言い合いをしていた二人の関心が射命丸に向いた。

そして取材用の手帳を取り出し、

『雄英高校ヒーロー科、初日から問題勃発!』 実は問題児の集まりか!』 つと。

「いや、待て待て待て待て待て。」

「待てや、テメエ!!」

手帳に書き込んだ時、二人からツツコミが入った。

「いきなりだな!?」 いや、確かに傍から見ればそんな感じに見えなくもないかもしれないが、
「いがー!」

「写真なんて撮ってんじゃねえよ!!」 見せもんじゃねえぞ!」 クソが!」

「……………脅しですか?」

「違う!!」

実は仲いいだろ、と思わなくも無いが、ここは華麗にスルーするのが射命丸。

「まあ、それは置いておいてですね。射命丸文と申します!」 どぞ、ヨロシク。」

「ん、む、ボ…………俺は市立聡明中学出身の飯田天哉だ。」

「るっせえ！ テメエの名前なんざ聞いてねえんだよ！ さっさと写真消せ！」

「飯田さんですね。 そっちの方はあんまりキレてると、その内高血圧でポックリ逝っちゃいますよ。 カルシウム足りてます？」

良いカモ見つけたと言わんばかりの表情でツンツン頭の同級生を煽り始める射命丸。

割とゲスい。

だが、キレやすく煽り耐性の低い割にキチンと写真を消せと言ってくるツンツン頭の同級生により、写真は削除された。

そして、飯田とツンツン頭の同級生の口論が再度勃発するかと思われたが、飯田が教室に入ってきた緑髪の男子に気が付き、口論は終了。

消した写真の代わりにコッソリもう一枚撮ろうと思っていた射命丸はガツカリである。

もう一度言おう。 ゲスい。

その後、入ってきた同級生と自己紹介をしあい、互いに取り留めの無い話をしていくと、

「お友達ごっこがしたいなら他所へ行け。 ここは……ヒーロー科だぞ。」

「ここは」と「ヒーロー科だぞ。」の間でゼリー飲料を寝袋に入っただまま飲み干すという、

よく分からない登場の仕方をしたのは一年A組の担任、相澤消太。

軽く挨拶をした担任は体操服に着替えてグラウンドに出ると言う。

戸惑いはしたものの、流石に断る訳にもいかず、全員が言われた通りに体操服に着替えて外に出た。

「全員揃ったな。これから個性把握テストを行う。」

「ええ!? 入学式は!? ガイダンスは!?!」

担任から告げられたいきなりの発言に戸惑う生徒達。

茶髪の女子、麗日お茶子が疑問をぶつけるも、ヒーローになるのならそんな暇はないと言いつ切った。

「ソフトボール投げ、立ち幅跳び、50m走、持久走、握力、反復横跳び、上体起こし、長座体前屈。中学の頃からやってるだろ? 個性禁止の体力テスト……合理的じゃない。射命丸、中学の時、50m走何秒だった?」

「えつと5秒後半でしたかね。細かいのは覚えてないです。」

(((普通に速い。)))

半分、異形型みたいなものだから、仕方がない。

「んじや、個性アリでやってみる。 フライングさえしなきや何しても良い。」

そう言われて50m走のスタートラインに付く射命丸。

クラウチングスタートの体制で合図を待つ。

「んじや、行くぞ。 よーい、」

パアンと号砲が鳴り、それと同時に翼を広げて飛び出す。

『個性』で生み出した風に乗り、一気に加速し、ゴールを通り越した。

担任の手元の機器に結果が出る。

結果は『1秒29』

その結果を見た生徒達は歓声を上げ、『面白そう』などと声を上げた。

「面白そう』か。 ヒーローになる三年間、そんな腹づもりで過ごす気であるのかい？」

よし、トータル成績最下位の者は見込み無しと判断し、除籍処分しよう。 生徒の

如何は教師の自由。 ようこそ、これが雄英高校ヒーロー科だ。」

髪を掻き上げ、ニヤリと笑う。 見方によっては悪役に見えない事もない。

生徒達が反論するも全部スルーされる。

ありとあらゆる苦難を乗り越えてこそこのヒーロー。 Plus Ultraだ、と。

自由がウリなのになぜ最初に教師の自由を押し付けられた件について

第一種目 50m走

50m走においてスピード形の『個性』持ちが求められるのは単純な速さではなく、瞬発力と加速力である。

即ちどれだけ足のバネがあるかが求められる。

走るのなら、の話であるが。

最初の射命丸のパフォーマンスのように空を飛ぶのならその限りでは無い。

空を飛べる『個性』ならどのように飛ぶのが最も加速力を得られるのかを知っているかどうかによる。

この種目において一位は射命丸。

記録はパフォーマンス時のを塗り替え1秒18。

第二種目 握力

半分、異形型の射命丸の記録は82kgw

一位には遠く及ばないが、上位には食い込んでいる。

第三種目 立ち幅跳び

そもそも飛べる射命丸にとってはどこまでも跳べるので記録は∞
無論、一位である。

第四種目 反復横跳び

普通に受けて92回。
やはり普通に身体能力が高い。

第五種目 ソフトボール投げ

一回目はボールの周りにだけ強い追い風を吹かせ続けて1729.6 m
二回目はボールを投げた後に竜巻を発生させ、ボールが竜巻から出ないようにして竜巻を動かした。

結果敷地内から出そうになり、そこで中断。

結果、二度目の∞

第六種目 持久走

スタートと同時に飛び出し、三十秒足らずでゴール。無論、息など切れていない。持久走とは何だったのか。

第七種目 長座体前屈

同クラスのお嬢様口調の女子、八百万が棒で押ししているのを見て風で押ししてみた。
結果∞

第八（最終）種目 上体起こし

これは普通にやって52回
やっぱり身体能（以下略）

個性把握テストが終了し、結果が発表される時、ソフトボール投げ以外ではこれと
いった成績を残せていない緑谷が最下位なのは誰がどう見ても明らかだった。

本人もその事が分かっているのか表情が暗い。

「んじや、パパツと結果発表。トータルは単純に各種目の評点を合計した数だ。口頭で説明するのは時間の無駄なので一括表示する。ちなみに除籍はウソな。君らの最大限を引き出す、合理的虚偽。」

相澤はハツと鼻で笑いながら結果を手元の機器から表示する。その言葉に生徒達が『はアーーー!!?』と叫ぶ。

特に最下位の緑谷は画風がオールマイトとは違う方向に崩壊している。

「あんなのウソに決まっているじゃない。ちよつと考えればわかりますわ。」

それに対して二位の八百万を筆頭に、考える余裕のあつた上位陣のほとんどが「まあ、そうだろうな。」という表情だ。

「そうゆうことだ。これで終わり。教室にカリキュラムなどの書類あるから目え通しとけ。」

総合

一位 射命丸 文

二位 八百万 百

三位 轟 焦凍

二十位 緑谷 出久

「凄いね、射命丸さん！ ∞3つ出してトップって！」

と言うのはソフボール投げで射命丸と同じく∞を叩き出した、麗日。

「いやいや、ただこういうので有利になれる『個性』だったってだけですよ！ 実際の戦闘になったら相性とかもありますし。」

とは言うものの、たとえ相性が悪くても一切負ける気のしない射命丸。

「そういえば、文の個性って何なの？ 異形型かと思えば風を操ってるっぽいし。」

そう聞いてきたのは耳郎 響香。

「私の『個性』ですか？ 『鴉天狗』です。 強個性ではあるんですが、弱点がありました

て、鯖と泳げないんですよ。」

その事に一瞬「は？」となる女子達。

「鯖と泳げない事って、どゆこと?」

と質問してくるのは異形型個性の芦戸 三奈。

「そのまんまですよ。鯖は皮膚につけば火傷したみたいに爛れますし、食べようものなら吐きます。……………血を。」

「……血を!」

「その後に弱体化です。泳げないのもそのまんまです。足の届かない所で水に浸かろうものなら、そのまま沈んで行きます。こればかりは練習しても全然治らなくて。」

夏の思い出? 山で蚊に刺されまくったことくらいですね、H A H A H A。と落ち込みながら語る射命丸。

「まあ、ぶっちゃけ私、天狗だから海より山の方が好きなんですが!」

と明るく言うも、さつきまで滅茶苦茶落ち込んでいた様子を見ていた女子達からは強がりにはしか見えず、「そっか、大変だったんだね」的な目で肩をポンポンと叩かれた。

「あや!?! 山が好きなのは本当ですよ!?!」

説得力がない。

これにて雄英高校ヒーロー科一年A組の初日は終了した。

そして二日目。

この日から普通に授業が開始され、午前中は必修科目、午後にヒーロー科特有のヒーロー学がある。

プロヒーロー、プレゼントマイクの意外と普通な英語の授業で、時々来る唐突なコールに対して射命丸だけがレスポンスを返すという事もあったが、授業は恙無く進み、昼食を食堂で食べ終えた生徒達はヒーロー学の授業を今か今かと待ちわびていた。

「わーたーシーがー!! 普通にドアから来た!!」

「そう言いながら教室のドアから入ってきたのはナンバーワンヒーロー、オールマイト。」

誰もが知り、憧れる存在の登場に教室は沸いた。

「さアて、早速だが今日はコレ!」

ババン、と効果音の付きそうな感じで出されたのは『BATTLE』と書かれたプレー

ト。

「戦闘訓練！　そして、それに伴って……こちら！　入学前に送ってもらった『個性届け』と『要望』に沿ってあつらえた……戦闘服！！」コスチューム

オールマイイトが手元のリモコンを操作すると壁から戦闘服が入ったロッカーが迫り出してきた。

「着替えたら、順次グラウンドβに集合だ！」

女子更衣室で着替えていると、話は自然と各々のコスチュームの話になっていった。

「お茶子のコスチュームもアレだけど、八百万のそれ、エロくね!?　大丈夫なのソレ!?!」
 芦戸が他の生徒のコスチュームについて話し始めた。

「ええ、要望通り。　いえ、寧ろ露出が減ってるくらいですね。」

「ええ？　それで？　文のコスチュームは、The天狗って感じだね！　似合ってるよ

！」

射命丸のコスチュームは天狗が着ているイメージのある山伏風のコスチュームである。

腰に模擬刀を挿し、手には受験で使っていた葉団扇を持っている。

因みに服のポケットの中には対衝撃性の高いカメラとビデオカメラ、手帳、ペンが入っている。

服が分からない人は『香霖堂天狗装束』で検索。

その衣装を似合つてると言いながらサムズアップする芦戸。

それに対して同じくサムズアップで返す射命丸。

「武器はその刀だけなの？」

「いえいえ、実はこの団扇、鉄扇でして。これも扱えますよ。」

透明な個性の女子、葉隠 透からの質問に対し答える。

「天狗の隠れ蓑って事で光学迷彩のポンチョも頼んだんですけど、流石に一度に頼みすぎたのか、そっちは遅れてるんですよ。」

「そっか！ 光学迷彩の服なら、私も裸になる必要無かった！」

個性を十分に活かすため、手袋と靴以外は素っ裸の葉隠がその考えは無かったと言

う。
「……………」

そんな女子達を見て、自分の胸に両手を当てて俯く耳郎。
何も言うまい。

実は身内からは『どっちかって言うとヴィラン向きの性格じゃね?』とはよく言われます!

生徒にとっても教師にとっても初のヒーロー学の授業。

オールマイトの言うその内容は屋内での戦闘訓練。

『ヒーロー役』と『ヴィラン役』でそれぞれ二人一組となり、2対2でバトル。

設定は『ヴィラン』が核兵器を所持、『ヒーロー』はそれを処理しようとしている。

ヒーロー役の勝利条件はヴィラン役の2人を拘束テープで拘束するか、核兵器に触れる事。

ヴィラン役の勝利条件はヒーロー役の2人を拘束テープで拘束するか、核兵器を制限時間まで守り切る事である。

拘束テープは体の一部に巻き付けければ、拘束判定となり、味方によつて外されるまでは行動不可となる。

コンビと対戦相手はクジで決める事になった。

その結果、

Aチーム 麗日 お茶子 緑谷 出久

Bチーム 轟 焦凍 障子 目蔵
 Cチーム 八百万 百 峯田 実
 Dチーム 爆豪 勝己 飯田 天哉
 Eチーム 射命丸 文 芦戸 三奈
 Fチーム 砂藤 力道 口田 甲司
 Gチーム 上鳴 電気 耳郎 響香
 Hチーム 蛙吹 梅雨 常闇 踏陰
 Iチーム 瀬呂 範太 葉隠 透
 Jチーム 切島 鋭児郎 尾白 猿夫
 となった。

第一戦 Aチーム ヒーロー麗日&緑谷

V S

Dチーム ヴィラン飯田&爆豪

第一戦から荒れた。

訓練開始と同時に爆豪が突貫、緑谷に奇襲をかけた。

緑谷は初撃を受けるものの戦闘を続行、爆豪を引き付ける。

その間に麗日が核のある部屋へと潜入するも、ヴィランになり切った飯田に笑ってしまい、バレルる。

両者、硬直状態になるも、先に戦闘を始めていた緑谷が動いた。

個性で麗日の真下を吹き飛ばし、その瓦礫で麗日が目隠しを兼ねた攻撃。

それに怯んだ飯田は麗日の接近に反応出来ず、核を取られてしまう。

結果、ヒーローチームの勝利。

第二戦 Bチーム ヒーロー轟&障子

V S

Iチーム ヴィラン瀬呂&葉隠

あえて言おう。 瞬殺。

障子が相手チームの場所を探り、轟がビル全体を凍らし、動きを封じた。

結果ヒーローチームの勝利

第三戦 Hチーム ヒーロー蛙吹&常闇

V S

Cチーム ヴイラン八百万&峯田

ヴイラン役の自爆で終わった。

八百万と峯田の『個性』上、正面戦闘よりもトラップを仕掛ける方が合っているが、相手が悪かった。

相手は二人共、中距離に強い『個性』

一切、自分たちでトラップに引つ掛かる事無く、逆に相手をトラップの中に引きずり込んだ。

結果ヒーローチーム勝利

第四戦 Jチーム ヒーロー切島&尾白

VS

Eチーム ヴイラン射命丸&芦戸

「ねえねえ、作戦どうする？ 二人で守る？」

「いえ。私が二人共抑えます。二人共『個性』の関係上、正面戦闘を選ぶでしょうし。

ちよつと武術齧ってるくらいでは負ける気しませんしね。」

グツグツ、と体の各部分を伸ばしながら答える射命丸。

そこに何時もの明るい笑顔は無く、代わりに獰猛な笑顔と目は獲物を狩る肉食獣のソ

レに近い。

「え?」

「それに私と芦戸さんの『個性』の相性も少し悪い。即興のコンビネーションをするくらいなら個人プレイに出た方が気が楽です。」

「あ、うん。」

その何時もは見せない射命丸の表情に気圧されたのか、言う事を黙って聞く芦戸。

「と、言うわけで万が一にも負ける気は無いですが、何かあった時のために核の近くで待機してて下さい。」

「わ、分かった。」

『READY……………START!!』

「それじゃあ、核は頼みましたよ!」

スタートの合図と共に翼を広げて一階に降りる。

そして既に入って来ていたヒーロー役の二人と出会った。

「お? えっと射命丸だっけか? 何だ、早速バトルか?」

「ええ、その通りですよ。二人共これ以上は進ませないのでそのつもりで。」

「二人同時に相手取るつもりか? やめた方が良いと思うけど?」

恐らく相手が女子だという事もあるのだろう。

親切にも先に忠告してくる尾白。

だが、

「は？ 二人では私を倒すどころかテープを巻く事すら出来ないと言ってるんですよ、私は。 さあ、手加減してあげるから本気でかかって来なさい。」

この文句が二人の闘志に火を付けた。

「上等だ。」

「後悔しても遅いからな。」

二人が拳を構える。

「後悔？ するのはどっちでしょうねえ？」

それに対し射命丸は鉄扇を左手に持ったままだけで、あくまで自然体だ。

まず切島が飛び出し、その後ろに尾白が続く。

先に来た切島の『硬化』した右のパンチを鉄扇で左側に受け流し、尾白の右の蹴りを右腕一本でガード。

後ろから頭を狙って殴り掛かってきた切島の拳を、体を斜めにして避け、尻尾を支えにして出した尾白の左の蹴りは右手に持ち替えた鉄扇でガード。

通り越した切島の腕を左手で掴み、尾白目掛けて投げる。

全身が硬化しているわけではないので軽々と。

唐突に至近距離で人が投げられて避けられる訳もなく、尾白が巻き込まれ、二人共床をゴロゴロと転がる。

「あやや、どうしました？ 大口叩いてた割には不甲斐ないですねえ？」
煽る煽る。

「クソ、あれだけ言うだけあって強え。」

先に起き上がったのは切島、だが、

「それじゃあ、ちよつとギア上げますよ？」

切島が気が付いた時には目の前に一本下駄の先が迫っていた。

とつさに硬化するも蹴りをまともに顔面に受け吹き飛ばされる。

「突風『猿田彦の先導』からの旋符『紅葉旋風』」

切島を蹴った後に立ち上がった尾白の真下に小さな竜巻を発生させ、尾白の体を浮かせる。

浮いて体制が保てない尾白の首を刈るように蹴りを繰り出す。

とつさに腕でガードする尾白だが、空中で踏ん張れる筈も無く切島同様、吹き飛ばされる。

吹き飛ばした二人に追い討ちするわけでも無く、その場で二人を見下ろす射命丸。その頃モニタールームでは『ラスボスがいる!？』と少し騒ぎになっていた。

とつさに硬化したが硬度の足りなかった切島は鼻血を垂らしながら起き上がり、ガードしても衝撃が抜けた尾白は喉を抑えて咳き込みながら起き上がる。

「どうします？ まだ続けますか？」

「つたりめーだ。」

「苦難を乗り越えてこそそのヒーローだろ？ ゲホッ。」

それを聞いてニヤリと笑う射命丸。

「ええ、ええ。 そうでしょうとも。 ですが、飽きてきたのでそろそろ終わらせませぬ

？」

「言ってるー！」

「旋風『鳥居つむじ風』」

切島が駆け出すが、それと同時に射命丸が二つの竜巻を発生させる。

「チツ！ 尾白！ 俺に掴まって屈んでろ！」

それを見た切島が全身を硬化させつつ、後ろの尾白に指示を出す。

すると硬化して重くなった切島と言われた通りしつかり切島を掴んでいた尾白は竜

巻に飛ばされなかった。

「へっ、大した事ねえっ!？」

竜巻が通り越した後、相手に話しかけようとするが、一瞬視界を潰された間に射命丸

を見失った。

それに気付くと同時に顎に強い衝撃が走り、切島の視界は暗転した。

「切島っ!? ガツ!」

そして切島が気絶した事に気付いた尾白も直後、意識を失った。

結果、ヴィランチームの勝利

講評の時間

「えー、保健室に運んだ切島少年と尾白少年。二人共、大事無かったそうさ。さつ

て講評の時間! 今回、MVPは無し! さあ、理由が分かる人!」

「はい。」

「だと思ってたよ八百万少女!」

「負けてしまった切島さんと尾白さんは、挑発に乗ってしまった事と確保テープによる確保に移らなかつた事。 芦戸さんは射命丸さんの意見をただ聞いていて自分からは

何も出来ませんでした。 射命丸さんは相手との連携を拒み、一人で突撃した事。 あ

れでは爆豪さんと余り違いがありませんわ。 それに不必要なまでに相手のお二方を

煽ったこと。 ヴィラン役に徹していたと言つてもやり過ぎですわ。」

「ンッン……！　　そうだね。　　最後に相手を気絶させたのはスマートで良かったが、ソレ以外がね！　　ところで射命丸少女、二人を気絶させた時カメラが竜巻で邪魔されて全く見えなかったが、どうやったのかな？」

そう聞かれて今までの講評の大半を聞き流していた射命丸が反応した。

「ああ、あれですか？　　竜巻で視界を封じてる間に切島さんの真下に移動して、竜巻が通り過ぎてからアゴに掌底。　　衝撃で脳を揺らしました。　　いやー、個性『硬化』だけあって硬かったですね。　　尾白さんは側頭部を蹴ってこれまた脳を揺らしました。」

それを聞いて（（普通に強い））と考える生徒達。

そんな中、爆豪と轟の二人が射命丸を鋭く睨んでいた。

「それは置いといて、オールマイト先生！」

「む、何だね？」

「今度二人つきりで取材とかしたいんですが、ですが！」

「そういう話は授業外するように。」

「だって授業以外では会えないじゃないですか。　　昨日、放課後に職員室行っても居ませんでしたし。」

「ムムムム……　　よっし、次の訓練に行こう！」

（（（話のそらし方露骨!）））

人には知られたくない事、触れられたくない事の1つや2つ……あるんですよ。

戦闘訓練のあった次の日。

雄英高校正門前には多数のメディアが押し寄せていた。

「教師としてのオールマイトはどんな感じですか？」

と、登校する生徒達に片っ端からこのような質問をしていた。

だが、生徒の殆どが無視したり当たり障りの無いコメントをしたりでメディア的には全く面白くない事になっていた。

だからと言って学生の邪魔になるのはどうなのか、という話だが。

無論、射命丸も話しかけられる生徒の一人である。

だが、射命丸はどちらかと言えばマスメディア側。

ここでマトモなコメントが無いのがどれだけメディアにとって美味しくないのかは経験済みである。

そこで、

「オールマイトですか？ やっぱりを教えた経験が余り無いみたいで教師としては少

し迪々しいところもありますが、ナンバーワンヒーローの経験から意見を言ってくれるので、ヒーロー科からすれば凄く有り難いです。」

かなりマトモなコメントを返した。

更に、ニコニコと笑いながら言う射命丸はそれなりに顔の形が整っている。

コメントも良し、カメラ映りも良し、表情も良しの三拍子揃っており、さらに、テレビに映っても別に気にしないと言う事で、今晚のニュースでは射命丸への取材が放送された。

「凄いね、射命丸さん。」

「うん？ ああ、緑谷さんじゃ無いですか。凄いつて何がですか？」

学校の敷地内に入った所で射命丸に話しかけたのは緑谷。

「何がって、あんな風にカメラを向けられても全く動揺せずにちゃんとコメントを返してたでしょ？」

「ああ、あれですか。実は私、中学の時からフリーライターをやってまして。ああいう時にマトモなコメントが貰えないのって結構辛いんですね。だから同業のよし

みと言うかなんと言うか。それに今からテレビに出てヒーロー科アピールをしておけば色々な事務所の方に知って貰えますし。」

それを聞いてハツとなる緑谷。

「そうか。そういう考え方もあった。一年の時から自己アピールを続けていればプロヒーローとして登場した時から知名度もそれなりにある筈。人気を得たいなら今の内からアピールしておかないと駄目じゃないか。それにそのアピールを事務所の人が見たら『社交性があつて人気も出やすそう』って考える筈。射命丸さんは『個性』も強いし、その制御もちゃんと出来てる。その上、ルックスも良いから多分、すぐに人気が出る。それはそうとして結局、射命丸さんの『個性』って何だ？ 最初は背中に翼のある異形型だと思つてたけど、個性把握テストの時と昨日の戦闘訓練を見てる限りでは風も操つてた。なら、異形型と風を操る個性の複合型か？」

突然、ブツブツと独り言を言い出し、傍から見れば不審者に見えなくもない。

「あのくく、緑谷さん？」

「あつ！ ごめん！ ちよつと癖みたいなので。」

「あ、はい。それで、私の『個性』が知りたいんですよね？」

「え、あつ、聞こえてた？」

「ええ、割とバツチリ。女子の皆さんにはもう話したんですが、私の『個性』は『鴉天

『狗』です。」

それを聞いて今度は鞆からノートを取り出す緑谷。

「『鴉天狗』か。そう言えば異形型の中で妖怪型って呼ばれてるのがあった。『河童』『鬼』『天狗』とかそういうのが。射命丸さんもその内の一つだったんだ。確か妖怪型はかなりの強個性だけど弱点が本当の妖怪と同じだった筈。射命丸さんは『鴉天狗』だから鯖かな。あ、でも確か『鴉天狗』って泳げないっていう風に一部地域で言われてるってネットに書いてあった。だから、射命丸さんの弱点は鯖と泳げない事？ だとしても戦闘中に鯖なんかそう簡単に用意出来るわけ無いし、飛べる射命丸さんを水中に引きずり込むのも難しい。実質、戦闘における弱点は無いことになるのか？」

二度目。

放っておいて教室に行っちゃいませうかね、と考え始める射命丸だが、これで緑谷が遅刻してもこつちが悪い気がするのでもう一度声をかけた。

「緑谷さくん。そういうのは教室についてからやって下さいね。」

「あつ。うん、そうだね。ごめん、二回も。」

「いえいえ。それと弱点、あつてますよ。」

「あつ、また聞こえてた？」

「はい。」

そんな感じでまた一日が始まった。

「昨日の戦闘訓練お疲れ。　ブイと成績見させてもらった。　爆豪、お前もうガキみたいなマネするな。　緑谷、個性の制御が出来ないから仕方ないじゃ通さねえぞ。　俺は同じ事言うのが嫌いだ。　個性の制御さえ出来ればやれる事は多い。　焦れよ緑谷。　それと射命丸。　昼休みに職員室来い。」

朝のHRが始まり、相澤から昨日の戦闘訓練について爆豪と緑谷の二人に注意が飛んだ。

爆豪は不貞腐れた表情で取り敢えず返事をし、緑谷は普通に返事をした。

そして呼ばれた射命丸は昨日の戦闘訓練の事でしょうね、と当たりをつけながら返事をした。

「さて、急で悪いが、」

ここまで言われてまた初日のように何らかのテストかと構える生徒達。

だが、

「今日は君らに学級委員長を決めて貰う。」

（（クソ学校っぽいキターー!!））

意外と普通な内容に内心で声を上げつつ、全員が手を上げる。

「静粛にしたまえ!! 学級委員長、これ即ちクラスの聖職!! ならば民主主義に則り、真のリーダーを皆で決めるといふのなら……これは投票で決める議案!」

「そびえ立ってんじゃねえか! 何故発案した!?!」

真面目な飯田が手を高々と上げながら、学級委員長は選挙で決めるべきと提案した。

「まだ会って数日しか経ってないのに信頼もクソもないわ、飯田ちゃん。」

「だからこそ複数票集めた人が相応しいとは思わないか!?! どうでしょう先生。」

「時間内で決められるんなら何でもいいよ。」

その後、八百万の個性で投票用紙と投票箱を作り、選挙を行った結果。

「僕、3票!?!」

驚きの声を上げた緑谷が得票数3で1位となった。 2位は、2票獲得した八百万。

「うん、まあ納得の行く結果ではありますね。」

そう言うのは自分で自分に入れた射命丸。

やっぱりイメージして大事ですよね、と昨日の戦闘訓練での事をほんの少しだけ後悔しながら話す。

反省は一切していない。

投票の結果により、学級委員長は緑谷、副委員長は八百万が務める事となった。

そして昼休み。

殆どの学生が食堂に向かう中、今朝のHRで担任から呼び出しをくらった射命丸は職員室に向かっていた。

職員室の前で一呼吸つき、ドアをノックする。

「失礼します。相澤先生はいらっしゃい……………」

そこで言葉が止まった。

何せ入ってすぐの所に寝袋に入った担任が転がっていたからだ。

「来たか。こっちだ。」

そう言って寝袋から這い出し、面談用の小さな部屋に連れて行かれる。

そこで机を挟んで、互いに向き合うように椅子に座る。

「今日呼んだのは他でもねえ。昨日の戦闘訓練、何で遊んだ？」
『遊んだ。』別に言葉通りの意味ではない。

相澤の言ってるのは『何で瞬殺できる実力があるのに瞬殺しなかった？』と聞いているのだ。

「それにだ。あの時のお前、あっちが素だな？ 性格を直せとは言わん、ただやり方を直せ。あの時のお前は『ヴィラン役』じゃなく『ヴィラン』そのものに見えたぞ。」

『ヒーロー』を目指すものとして、昨日の戦闘訓練における戦い方、『自分の力を必要以上に見せつける』戦い方はいけない。

必要とされるのは『最速でヴィランを捕獲する』戦い方。

これは合理主義者たる相澤消太だけでは無く、全てのヒーローが心がけている事だ。

「何か反論はあるか？」

「……………いえ……………何も。」

「嘘を言うな。合理的虚偽以外の嘘は全部不合理だ、面倒だからって、」

「うるさい!! 何も知らないクセに知ってるかのように話すな!!」

突然の態度の豹変。

それを目の当たりにした相澤は今更ながらに後悔した。

『そう簡単に踏み込んではいけない所に踏み込んだ』と。

「あつ……………すみません。」

「いや、俺も悪かった。今のは忘れてくれ。ただ、戦闘時に手加減なんかするな。それだけだ。」

「はい。失礼しました。」

そう言つて射命丸は逃げるかのように職員室から出ていった。

「へい、イレイザー、何があつた?」

それを見て相澤に話しかけてきたのは同期のプロヒーロー、『プレゼントマイク』こと山田ひざし。

「……………ちよつとばかり面倒な生徒が増えたつてだけだ。」

後で射命丸の個人データを再度よく探ってみよう、と考える相澤だったが、

ジリリリリリリリ!!

突然鳴り出した激しい警報。そして、

『セキュリティ3が突破されました。生徒の皆さんは速やかに屋外へ避難してください。』

そのアナウンスで職員室内が一気に慌ただしくなった。

「俺と山田が侵入者の対処に当たる! それ以外は生徒の安全確保! 急げ!」

より早く状況を理解した相澤が指示を出し、近くにいた山田と共に駆け出す。

「オイオイオイオイ、侵入者？ 冗談だろ？」

「冗談だったら良かったんだがな。おい、セキュリティルーム！ カメラには何が映ってる!？」

教師に配られた小型通信機で校舎内のカメラの映像がリアルタイムで表示されているセキュリティルームと通信する。

『それが、正門付近のカメラは全て壊されていて、侵入者がまだ確認出来ていません!』
「チツ、なら校庭のカメラは!？」

『いえ、まだ映って、いや！ 今映りました！ これは……………マスコミ!』

「ハア!? マスコミだあ!？」 マスコミがどうやったたらセキュリティ3なんか突破すんだよー。」

「それは後だ。セキュリティルーム、警察を呼べ。マスコミは下手なヴィランよりタチが悪い。」

『はい、既に呼びました。後、数分もすれば到着すると思います。』

「(苦勞)。」

通信を終えたところで校庭に出てマスコミの対処を始める相澤と山田。

だが、その間にヴィランの魔の手が雄英高校に迫って来ていた。

気分が落ち込んだ時は何時もの自分のマネをしてみると意外と効果があったりするんですね。

夢を見た。

ずっと昔の事。

何もしていないのに、何もする気は無いのに、イジメられた。

殴られ、蹴られ、罵られ、そして見下された。

ずっと昔の事。

最近になって漸く忘れられて来たのに。

ホラまた、殴られ、蹴られ、罵られ、ああ、そう言えば思いっきり嘔み付かれたこともあったつけ。

そして、また『見下される』

何で何もしていない私が『ヴィラン』で私を虐めた奴等が『ヒーロー』なのか。

分からない。分からないけど、1つだけ決めた。

見返してやるんだ、お前らより私の方が強いんだぞって。

私が『見下す』側でお前らは『見下される』側なんだぞって。

そしたら、きつと、きつと

「バスの席順でスムーズにいくよう番号順に二列で並ぼう！」

急に聞こえた大声にハツとなる射命丸。

（いけないいけない。今朝のは相澤先生に変な事言われたから変な事思い出しちゃっただけ。今の私には関係ない。）

「む、射命丸さん！ 君は番号的にこつちだ！」

「あつ、すみませ〜ん！ 今行きます！」

そう自分に言い聞かせ、普段の自分を演じる。

（あの時とは違って、私を本当に理解してくれる人が三人もいる。だから、大丈夫。）

バスに乗り、今回のヒーロー学の授業、『救助訓練』を行う会場に向かう一年A組一同。因みにバスは飯田の予想していた観光バスタイプではなく、市バスタイプなので並んでいたのは全く意味が無かった。

そんな中、射命丸は後ろの方の席で窓の外の景色を見ながらぼーっとしていた。

「……………さんっ、射命丸さん!」

「あっ、はいはい。 どうしました?」

自分が呼ばれてる事に気が付き、慌てて返事をする。

「文ちゃん、大丈夫? 体調が悪いなら今日のヒーロー学は見学してたら?」

そう言うのは蛙吹梅雨。

「いえいえ、大丈夫ですよ。 酔いそうだったので外を見てたら、ちよつとボーッとちやつて。」

「そう? なら良いけど、無理は良くないわよ。」

「ええ。 ご心配おかけしました。 それで、何の話ですか?」

「皆で『個性』の話してたんだけど、射命丸の『個性』って強えし、ハデだよなつて!」
そう言うのはこの前の戦闘訓練で射命丸に倒された切島。

「どうやら、あの時の事は余り気にしていないようである。

「ああ、そういう話ですか。まあ、これでも私、結構小さい頃から『個性』の訓練は続けてまして。威力、範囲、精密性の3つはそれなりのレベルにあると自負してます。」

フン、と胸を張りながらドヤ顔で答える射命丸。

その胸をガン見する峯田。

直後、

ゴッ!!

と低い音となり、峯田の頭にタンコブが一つ出来上がっていた。

「天誅。」

そう言うといつの間にか峯田の真横に移動していた射命丸が自分の席に戻る。

そんな射命丸に女子全員からサムズアップが送られた。

巨大なドーム状の建物の前でバスが止まり、相澤に引率され中に入ると、そこは高台になっており、遠くの方に燃え盛る街、巨大な湖、吹雪いている山など多くの災害を模したエリアが見える。

「スッゲー！　USJみてえ！」

「水難事故、土砂災害、火事、e t c。あらゆる事故や災害を想定し、僕が作った演習場です。その名も、ウソの災害や事故ルーム！」

((((USJだった!)))

そう説明しながら現れたのはスペースヒーロー、13号。

宇宙服を模した格好のコスチュームを着ており、その素顔は不明だが、個性『ブラックホール』を駆使して、人々を災害から救い出す、救助専門のヒーローである。

そんなヒーローの登場にヒーローオタクの緑谷は勿論、13号のファンである麗日が強く反応する。

「えー、訓練を始める前に、お小言を一つ二つ……三つ四つ」

増えていく小言に困惑しながらも生徒達は真面目に13号の話に耳を傾ける。

13号の個性『ブラックホール』は勿論のこと、今の社会の中には簡単に人を傷つけられる個性が多い。

各々がそんな個性を持っていることを忘れないように、と言う。

また、そんな社会の中、個性を人を傷つける為ではなく、人を助ける為に使うのがヒーローである。

この前は戦うために個性を使ったが、今回は真逆。

人を助けるための個性の使い方を学んで欲しい、と締めくくった。

生徒達がそのスピーチに熱い拍手を送り、早速訓練を始めようとする相澤だったが、何かに気が付いたかのように振り返る。

それに釣られて生徒達も相澤の視線の先を見ると、階段を降りた先にある広場の噴水の前に黒い煙のようなものが漂っていた。

あれは何だ、と誰もが考える中、その煙は突然広がり始め、その煙の中から悪意に濁った目がこちらを見た。

「一塊になって動くな！ 13号、生徒達を守れ！」

煙の中から次々と人が現れる。

が、生徒達はイマイチ状況が掴めず、これも訓練なのかと思うが、

「動くな！ あれは、ヴィランだ!!」

「どこだよ、オールマイト。折角こんなに大衆引き連れてきたのにさ。子どもを殺

せば来るのかな？」

相澤の焦った声と、相手の悪意に満ちた声。

その二つが否が応でも生徒達に現実を叩き付ける。

本物のヴィランが襲って来たのだと。

「ヴィランン!? バカだろ！ ヒーローの学校に入り込んでくるかフツー!!」

「何にせよセンサーが反応してねえのなら、向こうにそういう事が出来る個性のヤツが

いるって事だな。バカだがアホじゃねえ。これは何らかの目的があつて用意周到に画策された奇襲だ。」

冷静に判断した轟。

その言葉で場の緊張感が一気に増した。

「ああ、恐らくそうだな。だが、今は……13号、避難開始！ 学校に連絡試せ！ センサー対策も頭にあるヴィランだ。電波系の個性が妨害している可能性もある。上鳴、お前も個性で連絡試せ！」

「っス！」

言われた上鳴は慌てながらも個性『放電』を利用した連絡を試す。

だが、どんな手で連絡を試そうとも一向に繋がらない。

「射命丸！ 学校まで全速力で飛んで応援引き連れて来い！」

「了解！」

言われて個性によるフルブーストで飛び出す射命丸。

だが、

「おっと、いけないいけない。」

（チツ、射命丸の風で一瞬目を瞑った瞬間に一番厄介なのに抜けられた！）

射命丸の進行方向に黒いモヤが現れ、その中からモヤに包まれたヴィランが出てき

た。

(これ以上前後を塞がれては敵わん！)

「13号！ そつちは任せる！ 生徒達を引き連れてとつとと避難しろ！」

「先生は!!? 一人で戦うんですか!!?」

相澤はゴーグルを着け、首元に巻いている捕縛武器を構えるが、緑谷はそんな臨戦態勢をとつた相澤を引き留める。

「一芸だけじゃヒーローは務まらない。俺の心配はいらん。行け！」

そう言うのと相澤は階段を飛び降り、ヴィランの集団に向かつていった。

勿論、迎撃しようとするヴィランだが相澤の個性『抹消』により個性を消されて混乱する。

相澤はそんなヴィランを次々と倒していく。

「すごい！ 多対一こそ先生の得意分野だったんだ。」

「分析してる場合じゃない！ 早く避難を！」

そう言われて避難を始める緑谷。

だが、その先にもヴィランはいる。

「オールマイトをお探しの様ですが、彼なら居ませんか？ 目的を達成できないなら

帰ったらどうです？」

「ええ、そのようですね。 ですが、ここまで来て何もせずに帰るといいうのもヴィラン連合の名折れ。 居ないなら居ないで、やる事もあるという事です。」

今は射命丸が話に持ち込んで時間稼ぎをしているが、何時こちらに牙を剥いても可笑しくない。

（私はどちらかと言えば吹き飛ばす事に特化してる。 あのモヤの性質が分からない以上、無闇に吹き飛ばすより13号先生に任せたほうが良い。）

そうして時間稼ぎをしている内に13号と生徒達がやって来た。

「さて、初めまして。 我々はヴィラン連合。 僭越ながらこの度ヒーローの巣窟、雄英高校に入らせて頂いたのは平和の象徴、オールマイトに息絶えて頂きたいと思つての事です。 まあ、肝心のオールマイトは居ないようですが、 ですが、それとは関係なく私の仕事はこれ。」

そう言うとうヴィランの体から少しずつモヤが広がり始める。

それを見た生徒達は後ろに下がる。

だが、

「その前に俺たちにやられる事は考えてなかったか!？」

「ダメだ! ときなさい二人とも!」

切島と爆豪が先手必勝とばかりに飛び出し、ヴィランに攻撃した。

だが、そこは13号の『ブラックホール』の射線上。

「危ない危ない。そう、生徒といえど優秀な金の卵。だからこそ、散らして、嬲り、殺す。」

爆豪の『爆破』によりモヤが少し散らされるも、すぐに元に戻り再度姿を表すヴィラン。

モヤが急速に広がり、生徒達を包み込んだ。

爆豪と切島がいるせいで本気で『ブラックホール』を使う訳にもいかず、周囲のモヤだけを吸い取る13号。

暫くするとモヤは晴れたが、13号と13号の近くにいた数人以外は全員居なくなっていた。

トラウマ

USJ 吹雪・高山ゾーン

ここに射命丸は一人だけで送られた。

周りには既に何十人もヴィランが待ち構えており、傍から見れば絶対絶命、だが、
「全くあの二人は。私は何のために攻撃しなかつたと思ってるんですかね。」

頭を抱えて愚痴を言っていた。

「送られた先は私一人。しかも相手は沢山。あくろあ、面倒臭いですねえ。」

その舐め切った態度にただ個性を持って余しているだけのチンピラが苛つかない筈も
無く、

「舐め腐ってんじゃねえぞ、クソガキがあ！」

襲いかかって来た。

「風神『風神木の葉隠れ』改め、風神『風神雪隠れ』」

それを見た射命丸は風で雪を舞い上げ、姿を消す。

射命丸の姿を見失い、動きを止めたヴィランに延髄蹴りを叩き込む。

その蹴りで失神したヴィランを一瞥した射命丸は笑顔で

「それじゃあ、お次にこうなりたい方、いらっしやいましたら前へどうぞ。」
煽った。

それを聞いて一斉に襲いかかって来るヴィランを見て、
「団体様のご案内つと。」

ニヤリと笑った。

数分後。

「クソ、化け物か、よ。」

「……………」

雪山に配置されていたヴィラン全てを制圧した射命丸。
だが、その顔は曇っていた。

射命丸にとって『化け物』『ヴィラン』の二つは禁句。

本当に親しい者以外が言おうものなら強い拒否反応を見せる。

「化け物なんかじゃない。」

「いや、お前は化け物だ、ヒーローの卵。」

自分に言い聞かせるように言う射命丸だが、どこかに隠れてた一人のヴィランがその言葉を否定する。

「まだ一人いましたか。それと訂正して貰いましょうか。私は化け物なんかじゃない。」

「いや化け物さ。何十人もの相手をたった数分で一人で制圧。これを化け物と言わずして何と言う？」

「黙れ。」

ヴィランの言葉が何故か自分の耳に強く残る。

「いや、黙らないね。お前は化け物さ。俺達みたいなチンピラよりよっぽどヴィランっぽいな。」

「黙れ……！」

何故か昔の事を強く思い出す。

ずっと昔の事。心の奥底に沈めたはずの事。

「そうさ、何度でも言ってもやろう。お前はヴィランで化け物だ。この妖怪。」

その一言で昔の記憶が完全に蘇った。

『なあ、知ってるか？ コイツの個性って妖怪なんだぜ。なんだってさー！』

妖怪って悪い事する化け物

『本当!? じゃあ、こいつヴィランじゃん!』

『じゃあじゃあ、俺達がこいつを倒せば俺達ヒーロー?』

『ああ! ほら、ヴィランを倒すぞ!』

『おおー!!』

そう言われて急に殴られた。

イヤだったから抵抗した。

その時から他の子より強かったから三対一でも勝って。

そうしたら、先生も皆も私が悪いみたいに言ってきた。

今度は十人くらいに殴られた。

ボコボコにされて、『見下された』

『ヴィランだ』『化け物だ』と言われた。

『俺達ヒーローの勝ちだー!!』

黙れ、そんなのヒーローじゃない。

『ヴィランめ、思い知ったかー!!』

いた。

「私はヴィランでも化け物でも無い。」

自分に言い聞かせる。

「私はヒーローだ。」

だからヴィランを倒さないと。

ヒーローだと証明しないと。

ふらりふらりと歩き出した。

確か入って来た広場に一杯ヴィランがいた。

それを倒せば、きつと、

USJ 水難ゾーンの端

「個性を消せる。 素敵だけどなんてこと無いね。 圧倒的な力の前では、ただの無個性なもの。」

モヤに包まれたヴィランにより水難ゾーンに飛ばされた蛙吸、緑谷、峰田の三人は水難ゾーンに配置されていたヴィランを行動不能にし、噴水広場の付近まで戻って来た。

だが、そこで信じられない、否、信じたくない光景を目の当たりにした。

見えたのは脳をむき出しにした異形型と思われる個性のヴィランの下敷きになり、腕をへし折られた相澤の姿だった。

「死柄木 弔。」

「黒霧か。」

そこに黒いモヤのヴィラン、黒霧がヴィランが現れた時と同じ様に黒いモヤの中から現れる。

「13号はやったのか？」

「行動不能にはできたものの散らし損ねた生徒がおりまして、一名逃げられました。」

「は？　　はあ……………黒霧。　お前がワープゲートじゃなかったら粉々にしてたよ。」

黒霧からの報告に不機嫌そうに首を掻き巻るヴィラン達のリーダー格と思われる男、死柄木。

「さすがに何十人ものプロ相手じゃ敵わない。　あくあ、今回はゲームオーバーだ。帰ろっか。」

「アイツ、今、帰るって言った？」

そう言うのは峰田。

ヴィランの呟いた言葉に、これでヴィランの襲撃も終わりだと喜ぶ。

「でも、何で急に。　不気味だわ。」

「うん、ここまで来て何で。　これじゃあ、雄英の警備レベルを上げるだけだ。」

「そんな事どうでも良いよ！　これで助かるんだ！」

その言葉に警戒心を抱く緑谷と蛙吸だが、峰田はヴィランの言葉を信じ、喜んでいる。

「ああ、でも……………帰る前に平和の象徴としての矜持を、少しでも…………」

そう言いながら悪意に満ちた目を緑谷達に向け、

「へし折って帰ろう。」

気が付いたら目の前にまで接近されていた。

死柄木の手が蛙吸の顔に迫る。

それを見た緑谷はこの先の未来が簡単に予測できてしまった。
先程の相澤の戦闘時。

相澤の肘鉄を手でガードし、掴んだだけで相澤の肘がボロボロに崩れ始めた。
そんな個性を顔に使われたら、

だが、意志とは関係なしに身体は動かさず。

ただ、手が触れるのを見ているだけだった。

指の先から手が蛙吸の顔に触れる。

が、

「ホント、カッコいいゼイレイザーヘッド。」

何も起こらなかった。

相澤が巨漢のヴィランに取り押さえられながらも個性を発動。

死柄木の個性を抹消していた。

が、巨漢のヴィランに顔を地面に叩き付けられ、個性の効果が無くなった。

と、同時に死柄木が急に居なくなった。

その代わりにそこに現れたのは、足を振り抜いた射命丸。

「射命丸さん！」

緑谷が急に現れた射命丸の名前を呼ぶ。

だが、射命丸に一切の反応は無い。

何か様子がおかしい、そう思った時、それなりに強い風が体に当たるのを感じた。

「これは、射命丸さんの個性……？」

よく見れば射命丸を中心に風が渦巻いている。

「クソツッ！ 何だあのガキ!? 脳無の反応速度が追い付かなかっただど!」

蹴られた死柄木が脳無と呼ばれた巨漢のヴィランに抱えられ、悪態を吐く。

脳無には死柄木が攻撃を受けそうになった時に何よりも優先して死柄木の壁になるようにインプットされている。

だが今の一撃、死柄木は射命丸の蹴りをマトモに喰らった。

自分が反応できなかったのならまだ話は分かる。

だが、『先生』に貰った脳無が学生如きに反応出来なかったなどあつてはならない。

故に、蹴られた事に対する怒りよりも焦りが先に出た。

「脳無！ あのガキを殺せ！」

脳無へと指示を出す死柄木だが、相手が悪かった。

今の射命丸は一種の『ゾーン』に入った状態である。

戦闘訓練の時のような慢心は無く、余計な思考も無い。

ただ、今射命丸の頭の中にあるのは『どうしたら最速で敵を潰せるか。』

それだけである。

故に『ちよつと自分よりも速い』程度の愚直な攻撃など避けてカウンターを叩き込む程の余裕がある。

脳無の真つ直ぐな左ストレートを体一つ分横にずれるだけで躲し、その拳圧で生まれた風も個性で無効化する。

そして鳩尾に重い一撃を返す。

「？」

だが、その感触がおかしかった。

そして射命丸のカウンターが無かったかのように右のフックを出してきた。

それを飛び上がって回避し、今度は側頭部に本気の蹴りを叩き込む。

が、これも先ほどと同じような手応え。

それを感じると同時に上空に離脱した。

「ツハハハハハハ!! どうだ『先生』の作った脳無の『ショック吸収』の個性は!？」

『ショック吸収』、それを聞いて、なるほどと納得する射命丸。

『ショック』吸収』である以上、吸収出来る衝撃には上限がある筈だが、取り敢えず自分にはそれを超えられそうには無い。

故に攻撃方法を変える。

葉団扇を手に取り、風を操る。

「魔獣『鎌鼬ベーリング』」

幾つもの目に見えない真空の刃が飛ぶ。

個性が『ショック吸収』なら斬撃には弱いはずと考えての技である。

幾ら改造に改造を加えた脳無とは言え、目に見えない攻撃を避ける事は出来ない。

四肢を斬られ、その場に倒れ込んだ。

それを見て、信じられないという目をする緑谷達。

簡単に相手の命を奪えるような攻撃を一切表情を変えること無く、淡々と行った。

「チツ、何やってる脳無！ さっさと起き上がれ！」

それを聞いて脳無の方を振り返ると斬れた筈の手足が再生していた。

「『ショック吸収』の個性に『再生』の個性!?! どうなってるんだ?!」

「もしかしたら誰かがあの脳無ってヴィランを回復させてるんじゃないかしら。」

驚く峰田に『一人で二つの個性を持つ』以外で一番可能性のある予想をする蛙吸。

だが、緑谷がそれを否定する。

「そんな個性、ありえない。あの脳無って奴に直接触れてもいないのに斬られた手足

が再生するほどの回復を与える個性なんて。リカバリーガールの『治癒』ですら直接

触れる必要があるのに！」

「なら、」

急に聞こえた射命丸の声に、射命丸の方を見るが、そこには誰もいない。「先にこつちを潰す。」

先程から脳無に指示を出していた死柄木の前に現れた。その手は腰の模擬刀に伸びている。

「死柄木 弔！」

それを見てその攻撃を阻もうとモヤで死柄木を包もうとする黒霧。

そのモヤを風で吹き飛ばし、攻撃するための視界を確保する。

だが、その一瞬で脳無が立ちはだかる。

そしてまた、射命丸と脳無の戦闘が始まる。

「緑谷あ!!」

「あ、相澤先生!? そうだ、射命丸さんと脳無が戦ってる今の内に。 蛙吹さん！」

「ケロ、梅雨ちゃんと呼んで。」

相澤から呼ばれた緑谷が蛙吹に指示を出し、蛙吹の舌で相澤を助け出す。

「大丈夫ですか、相澤先生。」

「大丈夫ではない。 そんな事より聞け。 理由は知らんが今の射命丸は暴走状態に近い。

正氣に戻すか意識を奪え! 今は脳無とかいうヴィランと戦ってるから良いが、

さつきのを見たろ。」

そう言われて何の躊躇も無く脳無の四肢を斬り落とした時の事を思い出す。

「相手が『シヨック吸収』と『再生』の個性だから良かったが、戦闘が長引けばその他のヴィランを殺しかねない！ そうなればもう後戻りは出来ない。相手がヴィランだとしても『人を殺した』という事実がついて回る。下手をしたら射命丸自身がヴィランになる！」

「そんな事言ったってどうやって。」

「知らん。出来れば気絶させるのが一番なんだが……」

チラリと脳無と射命丸の戦闘を見れば、既に目では追えないスピードで戦闘が行われている。

「あの中に突っ込むなんて自殺行為だ！」

「ああ、それにあそこで射命丸を気絶させたら射命丸が殺される。脳無を引き離し、射命丸を気絶させる。戦闘特化の奴が最低でも二人は必要だ。」

（どうする!?! 考えろ。射命丸さんの個性は『鴉天狗』 水中に落とせば泳げないからそれで気絶させる事が出来るかもしれない。けど、あの脳無って奴は？ 個性は『シヨック吸収』と『再生』 打撃には滅法強い。OFA100%ならダメージが通るかもしれないけど、それで倒せなかつたらダメだ。せめて脳無の動きを止められる個

性があれば。）

その時、周囲の気温が一気に下がった。

「これは……………どうなってるんだ？」

聞き覚えのある声、そして下がった周囲の気温。

そこから導き出された答えは

「轟くん！」

「緑谷か。どんな状況だ、コレ。取り敢えず射命丸諸共、足を凍らしちまったけど良

かったのか？」

そう言われて射命丸の方を見れば、確かに脳無と射命丸の動きが足を脛まで凍らされて止まっている。

「ッー」

氷から抜け出そうと藻掻く射命丸だが、そんな射命丸に轟が声をかける。

「やめとけ、芯まで凍らした訳じゃねえが、無理に抜け出したら皮が剥がれるぞ。」

「何だ、皮が剥がれるだけか。脳無。」

轟の言葉を聞いた脳無が無理やり氷から抜け出す。

皮が剥がれるがすぐに再生した。

「マズいッ!! 射命丸さん!!」

それに気付いた緑谷が声を上げる。

脳無の拳が今度こそ完全に射命丸を捉えた。

アツパーが腹に入り、殴られた射命丸は綺麗な弧を描いて緑谷達の頭上を通り過ぎ、水難ゾーンの人口湖の中に落ちた。

大きな水飛沫を上げ、それが収まった時には既に水面に射命丸の姿は無かった。

「蛙吹!!」

一番早く我に返った相澤が指示を出す。

「行け!!」

「はい! 文ちゃん!!」

指示を出された蛙吸が水中に飛び込む。

「あくあ、手間かけさせやがって。でも、まあ、あのガキ流石に死んだろ。これで平

和の矜持も押し折った事だし、今度こそ帰るか。黒き」

「そこまでだ!! ヴィラン共!!」

射命丸を脳無が吹き飛ばしたのを確認すると、今度こそ帰ると言う死柄木だが、その瞬間にUSJの入り口にある分厚い鉄板のドアが吹き飛ばされた。

「すまない、遅れたな。だが、もう大丈夫。何故って?」

入り口からの逆光を受け、そこに現れたのは平和の象徴、ヒーローの中のヒーロー。

「私が来た!!」

「いや、コンティニューだ。」

オールマイト。

それを見た死柄木は再度、その目に悪意を乗せ、怪しく笑った。

射命丸文 オリジン（仮）

個室に鳴る電子音。

個室に置かれたベッドの上には射命丸が眠っている。

ヴィラン連合による襲撃を何とか撃退した雄英高校は襲撃後にすぐさま射命丸を病院へと運んだ。

リカバリーガールに治療してもらうのは気絶した射命丸の残りの体力が全くの不明だった為却下され、病院に運び込まれたのである。

射命丸の怪我は肋骨七本完全骨折、二本にヒビと幾つかの内臓への損傷、吹き飛ばされた時に無理矢理に氷から足が抜けたことによる足の皮膚が剥がれた事。

妖怪型という素の身体能力が高く、その場にいた誰もが気付かなかったがパンチの威力を風で幾らかか殺した事により、奇跡的にもこれだけで済んだ。

脳へのダメージは無いので襲撃から一日たった今頃は目を覚ましていてもおかしくは無い。

だが、目を覚まさない。

「医者には何か強い精神的ストレスを短期間に大量にかけられた事によつて脳が起きるのを拒否している、と言われました。」

その病室で包帯を巻いた相澤は射命丸の母と向かい合つて話をしていた。

「そして射命丸が飛ばされたと思われる雪山ゾーンには一人、精神干渉型の個性を持っていたヴィランがいました。」

山から落ちて死にかけだったが、と心の中で続ける。

「さらに、射命丸の個人データを探つてみたらまだ保育園の時、イザコザがあつた様ですね。その時の話を聞かせては貰えませんか？　そこに、射命丸のトラウマがあるんですよね？」

「……………はい。ですが寝ているとはいえ本人のいる所で話すのはアレなので場所を変えましょう。」

雄英高校の臨時休校が終わり、生徒達は何時もの様に教室に集まっていた。

だが、その目線は空席になっていて射命丸の机に向けられていた。

誰も何も言わないが、互いに考えている事は分かっている。

H Rの開始を告げるチャイムと同時に相澤が教室に入ってきた。

包帯を巻き付けた痛々しい姿ではあるものの、復歸の速さに生徒から驚きの声が上が
る。

「先生！ その、射命丸さんは」

「無事だ。 怪我も俺より軽い。」

麗日が気になっていた事を質問し、返ってきた相澤の答えにホッとする。

「だが、目を覚まさない。 医者は精神的な理由だつて言ってる。」

「それは、どういう意味ですか？」

相澤の言葉に疑問を持った八百万が質問をするも

「悪いが、それは俺からは言えない。」

相澤は答えない。

何故ならそれは射命丸の個人的な問題である。

本人や親しい人が話す分には構わないが、ただ担任だけの相澤の口からは言えな
かった。

「病院は〇〇病院だ。見舞いに行きたいなら行け。ただし、迷惑にならないようにな。」

と、そこで一旦区切り、

「それはそれとして、だ。戦いはまだ続いている。」

「まさか、またヴィランが………！」

「雄英体育祭が三週間後までに迫ってる。」

「……クソ学校っぽいの来たあ!!」

相澤の言葉に『ヴィランの襲撃があつたのにやるのか』と聞く峰田、それに警備を例年の5倍にすることで開催を決定したと答える相澤。

「それと轟、後で職員室来い。」

呼ばれた轟が昼休みに職員室に行くと、射命丸が呼ばれた時と同じ様に入ってすぐの

所に相澤が寝つ転がっていた。

そして個室に入り、会話が始まった。

「この前のヴィラン襲撃の時の射命丸の件だが、気にしてるか？」

「はい。」

寧ろ気にしてなかったら駄目だが。

「あれはお前は悪くない。 タイミングが悪かったただけだ。 忘れろとは言わんが必要

以上に引き摺るなよ。」

「はい。」

「それだけだ。 手間取らせたな。」

「いえ、失礼しました。」

数十秒で面談は終わり、轟は職員室から出て行った。

その後ろ姿を見て、暫くの間は気にしてようと考える相澤。

射命丸の入院している病院。

そこに雄英高校一年A組の爆豪以外の一同が揃っていた。

普段、放課後に何かあってもすぐに帰る轟が来たことに一同に少し驚きがあつたが、

爆豪のように言動が悪い訳では無いので、すぐに収まった。

受け付けで射命丸の病室の場所を聞き、その前まで来た。

スライド式のドアを開け、中に入ろうとするが既に先客がいた。

青い服を来た、一見小学生に見えないこともない女子。

白髪に獣の耳と尻尾、そして白い翼を生やした女子。

そして、射命丸と同じ様に黒い翼を背中に生やした女子。

「「「「……………どちら様ですか？」」」」

全員の声が重なった。

病室にいた三人の先客は射命丸の親戚だった。

従兄弟の姫海棠 はたて、再従妹の犬走 椀、そして一言では言い表せないほど遠縁の河城 にとり。

この三人は射命丸の無駄に多い親戚の中でも年が近く、特に仲の良い三人だった。

「はー、なるほど文の同級生なのね。」

と缶のジュースを飲みながら話すのは河城。

「それでお見舞いですか。 雄英高校の体育祭も近く、忙しい中ありがとうございます。」

「いや、クラスメートが大怪我を負ったんだ。 これくらいは何でも無いです。」

と、真面目に礼を言う犬走にこれまた真面目に返す委員長の飯田。

因みに姫海棠は部屋の方でガチガチに緊張している。

何を隠そうこの姫海棠、引き籠もりである。

通信制の高校を利用してはいるが、普段から余り外に出ず、会話も家族や射命丸、犬走、河城くらいとしかしない、典型的なコミュ障である。

「はたては……………いつものか。」

「いつものつて?」

「コミュ障。」

「(((ああ、そういう事。)))」

河城の言葉に切島が質問し、その答えに納得する一同。

「それにしてもデツケー病室だよな。これで個室?」

A組十八人に加え、姫海棠、犬走、河城の三人の合計二十一人が全員入って余裕のある部屋である。

「うん? だつてここVIPルームだもん。気付かなかつたの?」

「!!!……………はああ!!」

VIPルームという言葉に驚くが、そこら辺は雄英高校側が誠意を見せたって事かな、と思ひ直す。

「流石は雄英、一生徒の為にVIPルームを取るなんてな。」

そう言う瀨呂だが、

「いえ、違いますよ? VIPルームなのは私達の方にツテがあっただけですし。」

「え、ウソ、文つて意外とお嬢様のな?」

病院のVIPルームをツテで使つてると聞き、実は八百万的なのかと考える耳郎。

「いんや、違うよ。無駄に親戚が多くてさ。ツテとかはあつちこつちにあるんだよ

ね。」

「この病院の院長先生が文さんの父の従兄弟の伯父の次男の人と仲が良いみたいで。VIPルームを使わせてくれたんです。」

それはそれで凄いと思う。

「ところでですが、相澤先生、私達の担任の先生からは文さんが目覚めないのは精神的な理由があると聞いたのですが、どういう事が分かりますか？」

そう切り込んだのは八百万だ。

「さあ？ 精神干渉型の個性持ちにトラウマでも引つ張り出されたんじゃないの？」

「トラウマ？」

トラウマと聞き、反応したのは轟だ。

「あゝ、それは教えて良いのか悪いのか。はたてはどう思う？」

「ここで私に振るの!？」

「え、だって権が中立な意見なのは目に見えてるんだもん。」

「だからって私に振らなくても良いじゃん！」

「あゝ、ソウデスネ。で、どう思う？」

「ツツツ!! ……ハア。教えても良いんじゃないの？ 見ても悪い人達には

見えないし。」

「じゃあ、文に何か言われたらはたての責任ね。」

「はあっ!? 何でそうなるのよ!」

「椀、任せた。」

「任されました。」

「そこで椀に頼むとか卑怯よ!」

「は、はい、話の邪魔になるので少し静かにしていきましょうね、はたてさん。」

「むぐぐぐ!! むぐぐぐ!!」

犬走に口を抑えられ、文句を言いたくても何も言えない姫海棠。

ここまでのやり取りを見て姫海棠がイジられ役なんだと気付く。

「は、はい、ホントに静かにしててねはたて。 結構真面目な話なのは分かるでしょ?」

「むぐぐぐ!!」

「……………椀、鼻はつままなくて良いよ?」

「あつ。 す、すみません、はたてさん。」

何かコントを見てる気分になるA組一同。

「そんじゃあ、今度こそ始めよつか。」

私達が初めて会う前の事だね。

保育園に入りたての頃って聞いたから、今から十年以上前か。

簡単な話、イジメられたんだよ。

ほら、『鴉天狗』って妖怪の名前じゃん？

で、男の園児の一人が親にでも聞いたんだらうね、「妖怪ってなに？」って。

まあ、妖怪なんて世間一般的には『悪い事をする化け物』の総称なわけだ。

だからそんな妖怪の個性を持つ文は『悪い事をする化け物』で悪い事をするから『ヴィラン』なんて連想されちゃったんだよ。

だから殴つても蹴つても良い。

倒したら自分たちが『ヒーロー』だ、なんて考えたんだらうね。

最初は三人にいきなり殴られた。けど、個性が半分異形型みたいなもんだからね。

勝っちゃったんだよ。

まあ、そしたら三人の男の子に勝っちゃった文は他の子や、保育園の先生からも怖が

られるわけで。

今度はそれ以上の数で袋叩き。

先生も文の事を気味悪がってたから、園児によくある喧嘩って事で積極的には止めに入らなかった。

三人には勝っても十人くらいには流石に勝てなかった文はボコボコにされた後に『ヴィラン』だの『化け物』だの色々言われたらしいね。

その時に言われた『ヴィラン』『化け物』、そして文を『見下す目』

その三つが文のトラウマなんだよ。

だからヒーローを目指すことで文は自分が『ヴィラン』でも『化け物』でも無いことを証明し、『見下される』『側じゃなく』『見下す』『側なんだって自分に言い聞かせると共に相手に態度で示そうとしてるんだ。

「最近はそれも無くなって来たんだけどね。」

と、軽く言う河城だが、話を聞いたA組一同の表情は硬い。

「ウチのお祖父さんは『個性社会の弊害の一つだ』って言ってたけどその通りだよね。」

無個性、没個性、周りから少し浮いた個性。

ただ、それだけの理由でイジメられる。

個性の良し悪し、有る無しで生まれながらにして格差が出来る。

全体的には個性により便利になったかのように見えるが、細部に目を凝らせば問題は多い。

「まあ、そんな虐めが暫く続いた後に保育園を辞めたんだ。その後、親戚の中でも年が近い私達と一緒に育ったってワケ。いや〜、初めて文に会った時は怖かったなあ。

生傷ばつかで目つきも鋭いし、目に光とか」

スパァン!!

話をしていた河城が急に頭を叩かれた。

「ツ~~~~~」

!!!?!?」

叩かれた頭を抑えて転げ回る。

河城の個性は『河童』、その為頭が弱点なのだ。

「余計な話はしなくてよろしい。」

転げ回る河城を心配そうに見ているA組一同だったが、急に聞こえた声にベッドに目を移す。

そこには上半身をベッドから起こし、腕を振り抜いた射命丸がいた。

「『射命丸さん！』」

「ストップ。」

射命丸が起きたという事実が気が付き、近付こうとする一同だが、その前に射命丸本人に手で制される。

「その前に一個だけ確認。今日、何日？」

心無しかどこか焦ったような表情で今日の日を聞く射命丸。

「えっと、21日ですが、」

「ナイス、私い!!」

思いつきりガッツポーズをしてから、痛たたたと腹を抑える。

「これなら締切間に合う！ リカバリーガール呼んで！」

「ああ、そういえば射命丸さんってフリーライターだっけ。」

クラスの中では一人だけ、射命丸がフリーライターという事実を知っていた緑谷が納得するも、その他のメンバーは『え？ なにその事実。』と困惑している。

「射命丸。」

轟が射命丸に声をかけながら前へ出る。

「ヴィラン襲撃の時、ホントに済まなかった。この落とし前は必ずつける。何でも言ってくれ。」

綺麗に腰を90度に曲げ、頭を下げる轟。

それを見た射命丸は

「椀、私の代わりにビンタ二発。キレイに痕が残る位で。」

「はい。」

「本当は私がしたいところですが、結構傷が痛いですしね。これでチャラにしときます。実際、私の自業自得な部分もありますし。」

顔を上げ、何かを言おうとした轟に犬走からビンタが飛んだ。

両側に二発。

「椀、轟さん何か言おうとしてたんだけど？」

「ああ、いや、ビンタされる為に顔を上げたのかと。」

意外と天然なところのある犬走。

「ああ、そうだ。 さっきの話、同情も情けもいらぬ。 変に心配される必要もない。 それだけ。」

河城から話を聞いたA組を見ながら低い声でそう伝える。

「それじゃあ、誰か看護師さんに私が起きたって伝えてきてくれますか？ 学校の方にも連絡しなきゃいけないでしょうし。」

何時もの笑顔になって、そう言う射命丸。

「なら僕が行こう。 看護師さん!!」

委員長の飯田が部屋から出て行き、そこそこの速さの早歩きで廊下を進んでいった。 走らなければ良いという話では無いのだが。

兎にも角にも健康って大事ですよね、痛感しました

「射命丸。」

「ああ、どうもっ相澤先生。 怪我は大丈夫ですか？」

一年A組の一同が帰った後、病院から射命丸が起きたと連絡された雄英高校は担任の相澤と保険医のリカバリーガールの二人を病院へと送った。

そして二人きりで話をするという事で相澤だけが先に病室に入って来た。

「まあな。 ぱつと見、酷く見えるだけだ。 さて、リカバリーガールの婆さんの個性で治す前に話がある。」

「体力使っちゃいますもんね。」

「ああ。 本題だが、親御さんから話は聞いた。」

それを聞いて射命丸の顔から笑顔が消えた。

それからフツ、と笑い皮肉っぽく言う。

「やれやれ、今日は厄日か何かなんですかね。」

にとりに勝手に昔の話されたし、母親に勝手に昔の話をされた事を教えられた。

これを厄日と言わずして何と言うのでしょうか、と頭の中で軽く現実逃避する。

「大変だったな、とか無責任な事は言わない。ただ、本気でヒーローになりたいんだつたらそのトラウマをどうにかしろ。致命的な弱点になるぞ。」

「ええ、実際そうになりましたし。」

USJの事を思い出し、すぐに思考から追い出す。

あれも余り思い出したくない。

「相談なら何時でも乗ってやる。俺が嫌ならマイクがいる。異性が嫌ならミッドナイトやリカバリーガールの婆さんがいる。頼りねえって言うならオールナイトがいる。Plus Ultraだ。必死に足掻いて乗り越えてこい。そんだけだ。」

それは射命丸にとって変に同情されるよりもずっと嬉しい言葉だった。

自分の過去を分かかっていてくれて、それでも過剰には踏み込まず、ただ応援してくれる。

「先生。……………初めて先生の事、尊敬できそうな事言いましたね。」

「失礼な奴だな。」

「ああ、正確には尊敬できそうな事は何回か言ってたんですけど、職員室のアレで殆どチャラになってます。」

「悪かったな。婆さんの個性使えば今週中には復帰できんだろ。雄英体育祭の開会

式の選手宣誓、入試トップのお前がやる事になってる。三週間後までに考えておけ。」
「了解です。」

ビシッと敬礼して返事する射命丸。

その後、病室の外で待っていたリカバリーガールの個性で治療をするも、流石に全てを治すことは出来ず、数日かけて治療をする事に決まった。

数日後、薄味どころではない味の殆どしない病院食に『もう二度と入院しない』と心の中で誓いながら退院した射命丸。

午前中の退院だったので午後から学校に行った。

「イエーイー！ 私、完・全・復・活ですっ!!」

教室のドアを勢いよく開け、テンションの高いまま教室に入る。

一瞬、シーンとなるも次の瞬間にはほぼ全員が駆け寄ってきた。

「退院おめでとー!」とか「やっぱ病院食って美味しくないの?」とか言われた射命丸は少し意外そうな顔をしてから照れくさく笑った。

「へえ、へへえ、なるほどなるほど。」

「文さん、その……笑顔が怖いです。」

「隠す必要が無くなりましたから、これからはちよいちよい出していきますよ。今の内から慣れて下さい。」

「(何か雰囲気が悪くなった。)(」

自分がいなかった時に普通科、そして同じヒーロー科のB組の生徒から宣戦布告を受けたと聞いて戦闘訓練の時のような獰猛な笑みを浮かべる射命丸。

その笑顔が怖いと言う八百万だが、慣れろと中々に無茶な事を言う射命丸。

「それじゃあ、ちよつとB組に挨拶に行つてきましようかね。」

「[[[[[え、]]]]]]」

「……………ああ、変な意味じゃないですよ？ 爆豪さんの集めたヘイトの拡散と、改めて

私の方から宣戦布告する位ですから。」

射命丸がB組に挨拶に行く、クラスの大半から変な声が上がったので変な意味ではないと説明する。

それなら、まあ、みたいな反応をされて若干納得のいかないままB組へと向かった。

B組のドアを開けると中にいた生徒達の視線が集まった。

「初めまして。 A組の射命丸文と申します。先日、宣戦布告をされたと聞き、その際に居なかつたのでご挨拶を、と思つて来ました。」

一瞬、戸惑つた表情をするB組だが、すぐに受け入れてくれた。

一人だけやけに煽つてくるのが居たが無視した。

「まず最初に先日はウチの爆豪さんが失礼な事を言つたみたいですすみません。でも、普段からアレなので気にしないで下さい。同じA組にもあんな感じなので。」

まず、爆豪の無駄に集めたヘイトを散らす。

B組の生徒達は毒気を抜かれた表情でまた戸惑つた。

その後、『やつぱりヒーロー目指してるんだから全員が全員、アレな訳無いよね』という事で納得していたが。

「ですが、言い方は悪くとも言つてゐることは事実。壁や障害、競う相手のいない勝負なんて虚しいだけでしょう？ 雄英体育祭、互いに上位目指して頑張りましょうね。」

因みに射命丸にとつて壁や障害は自分の事、競う相手は自分以外のA組の事である。

相手を見下すことは射命丸にとつては一種の自己防衛のようなものである。このままでは駄目だ、と分かつていても無意識的に出てしまうのである。

B組の殆どはその事に気が付いて無いようで好意的に受け取つてくれたが、唯一最初に煽つてきた男子は軽く射命丸の事を睨んでいた。気が付いているようだった。

「それでは、失礼しました。」

軽く手を振りながら、B組から出る。

まあ、やりたい事はやれたし、後は本番で叩き潰すだけ。

そう考えながらA組に戻った。

「気に入らないなあ。」

B組から射命丸が出て行った直後、最初に煽った生徒、物間 寧人がそう呟いた。

「はあ？ どこがだよ？ あのツンツン頭のバクゴって奴より全然礼儀正しかっただろ？ そんなでもって最後の宣戦布告！ く〜く〜！ 漢らしいぜ！」

「鉄哲、女子に漢らしいとか言うなよ。けど、物間、アレの何処が気に入らないっていうのさ。」

射命丸の事を好敵手的な意味で気に入ったらしい鉄哲。徹鐵とクラス委員長兼物間の抑え役の拳藤。一佳が物間の事を注意する。

「気付いてないかもしれないけど、彼女の言った『壁や障害』って多分自分の事指して言つてたよ。暗に『自分の方が圧倒的に格上だ』って言つてるんだ。」

それを聞いて眉間に皺を寄せる拳藤と鉄哲。

「そうか？ 流石にそれは敵視が過ぎるんじゃないか？」

「物事を捻くれて捉えるのは、もうアンタのライフワークそのものとして考えて諦めたけどさ、流石に度が過ぎるんじゃないの？」

全く信じて貰えてない。

こういう時は日頃の行いがものを言うのだ。

「なんでー！ー！ー！??」

学校から帰った射命丸が記事を編集社に送ろうと自分のノートパソコンを開くとデータが綺麗さっぱり消えていた。

それに気が付いた射命丸は絶叫した。

「ふ、ふふふふ、ですが私は仕事の出来る女。データのバックアップくらい取ってあるんですよ!!」

そう言いながらUSBを取り出し、パソコンに挿す。

暫くカチカチ操作してから、ふう、と一息つく。

「良かった、バックアップ取っておいて。」

どうやらバックアップは無事だった様である。

「さって、誤字脱字のチェックしたらさっさと送っちゃいましょう。」

それから暫くはパソコンの画面を見つめ、時々カタカタとキーボードを叩く。

十分もしない内にその作業を終えた射命丸はデータを編集社に送った。

「よっし、コレでオッケー。」

一仕事終えた射命丸は満足そうな顔をして宿題に取りかかった。

体……育……祭？

雄英体育祭当日。

運が良いのか、もしくは誰かがパンチの圧力で雨を降らしそうな雲をふっ飛ばしたかは定かではないが、綺麗に晴れた。

A組の控室では各々が準備体操をしたり、精神統一したり、逆に何時も通りにしていたり、とそれぞれの方法で緊張を紛らわしたり集中を高めたりしていた。

「おい、緑谷。」

「えっ、何かな轟君。」

そんな中、急に轟が緑谷に話しかけた。

「客観的に見れば俺の方が実力は上だと思う。お前ヤケにオールマイトに目をかけられてるよな。」

「え、ええつと、」

「別に詮索しようって訳じゃねえ。ただ、俺はお前には勝つぞ。」

「……………僕も本気で獲りに行く。」

突然の宣戦布告にオロオロする緑谷だが、最後には覚悟を決めたようにしつかりと轟の方を見て返事をした。

「それと、射命丸。」

「はい？」

「正直なところ、俺とお前、本気でやったらどっちが上だか分からねえ。けど、この体育祭で白黒つける。」

それを聞いた射命丸は座っていた椅子から立ち上がってニヤリと笑いながら返した。

「そういう事なら、轟さんとのバトルの時には本気でお相手しましょう。中々レアですよ？ 私の本気は。」

珍しく自分から慢心を捨てると言った射命丸。

USJの事件を経験して少しばかり吹っ切れたのだ。

因みにその他のメンバーに対しては状況次第で本気を出すのもやぶさかでは無い、というレベルである。

これは指名で宣戦布告されたから最初からそうする、というだけの話である。

『雄英体育祭!! ヒーローの卵達が我こそはとシノギを削る、年に一度の大バトル!!』

さあ、選手入場のお時間だ!! どうせてめーらアレだろ、こいつらだろオ!!

ヴィランの襲撃を受けたにもかかわらず、鋼の精神で乗り越えた奇跡の新星!! ヒーロー科ア! 一年!! A組だろおおおオ!!」

今大会の実況役のプレゼント・マイクのアナウンスに合わせて一年A組のメンバーが入場する。

巨大なスタジアムの中は既に熱気に包まれていた。

そして選手の入場が進み、一年の全クラスが揃ったところで、今回の雄英体育祭一年生の部の主審を務めるミッドナイトが現れた。

『選手宣誓! 選手代表、一年A組、射命丸文!』

呼ばれたので壇上上がり、一呼吸置いて話し始める。

『宣誓! 我々、雄英高校一年生は我が校の校訓を胸に懐き、ヒーロー科以外はヒーロー科を追い越すべく、ヒーロー科は更に上を目指すべく、「自らの限界など知ったことか」とばかりに突破する事を誓います! では、締めとして我が校の校訓を! それでは皆さん、ご一緒に! セーの!』

『Plus Ultra!!』

全生徒が雄英高校の校訓を叫び、熱気が一気に増した。

『以上! ヒーロー科一年A組、射命丸文でした! ありがとうございます!!』

選手宣誓を終えた射命丸に観客席からも生徒達からも大きな拍手が送られた。

それを聞いた射命丸は笑顔で手を振りながら心の中でほくそ笑む。

実はこれ、計算ずくで人気を出そうという魂胆である。

射命丸はマスメディア側、故にどのようなスピーチがマスメディアにとって好みなのかは大体分かる。

マスメディアにとって好みの展開を自分から作り出せば、自然と自分のメディアへの露出が多くなる。

上手く行けば今まではメディアとより強い繋がりを持てるかもしれない。

そうすればヒーローとしてデビューした時に色々とやりやすい。

そういう考えの下、捻り出したスピーチが先程のものである。

何がと言わないが黒い。

「さて、それじゃあ早速第一種目に行きましょう！ いわゆる予選よ！ 毎年ここで多くの者が涙を飲むわ！ さて運命の第一種目！ 今年は、障害物競走!!」

射命丸が元の位置に戻ったのを確認してからミッドナイトが今年の雄英体育祭、第一種目を発表する。

発表された内容は障害物競争。

「計十一クラスでの総当たりレースよ！ コースはこのスタジアムの外周、約4km！

我が校は自由さが売り文句！　コースさえ守れば何をしたって構わないわ！　さあさあ、位置につきまくりなさい。」

誰もが良いスタート位置を確保しようと走り、他の生徒を押し退けて前に出る中、射命丸は歩いて後ろの方を陣取った。

個性が『鴉天狗』の射命丸は前を取っても後ろを取っても別に変わりはないのだ。

背中の翼の調子を確かめる様に二、三度翼を上下に動かす。

（さてさてさてさて、どんな障害物があるかは知りませんが、これは飛行系個性が圧倒的に有利な種目。　ぶっちぎりで一位を狙わせて貰いましょうか。　今日の私は自重なにかしませんよ？）

何せテンション上がりまくってるのである。

さらに言えば河城、姫海棠、犬走の三人が見てるのだ。

大親友が見てるのに情けない結果では終われない。

スタートシグナルが赤く光り、一つずつ消えて行く。

それと同時に射命丸の集中が高まっていく。

（常に全開にする必要はない。　要所要所でブースターとして扱うだけ。）

3……………2……………1……………0

全ての光が消えたスタートシグナルが緑色に光り、

『スタート!!』

それと同時にミッドナイトがスタートを告げる。

まずはスタートダッシュ。

全ての生徒が一塊になっているこの瞬間、多数に妨害をかけるのならここが狙い目。故に射命丸は他を置き去りにした。

自分が妨害せずとも誰かが妨害する。

ならば、それを有り難く利用させて貰おうじゃないか、という事である。

さらに言えば広範囲への妨害となるような攻撃は高確率で視界を奪う。

そんな中、一人だけを狙うなど至難の技。

そこまで分かっているスタートダッシュを選んだのだ。

そして射命丸がスタートゲートを抜けそうになった時、案の定後ろから強烈な冷気が襲ってきた。

それを無視し、スタートゲートを通り抜け、進む。

「チツ、流石に一瞬じゃ凍らせらんねえか。」

自分の安全が確認できたところで一旦、集中を切る。

流石にこのまま集中し続けていたら体育祭の後半では集中力が無くなる。

風を操るのにも実はかなりの集中力が必要なので風も出来るだけ操らないようにす

る。

短期であれば全く問題ないのだが、この体育祭は体力、集中力共に上手く温存していかなくては、いざという時に全く動けなくなってしまう。

『ついに始まったぜ、雄英体育祭一年部門！ 実況はボイスヒーロー、プレゼント・マイク！ 解説は抹消ヒーロー、イレイザーヘッドの二人でお伝えしていくぜ！ 解説のミイラマン、アーユーレディ!?』

『無理矢理呼びやがって……』

スタジアム内に設置された実況席。

その中には何時も高いテンションをさらに上げて実況に臨むプレゼント・マイクと解説役として無理やり引っ張られてきた、まだ包帯の取れないイレイザーヘッドがいた。

『まず抜け出たのはA組の射命丸！ 開会式のスピーチ、良かったぜ！ 続いてこれまたA組の轟！ 氷結攻撃で後続を妨害！ だが、ヒーロー科の生徒を筆頭に実力者達は見事に妨害を躱し、轟を追い掛ける！ てか、射命丸速え!! もう第一関門の手前まで来てんぞー!』

『射命丸は轟が妨害に出ることを予想してスタートダッシュに専念したな。お陰で止まること無く後続との差を広げてる。』

『そんじゃ、まあ、まだ射命丸しか来てねえけど第一関門！ ロボ・インフェルノ！ 仮

想ヴィランロボ共がお待ちかねだ!」

射命丸の眼下に広がるのはヒーロー科の実技試験の時の仮想ヴィラン達。

だが、倒さなくて良いなら関係ないとそのまま飛んで行こうとした時、目の前に何か銃口のような物が取り付けられたドローンが現れた。

「……………」

『……………目標ハツケン!』

「やっぱりい!?!」

暫く見つめ合っていると突然、ポンツという軽い音と共に銃口から何か放たれた。

それを避けて落ちて行く自分が避けた物を見るとそこそこの大きさのあるネットだ。

『ハツハアアアア!! 飛行系個性なら余裕とでも思ったか!? 甘い甘い!! 空にはド

ローン! 飛んでる奴目掛けてネット発射するぞ!』

『用意したドローンは百台以上だ。スタートダッシュに成功したのが裏目に出たな。

他の飛べる個性持ちが来るまで全機、射命丸を狙うぞ。』

それを聞いてドローンの方を振り返ると

「うげ」

いつの間にかドローンが増えている。

そしてその全ての銃口が射命丸に向けられている。

それを見た射命丸は急いで高度を落とす。

飛ぶのを止める気は無いが、ネットなんて、盾になるような障害物が無ければやっつけられないと考え、0ポイント仮想ヴィランの足下をくぐり抜けて進もうと考えたのである。

が、

『おおっと、ここに後続が追い付いて来たぞー。それでもって轟が射命丸に凍結攻撃！』
二位の轟が射命丸が足止めを喰らってる間に追い上げ、地面を凍らせた。

それを見て氷が迫り上がって来るのを警戒し、降下を止める射命丸に真上からネットの雨が降り注ぐ。

「ええい、射線が限られてるだけマシだと思いましょう！」

そう言って0ポイント仮想ヴィランの間を縫う様に飛ぶ射命丸。

慎重に飛んでる分、その速度は落ちている。

ポンポンポンポンと上からネットが降ってくるが緩急を織り交ぜ、ランダムに蛇行する事で避ける。

下に降りて走る事も考えたが、轟の餌食になる可能性が高いので却下。

その結果、一位のまま第一関門を突破したものの後続との距離が一気に詰められてし

まった。

『オイオイ、第一関門チョロ口いつてよ!! んじゃあ、第二はどうよ!? 落ちたらアウト! それが嫌なら這いずりな! ザ・フオール!!』

第二関門は綱渡り。

地面は底の見えない深さにまで掘られ、足場として多数の柱状の地面が残っており、その地面を繋ぐようにロープが張られている。

絶対、何か仕掛けて有るんだろうなと思いつながら射命丸が第二関門のエリア内に入ると、予想に反して何も無い。

『何も無いと思つた奴! ねえワケねえだろ!? ポチツとな、つてなあ!!』

『古いな。』

プレゼント・マイクが手元にボタンを取り出し、勢い良くそれを押す。

すると突然、第二関門の上空に乱気流が生まれた。

『第二関門、空の妨害は風! 風を操る個性持ちの奴等を集めて作つた乱気流だ!』

『スイッチ関係ねえな。』

どうやら突然生まれた乱気流はヒーロー達を集めて作り上げたものらしい。

射命丸も風を操る事は出来るが、相当の集中力が必要になる。

故に第一競技では温存しておこうとしているのだ。

さらに操ろうにも個性で作り出した風な上、相手は多人数、しかもプロ。

まともに風を操ろうとすればどの位、集中力が持っていられるか分かったものじゃない。
い。

ここまで考えて射命丸は一気に急降下。

ロープよりも低い位置を飛ばせば柱状の地面が邪魔になり、風の影響は受けにくいはずと考えての行動だ。

実際、ロープより下では風は皆無に等しく、楽に飛べる。

『まあ、そう来るよな。普通に綱渡りする奴等に風の妨害があると不公平すぎるからロープ付近では風は使えない。するとロープより下では風を循環させるようにしか動かせない。そうなったら必ず何処かに前へ進む風が生まれる。射命丸みたいな翼のある飛行系個性持ちはその風に乗って一気にスピードを上げちまうから結局ロープより下は、ほぼ無風状態だ。自然の風は吹くけどな。』

『やっぱ飛行系個性には楽な種目だよな！不公平？バカ言っちゃいけねえ！オメー等も開会式で言ったら!?』
『Plus Ultra!!!』
『ってなあ！そんならいの不公平位、乗り越えなきや目立てねえぞ!!』
『ホレ、走れ走れ!!』
『んでもって追い抜け!』
射命丸が第二関門終盤になったところで高度を上げて後ろを見ると、少しだけ差が開いていた。

だが、よく見るとその更に後ろから爆豪が追い上げてきている。

「思ったよりも引き離せませんね。独壇場かと思つてましたけど。まあ、目立てれば何でも良いですし。」

そう呟いて先に進んだ。

『先頭グループが第二関門突破了!! 残すは最終関門! その正体は……怒りのアフガン!! 地上は一面地雷原! 空には対空兵器! まさしく戦場そのものだ! さあ、現時点一位の射命丸が入ってきたぞ!』

対空兵器?

そんな事を考えていると地上から大量の弾幕が形成された。

「ああ、なるほど、対空砲火ですか。」

どこか疲れた表情で呟く射命丸。

『設置された四台の対空砲! 発射レートは毎分二百発! 狙いは粗いが飛んでる奴ロックして撃つてくんぞ!』

『弾は当たっても痛いけど怪我はしにくい設計になつてる。地上の地雷も音と衝撃は激しいが殺傷性は皆無に等しいから安心して進め。』

『その通オリ!! 地雷は良く見りや場所が分かるようになってつから目と足、酷使しろよー!』

弾幕を避けながら前に進む射命丸だが、

「危なっ!? ああ、もう狙いが粗いのが逆に腹立つ!!」

撃たれた弾の殆どを避ける射命丸だが、狙いが粗いせいで時々、弾が当たりそうになっっている。

『ここ』まで順調に関門突破してきた射命丸が大幅ロス! その間に後続がドンドン来ているぞ!』

プレゼント・マイクの言葉に後ろを見てみると確かに後続がかなり近付いてきている。

「温存しておきたかったんですが、仕方ありませんね。旋風『鳥居つむじ風』」

二つの竜巻を作り上げ、砂を舞い上げる。

すると思つた通り、射命丸を見失つた対空砲の砲撃が止んだ。

『竜巻発生!! オイオイオイ、対空砲の砲撃が止んだぞ!』

『砂埃で見失つたんだろ。それより、砂以外にも舞い上げられた物があるぞ。』

『は? あ、地雷が吹き飛ばされとる! 上から降ってきてんぞ!』

『それに加えて、砂が舞い上げられたせいで途中から地雷が何処に埋まつてるのか分かりにくくなっているし、砂埃のせいで視界も悪い。一気に最終関門の難易度が上がったな。』

砂をある程度舞い上げたところで竜巻を消した射命丸は砂埃に隠れて一気にゴールを目指す。

『射命丸、砂埃の中から出てきた！ 最終関門トップで通過！ 後続はまだ、つてか降ってくる地雷の対処に追われている！ 序盤からトップをキープし続けたまま、スタジアムに帰ってきたのは、射命丸文!!』

ゴールゲートをくぐり抜け、スタジアムの中心に降り立ち、四方に笑顔で手を振る射命丸。

その射命丸を大歓声と拍手が包み込んだ。

騎馬戦つて下の人は凄い運動量になりますよね（作者の 体験談）

『後続は地雷の雨は止んだが、砂埃と何処にあるのか分からなくなった地雷のせいで滅茶苦茶足止め喰らってんぞ！ 射命丸の奴、エグい妨害したな！』

『いや、そうでもねえ。 砂埃のお陰で後続の飛行系、浮遊系個性持ちは対空砲に狙われにくい。 順位が一気に変わりそうだぞ。』

『言ってる側から爆豪が来たあ!! 二位の轟には目もくれずゴール目指して一直線！
つとお!? 轟がここで妨害！ 大水塊で行く手を遮る！ んでもって爆豪が轟を
ロックオン！ 轟も水で足場作って迎え討つ気満々だ!!』

「邪魔すんなや、半分野郎があ!!」

そのままなし崩し的に轟と爆豪の戦闘が始まるも互いに付近の地雷にショックを与えて起爆するのを恐れてか、派手な技は一切使わない小競り合いの様な状況になった。『轟、爆豪、どっちも譲らねえ！ 戦いは地味だけだな！ さあ、二位はどっちが、つて何だあ!?! 後方で大爆発！ 地雷踏んでもあんな爆発起きねえぞ!』

一位でゴールした射命丸は係員から手渡されたスポーツドリンクを飲みながら、スタ

ジムム内に設置されたモニターで後続の様子を見ていた。

轟と爆豪が小競り合いを続ける中、最終関門の入り口付近で突如大爆発が起こった。

そんな爆発の中から飛び出してきたのは緑谷。

第一関門で手に入れたロボットの装甲に乗って宙を舞っている。

だが、その行く手を遮るのは先程轟の生み出した大氷塊。

一瞬、慌てた轟と爆豪だが、それを確認して、慌てることは無いとすぐには動かないようだ。

「うあああああ!!」

だが、緑谷は装甲を大氷塊に突き刺し、落下を防いだ。

氷というのは作り出すときにかかった時間とその強度は比例する。

故に、一瞬で作り出された轟の大氷塊は脆く、簡単に装甲が突き刺さった。

突き刺さった場所は大氷塊の頂上付近。

緑谷は何とか装甲の上に這い上がり、今度は大氷塊を滑るように下っていく。

「クソ、しまった!」

「俺の前に行くな、クソナードがあ!!」

それを見た轟と爆豪が慌てて氷塊をそれぞれの個性で崩し、緑谷を追い掛けようとするも、二人が氷塊の向こう側についた時には既に緑谷からかなり離されてしまっている。

た。

『まさかの緑谷、ここで二人を抜いたー!! そのまま最終関門突破! 二人も緑谷の後を追うもかなり離されてしまった!』

二人に大差をつけた緑谷はそのまま全力でゴールに走る。

だが、後方からは轟は氷を重ねて、爆豪は掌の爆発を使って一気に追い上げてきている。

『轟と爆豪、猛追! このまんまじゃ緑谷、追い抜かされるぞ!』

(追い抜かされる!?! 折角追い抜いたのに!?! そんなの……………イヤだ!!)

「ぬあああああ!!!」

轟と爆豪への対抗心から自爆覚悟で個性を使う緑谷。

最後の直線で一気に加速し、ゴールゲートへと迫る。

『何だあ!?! 緑谷、急加速! 二人を更に突き放した!!!』

(痛……………く…無い! この土壇場で制御に成功した!?! けど、止められないいい!!?)

爆発的な加速に成功するも、その加速で体勢を崩した緑谷は止まる術が無く、ただ吹っ飛んでいる。

『マズい!! 射命丸!! 緑谷を受け止めろ!!!』

「は、はいい!?!」

このままでは地面を転がってスタジアムの壁にぶち当たるまで止まれないと判断した相澤がミッドナイトでは止められないと判断し、先にゴールしていた射命丸に止めると言う。

「うわああああ!!」

「仕方ないですねえ!」

叫び声を上げながらゴールゲートを抜け、飛んできた緑谷の上半身を掴み、後退しつつ、自分の体を回す事で勢いを殺す。

五回転くらいしたところで漸く止まった。

射命丸はその場に座り込み、緑谷は大の字で倒れている。

「じゃ、射命丸さん、ありがとう。」

「全くですよ。私が居なかったら緑谷さん、今頃大怪我でしたからね。」

『緑谷、お前体育祭終わったら職員室来い。』

相澤のドスの利いた声で呼び出される緑谷。

『緑谷、こんなところで呼び出し喰らいやがった! ウケる!! おっと、そうだ。二位

ゴールは、緑谷出久!!』

歓声と拍手があがるも、どっちかと言えば受け止めた射命丸に向けてである。

緑谷は反省しつつも、OFAの制御の成功したことを振り返っていた。

その後、三位に轟、四位に爆豪と続いてゴール。

更に暫く待つと後続が次々ゴールした。

やはりゴールした殆どはヒーロー科ばかりである。

そこから十数分後には全生徒がゴール、もしくはリタイア、タイムアップで第一競技は終了した。

熱中症対策にスポーツドリンクを渡され、小休止を挟み第二種目に移る。

「第一種目通過は上位四十二名！ 残念ながら落ちちやった人も安心しなさい！ まだ見せ場は用意されているわ！」

流石と言うべきかヒーロー科、A組B組合わせて四十人は全員第一種目を突破。

残りの二人はサポート科の女子生徒と普通科の男子生徒である。

その他の落ちてしまった生徒達にはレクリエーションで一般的な体育祭の競技、即ちリレーや大玉転がし、借り物競走などが用意されている。

レクリエーションには生徒全員が自由参加可能であり、ヒーローを目指す普通科生徒等はここで企業やヒーロー事務所にアピールするしかない。

「さて、第二種目に移るわよ！ ここからは取材陣が目立つ人はドンドンTVに映そ

うと躍起になってくるから、選手諸君は気張りなさい！ さあ、肝心の第二種目の内容は………騎馬戦よ!!」

騎馬戦、と聞いて明らかに顔色が変わった生徒が数人。

その代表格は上鳴だ。

上鳴の個性は『帯電』、騎馬戦と言う以上、どうやったって仲間と触れ合う事になる。そうなれば、上鳴の個性による攻撃は相手より味方にダメージを与えてしまう。

それにより味方内に電気を無効化出来る個性の持ち主がいなければ上鳴は個性による攻撃が出来なくなる。

「参加者は2〜4人のチームを自由に組んで騎馬を作ってもらうわ。基本は普通の騎馬戦と同じルールだけど、異なる点も有るわ。まずはポイント。第一種目の結果に従って、各自にポイントが振り当てられるわ！ ポイントは四十二位の生徒が5ポイント、そこから一つ順位が上がる毎に5ポイントが加算されるわ。そして、一位の選手は1000万！ 上位の奴ほど狙われちゃう下剋上バトルよ！」

それを聞いた生徒達の目が射命丸に向かう。そして射命丸の顔は引き攣っていた。

「というわけで、第一種目一位の射命丸さん！ 持ち点1000万！」

それを聞いて顔を手で覆う射命丸。

（逆に考えるんだ私。 どうやったって狙われるのは目に見えてる。 そうすれば自然とメディアはこっちに集中するはず！ 大変だけどここは名を売るチャンス！）

「制限時間は十五分！ その間に騎馬の合計ポイントの表示されたハチマキをつけて奪い合うのよ。 持ったハチマキは首から上に巻くこと！ さて、この競技で重要なのは持ちポイントを全て取られたり、騎馬が崩れても失格にはならないってところよ！ ただし！ 飛行系、浮遊系個性持ちの人が騎手で、飛んで騎馬から離れた場合は15カウント以内に騎馬に戻らないとポイントは没収とするわ！ そして、騎馬を崩すための攻撃も禁止！ これをやった場合も同様にポイント没収よ！ 同じ様に騎馬が崩れたり、騎手が地面に触れてしまった場合にもポイントは没収！」

まあ、そうなりますよね、と頭の中で考える射命丸。

そのルールさえ無ければ射命丸は競技が終わるまで、ずっと上空に待機し続ける事が出来る。

やる気は無いが。

「さあ、騎馬を決めるための交渉タイムとして十五分の猶予を与えるわ！ さっさとチームを決めちゃいなさい！」

（さて、誰と組みますかね。 私の飛行は緊急離脱用として。 どうせ15カウント以内に戻らなきゃいけないなら、足止めされてからもすぐに動けるバイタリテイの高い人

が良いですね。後は騎馬ごと空に飛ぶとしたら麗日さんが必要ですし。」

「と、言うわけで組みませんか？ 麗日さん。」

「いや、何がどういいう訳か知らんのやけど。もうデクくと組んどるけど、良いの？」

二位の緑谷と組んでると聞き、一位、二位とトップ二人が組んでれば話題性抜群じゃ無いですか！と興奮する射命丸。

「勿論ですとも!! ナイスです、麗日さん！」

「う、うん。 まあ、それは良かった？」

そんな射命丸に少し気圧される麗日。

「ぼ、僕なんかでホントに良いの？」

「良いんです！ 絶対、注目度ナンバーワンですよ！」

「あつ、そういう感じ。」

射命丸の言葉に少しだけ頬を赤くして質問する緑谷だが、返ってきた答えに一瞬で冷静になる。

「じゃあ、あと一人組めますけど、どうします？」

「中、近距離で頼りになる人がいる。 その人にしよう。」

緑谷の提案に従って声をかけたのは同じA組の常闇 踏陰。

個性は『ダークシヤドウ』

戦闘訓練の時のを見ている限り、個性の『ダークシヤドウ』には思考能力があり、常闇の命令を受けなくとも自ら動ける。

その特性故に常闇に死角は無く、全方位に即座に対応が可能である。

そんな常闇に声をかけた結果、チームに入ってくれる事になり、チームの最大人数の四人が集まった。

「それじゃあ、射命丸さんが騎手で僕と常闇君が後ろの騎馬。麗日さんが前の騎馬。

麗日さんの個性で麗日さん以外の重さを無くして射命丸さんの個性で空中に離脱。

常闇君は『ダークシヤドウ』で周りを警戒。僕は個性が暴走する可能性があるから

奥の手、つて事で良いかな？」

「ええ、多分それが最善手でしようし。」

「異議は無い。」

「うん、それでええと思うよ。」

最後に配置の確認をし、騎馬を組む。

周りを見れば交渉タイムの終了間際という事で他のチームも騎馬を組み終えている。

「あ、やるからにはぶつちぎりの一番目指しますのでチャンスがあれば他のチームの点

数も狙っていきますのでヨロシクです。」
「それ今言う!?!」

普通、騎馬戦って団体戦だった気がするんですが、気のせい？ アツ、ハイ。

『Heyイレイザー！ 寝てる場合じゃないぜ！ 騎馬が組み終わった！』
 『ん、ああ………なるほどな。 結構面白いチーム分けになったじゃないか。』

射命丸チーム 射命丸、緑谷、麗日、常闇

所持ポイント 10000510ポイント

爆豪チーム 爆豪、切島、芦田、瀬呂

所持ポイント 645ポイント

轟チーム 轟、飯田、八百万、上鳴

所持ポイント 595ポイント

葉隠チーム 葉隠、耳郎、砂藤、口田

所持ポイント 370ポイント

峰田チーム 峰田、蛙吹、障子

所持ポイント 405ポイント

物間チーム 物間、円場、回原、黒色

所持ポイント 285ポイント

鉄哲チーム 鉄哲、骨抜、泡瀬、塩崎

所持ポイント 690ポイント

拳藤チーム 拳藤、柳、小森、取蔭

所持ポイント 205ポイント

小大チーム 小大、凡戸、吹出

所持ポイント 150ポイント

角取チーム 角取、鎌切、宍戸、鱗

所持ポイント 175ポイント

心操チーム 心操、尾白、床田、発目

所持ポイント 290ポイント

こうして作られた騎馬は十一騎。

全員が騎馬を組み終えた事を確認したマイクが騎馬戦開始のカウントダウンを始め
る。

『ギア！ てめえら準備は出来てるな!! 出来てなくても知ったこっちゃねエ！ 始めるぞ、十五分のバトルロワイヤル！ カウントダウン！ 3！ 2！ 1！ スター！

ト!!』

開幕と同時に数騎が射命丸チームに向かって来る。

「ひい、ふう、みい……………いやー、人気者っていうのも辛いもんですね。」

「そんな事言ってる場合?! 後ろからも来とるんよ?!」

「ええ、知ってますとも。 囲まれると面倒なので逃げましょうか。」

「わ、分かった。 けど、良いの?」

「ええ、最後の十秒で掻っ攫いますから。」

と、会話もそこそこに段々狭まる包囲網から逃げるために走り始めようとするが、そ

こは流石のヒーロー科。

すぐさまB組の骨抜が個性で地面を沼のように柔らかくし、射命丸チームの動きを止

める。

「あやや、早速ですか。 麗日さん。」

「OK! 全員触ったよ!」

麗日の個性で麗日自身以外の重さを無くす。

「それじゃあ……………よいしょお!!」

気合いのこもった声と共に翼を広げて騎馬を地面から引っ張り上げる。

周りのチームはそれを見る事しか出来ない。

『Wow!! 射命丸チーム飛んだー!! 因みにコレ、ルールのにアリか!? ミッドナイトー!』

「アリよ! ルール違反はしてないわ!」

『このまま上空待機が最も合理的だが………無理だな。』

麗日のキャパ的な問題と観客からのブーイングの問題で、と心の中で続ける相澤。

『それに、飛べるのは射命丸だけじゃねえしな。』

「クソナードにカラス女ア!! その1000万、寄越せやあ!!」

『爆豪も飛んだー!! 射命丸チーム目掛けて一直線!』

「かつちゃん!」

両手の汗を爆発させ空を飛んで射命丸チームに迫る爆豪。

「常闇さん、ガード! 数秒耐えれば取り敢えずは戻るはずなので!」

「了解した!」

射命丸が指示を出し、常闇がダークシャドウで爆豪の妨害をする。

『イタイヨ!』

「チツ。」

ダークシャドウが目には涙を浮かべながら爆豪の爆破をガードする。

「そのまま落ちちゃって下さいね。 風符『天狗道の開風』」

「!?」

爆豪の動きが止まった瞬間、射命丸は風を操り、爆豪を真下に吹き飛ばす。

「舐めんなア!!」

このまま地面に叩き付けられるかと思いきや、両手の爆破で体勢を立て直し、減速する。

「カウント、残り5!」

「やべっ! 爆豪!」

ミッドナイトのカウントに慌てて瀬呂がテープで爆豪を騎馬の上に戻す。

「13、14、セーフ! 爆豪チーム、セーフよ! それと、射命丸チームの射命丸さんの妨害も騎馬を崩すためのものでは無いのでセーフ!」

「危ねー!! マジでギリギリじゃねえか! おい、爆豪! 次からは行くときはちゃんと合図しろよ!」

「るっせえ!! 俺に指図すんな! テメエ等が俺に合わせろ!」

切島が爆豪に抗議するも爆豪は聞く耳を持たない。

「あややや、あのまま落ちてポイント没収されてれば楽だったんですが。そう上手くは行きませんか。」

「射命丸、策士か。」

「空中戦で負けるわけにはいきませんからね。それに今ので私に対して空中戦をしようとするのなんて爆豪さん以外は居なくなるでしょうし。その爆豪さんもハチマキ、B組の人に取りられたっぽいですし、暫くは大丈夫でしょう。さて、そろそろ一回下りましようか。ブーイング飛んでくるのもイヤですし。」

「と、なればあの辺りが良いんじゃないかな。」

緑谷の目線の先には余り騎馬がおらず、空白地帯になっている。

「分かりました。周囲の警戒お願いしますね。」

そう言って高度を落とし始める。

それを見た他の騎馬達も慎重に進み始めた。

先程の爆豪の撃退を見て、下手に行動に出たら返り討ちにあうだけだと思い、暫くは様子見に徹する事にしたのだ。

だが、その中で一騎だけ近付いてきた。

「……………こんな序盤から仕掛けてきますか、轟さん。」

「まあな。お前の事だ、どうせ最後の最後で機動力活かしてハチマキ持つてくつもりだろ。」

轟チームだ。

「ええ。ま、好都合ですね。A組の騎手の中ではあなたと爆豪さんは私の速度に反

応でできる可能性がありますからね。」

「そうだな。そろそろやるか。その1000万、貰うぞ。」

「どうぞどうぞ。取れるものなら、ですけどね。」

轟は冷気を発し、射命丸の周りには風が吹き始める。

現時点、A組最強クラスの二人のバトルが始まるうとしていた。

一方、爆豪チームは射命丸に撃退され、騎馬の上に戻った爆豪は死角に潜んでいたB組の物間にハチマキを奪われていた。

「単純なんだよ、A組。」

「あ、あ、!? んだダメエ! 返せクソが!」

気付いたときには時既に遅し。

ポイントを奪われた爆豪チームの持ちポイントはゼロになった。

「おや、確か君、『ヘドロ事件』の被害者だったよね？ 有名人じゃないかあ。今度、参考までに聞かせてよ。年に一度ヴィランに襲われる気持ちつてのをさ。」

そして物間が爆豪を煽る。

怒らせる事で判断力や思考力を奪おうという作戦だ。

そして人一倍沸点の低い爆豪はキレた。

「切島あ、予定変更だ。カラス女とデクの前にこいつら全員……殺すぞ……！」

「いや、待て爆豪！ 落ち着け！ ヒーロー志望が人を殺そうとするなよ！ 冷静になれ！」

「あ？ 今の俺はすごくぶる冷静だ。進め切島あ！！ アイツ等全員ブツ殺ス！！」

「そのの何処が冷静なんだよ！」

切島がツツコミを入れるも完全にブチ切れた爆豪の目には物間しか映っていない。

「ああ！ もう仕方ねえな！ 俺等でサポートするしかねえ！ 頼むぞ、瀬呂、芦戸！」
それを見た切島は爆豪の説得を諦め、ハチマキを物間チームから奪い返す事にした。

氷が壁を作り、風がそれを穿つ。

粉々になった氷は風に舞い上げられ、キラキラと太陽の光を反射しながら消えていった。

射命丸と轟の個性のぶつかり合いである。

「麗日さん。限界まであと、どれ位ですかね？」

「えっとお、さつきと同じ位飛んでるなら二回かな。」

「二人だけを浮かせる場合には？」

「なら、三……ううん、四回イケる！」

射命丸が目の前の轟チームから目を離さないまま麗日に質問する。

返ってきた答えを聞いて悩む。

（四回ですか。ならもう少し粘って中盤になったら一度離脱しましょうか。出来ればハチマキ取っちゃいましょう。）

「ちよっと厳しいですが、攻めます。轟チームのハチマキを取るか、残り八分位になつ

たら離脱します。基本はダークシャドウと私による中距離からの奇襲で。氷結と放電対策で余り近付かないようお願いします。」

「分かった。」

「うん！」

「了解だ。」

「氷結と放電を喰らった時は私は上に逃げます。放電なら暫くすれば治りますが、氷結の場合はダークシャドウが氷を壊して動けるようにして下さい。出来れば15カウント以内で。」

「ワカッター！」

射命丸が基本方針を伝え、臨戦態勢を取る。

「基本は騎馬戦開始前に伝えた通りだ。兎に角、射命丸の機動力を奪う。その為にも頼むぞ。」

「ああ。」

「分かりましたわ。」

「分かっているとも。」

既に方針は伝えてあつた轟チームも臨戦態勢となる。

「それじゃあ、いざ尋常に………勝負!!」

射命丸の声と共に二つのチームが動き始めた。

十五分って短いのか長いのかよく分かりませんよね

二つの騎馬の動きは対照的だった。

轟チームが距離を詰めようとし、射命丸チームは一定の距離を保とうとする。

何度が轟が氷に射命丸チームを捕らえるも射命丸は上空に避難し、その間に常闇のダークシャドウが氷を割り、射命丸チームはまた距離を取る。

イタチごっこだ。

「このままじゃ、互いに決定打には至りませんか。十秒後に仕掛けます。常闇さん

とダークシャドウは合わせて下さい。あと五秒、四、三、二、一、GO!」

射命丸の掛け声で射命丸本人とダークシャドウが轟チーム目掛けて飛び出す。

「来たぞ! 上鳴!」

「OK! 喰らえ!」

騎馬戦開始前に上鳴の騎馬側全体を絶縁体で覆い、通電対策をしていた轟チームは何の躊躇も無く上鳴の放電を使った。

「ダークシャドウ! 射命丸を守れ!」

「アイヨ！」

それに対して射命丸チームは常闇がダークシャドウに命令してダークシャドウを射命丸の前に行かせて感電を防いだ。

「イタイヨ！」

感電を受けてダークシャドウは常闇の下に戻る。

「居ない!？」

「ッ！ 後ろか!!」

ダークシャドウの後ろに射命丸が居ない事に気付いた轟はすぐに真後ろを凍らせる。

「危なっ！ いやー、流石は轟さん。こんな子供騙しじゃすぐに気付きますか。そ

れじゃ、カウントもあるので戻らせて貰いますね。」

「させると思ってるのか？」

「やだなあ、私を止められるとでも？」

轟が氷結を放つも、それを予測していた射命丸は簡単に避けて騎馬の上に戻った。

「チッ。」

「おお、怖い怖い。それじゃあ、そろそろ離脱させて貰いますね。」

射命丸がちらりとモニターを見れば残り八分半ほど。

離脱するには丁度いい時間だ。

「常闇君と緑谷君は触ったよ!」

「それじゃあ、轟チームの皆さん、アディオス!」

轟が氷壁を張るも空を飛べる射命丸にとっては飛ぶ高度が上がっただけで何の問題もなく氷壁を越えた。

そして離れた場所に降りる。

「ん? うわっ! これ、峰田君の!」

すると騎馬の緑谷から声上がる。

射命丸が下を見てみると峰田の個性『もぎもぎ』の玉が地面にくっついていて。

どうやら、緑谷はそれを踏んだ様だ。

「フッフッフ、見事に引っ掛かったな、緑谷あ!」

声が出た方を見れば個性で作った腕で背中を覆った障子がいる。

そしてその中から射命丸チームを見る目。

「まさか峰田君その中に!」

「ケロケロ、私もいるわよ緑谷ちゃん。」

「蛙吹さんも!」

「完全防衛勢じゃないですか。」

中から聞こえた声に緑谷が反応すると腕の隙間から峰田と蛙吹が顔を覗かせた。

「緑谷ア！ お前は絶対許さん！ ここで会ったが百年目！ 覚悟しろ！」

「え、ええ！？ 僕、峰田くんに何かしたっけ！」

「いや。」

「え？」

「その事じゃ無い！ 第一種目の時の話だ！ お前、射命丸の胸に飛び込んだろ！？ そんなラツキースケベなんて絶対許さん！」

「蛙吹さん、パス。」

「ごめんなさいね、文ちゃん。 これでも騎手なの。 騎馬戦終了後に投げれば良いかしら？」

「ええ、良いですよ。 取り敢えず紐なしバンジー、体験してみますか？」

峰田の最低発言に本人以外がドン引きし、騎馬戦終了後の峰田の紐なしバンジーが確定した。

「別にそれでも良いぜ！ 受け止め役は勿論」

「受け止め役は障子さんをお願いしても良いですか？」

「ああ、任せろ。」

「嘘だろ。」

それでも調子を崩さなかった峰田だが、落ちて来た峰田を受け止めるのが障子に決定

したところで真顔になった。

「どけモブが！」

「ぬっ!？」

そんな掛け合いをしていると障子を足場にして爆豪が突っ込んできた。

「1000万、寄越せ！」

「うわっ!?! 旋符『紅葉旋風』！」

突っ込んできた爆豪の手を避け、即座に爆豪を真上に吹き飛ばす。

「爆豪さん、予想よりも復帰早いですけど！ B組の人、思ったより頼りない！」

「射命丸さん。」

「何ですか？ これ以上、イヤな報告とかいりませんかから。」

「ごめん、けど轟君たちが来た。他のチームのハチマキを根こそぎ奪いながら。」

『おっとお!! 轟チーム氷結で動けなくなった騎馬から悠々とハチマキを奪いながら来た！ 射命丸チーム、囲まれたあ！ ピンチ!』

『轟チームに爆豪チーム、そして峰田チームか。これはそう簡単には逃げられないぞで。』

それを聞いて片手で顔を覆い、空を見上げる射命丸。

「流石に爆豪チームと轟チームと峰田チームを相手にするのはキツイんですけど。上

手いこと互いに妨害しあってくれば良いんですけどねっ！ 魔獣『鎌鼬ベールリング』！」

伸びてハチマキを狙ってきた蛙吹の舌を避け、威嚇としてそれぞれの騎馬の前の地面を鎌鼬で斬りつける。

（峰田さんの『もぎもぎ』のお陰でどのチームもそう大胆には動けなくなってるのは良いんですが、先に緑谷さんの足についた『もぎもぎ』をどうにかしないと。）

「緑谷さん。靴を脱いで、動けるようにしといて下さい。」

騎馬戦の残り時間は七分と少し。

ここを何とかして堪えなければと、気合を入れる射命丸チーム。

「麗日さん、私がそれなりのスピードと機動力で離脱したら、どうなります？」

「吐く。絶対に吐くわ、そんなん。」

「でしようね。」

（と、なれば離脱する時には三騎が動けない、もしくは動きにくい状況を作り出さないと駄目ですか。仕方ありませんか。いやはや、世の中上手くいかないもんですねえ。）

騎馬戦と世の中を比べないで欲しいが、考えていることは確かである。

「ハア、出来れば温存しておきたかったです、仕方ありませんね。これで次に行けなかつたら元も子もありませんし。」

今まで出来る限り温存していた風を操る能力を開放する。

「障子！ 一時撤退！」

「……………良いのか？」

「バカ言うなよ！ 爆豪に轟に射命丸の三チームなんて同時に相手になんか出来ねえよ！ 『三十六計逃げるに如かず』！ 逃げるんだよお！ 嫌がらせに『もぎもぎ』は大量に置いていくけどな！」

そう言つて『もぎもぎ』を大量にばら撒きながら、峰田チームはその場を去つていった。

だが、

「ハッ！ 俺には関係ねえ!!」

「同じくだ。凍らせちまえば関係ねえな。」

爆豪は『爆破』で宙を舞い、轟は氷結で『もぎもぎ』を無効化する。

「ええ、知つてましたとも。」

先に飛んできた爆豪の伸ばした腕を掴み、一瞬だけ宙に浮いてその勢いのまま轟チームに爆豪を投げ付ける。

「上鳴！」

「おうよ！ 悪いな、爆豪！」

飛んできた爆豪に対し、上鳴の放電で身体の自由を奪う。

動きが止まったのを確認し、飛んできた爆豪の持つハチマキに手を伸ばす轟だが、

「舐めんな、半分野郎！」

意地でも取らせまいと偶然横を向いていた手を爆破させ、轟の手から逃れる。

そこを瀬呂が拾い、騎馬の上に戻った。

「危ねー!! さつきとは別の意味で危ねー!! 爆豪、一人で突貫すんなって！」

「るっせえ! 一度で無理なら何度でもやってやらア! テメエ等も酸でソレ溶かして

とつとと俺のサポートしやがれ！」

おや、と射命丸が意外そうな顔をする。

「かつちゃんがちやんと指示出してる。」

「ですね。この数分で何があったのやら。『男子、三日会わずば刮目して見よ』とは

言いますが、たった数分ですぐに分かる程、変わるとは。インスタント食品の親戚か

何かなんですかね？」

「インスタントって。」

「しっかしどうしましょうかね、この状況。騎馬崩しありなら楽だったんですが。」

「いや、普通の騎馬戦でも騎馬崩しは無しやからね？」

当たり前の話である。

「膠着状態なお陰で時間は過ぎていきますが、正直あの二人を同時に相手するのは骨が折れますね。連携する気が無いのが不幸中の幸いでしょうか。」

「そうだな。今、不用意に飛び立てば爆豪が追ってくるだろう。これが修羅の道か。」

射命丸チームはほぼ打つ手無しだ。

下手にどちらかのチームを狙えば、もう一方のチームが後ろから迫ってくるだろう。

「他のチームも氷結が溶けたみたいで、段々と近づいて来てる。」

「お零れ狙いですか。本格的に面倒な状況になってきましたね。時間は？」

「あと五分半。」

「行くぞ、オラア!!」

『爆豪、またもや突撃! だが、今度は騎馬も動いてるぞ!』

「常闇さんは瀬呂さん警戒! 緑谷さんと麗日さんは轟チームの動きを見といて下さい!」

さつきと同じ様に爆豪の腕を掴もうとするが、

「同じ手に引つ掛かるかよ、バーカ!」

直前で手を爆発させ、射命丸の視界を潰すと同時に頭上を越えて後ろに回る。

「で、最初の戦闘訓練と同じ手に私が引つ掛かると?」

それを予測していた射命丸はその場で体を回して蹴りを叩き込む。

『ローリングソバット！ 射命丸の奴、爆豪の動きを完全に読んでいた！』

『ああ、そして爆豪もそれを読んでいた様だな。』

「知ってんだよ、そんなのに引つ掛からねえのは！ 狙いはテメエだ、半分野郎！」
蹴られた勢いを利用し、かなりの速度で轟チームに迫る爆豪。

「上鳴！」

「そろそろヤバウエイけど、やってやらあ！」

上鳴が放電しようとした時、

「ツラア!!」

爆豪が轟チームの目の前の地面を爆破した。

それで出来た瓦礫と土煙で思わず目を瞑り放電をストップさせてしまう上鳴。

「チツ。」

それに気付いた轟が構える。

「もう一発！」

「ツ!？」

先程の射命丸同様に目の前で爆破され視界を潰される。

「轟さん！ 右ですわ！」

「瀬呂か!!」

二度の目くらましの間に轟チームの横に来ていた爆豪チームの瀬呂がテープで轟チームの持つていたハチマキを二枚奪った。

本当は全部奪うつもりだったが、咄嗟に轟が体を傾けた事により、奪われたのは二枚で済んだ。

「よっしゃ作戦成功!」

「やったね!」

「つたり前だ! こんな事で喜んでんじゃねえ! てか、しょうゆ顔! 俺は全部奪えつつつたぞ!」

「無茶言うなよ。 咄嗟に避けられたんだぜ?」

騎馬の上に戻った爆豪に声をかける切島と芦戸。

「うわ、本当に完璧なまでに指示してるわ。」

「かつちゃん自分が自分を囮にしてハチマキを奪うなんて。」

麗日と緑谷がそう声を漏らす。

「いや、ホントに気が抜けなくなってきましたね。 まさか私がダシにさせられるとは。」

「だが、これで轟と爆豪が睨み合っている。」

「ですね。 撤退！」

左右に居た敵チームが一塊になって睨み合い、動かないのでその間に距離を取る。

「待てや、カラス女！」

「待つのはお前だ、爆豪。 射命丸の前にお前が奪ったポイント、返して貰うぞ。」

「邪魔だ、半分野郎!!」

「おー、見事におつ始めましたね。」

戦い始めた爆豪と轟を尻目に安全圏に逃げる射命丸。

「そんでもって抜けた私達に迫る騎馬多数、と。」

ふう、と一息つき、

「纏めて返り討ちにしてさしあげます。」

「うわっ。 今、めっちゃゾクツてきた。」

試合に勝って勝負に負けました

後ろは常闇とダークシャドウに任せ、自身は左右と前に集中する。

構えは自然体。

だが、そこから放たれる威圧感で他のチームは中々距離を詰められない。

「ヒーロー科志望とは言え、一年が出て良い威圧感じゃ無いでしょ、コレ。」

そう言ったのは会場に来ていたヒーローの一人。

「サイドキックには是非欲しいな。あれ程の逸材だ。」

「強個性な上、ルックスも良い、今までの他のチームとの争いを見る限り、戦闘能力も

高そうだな。 人気の出し方も良く分かっている。これは引く手数多だぞ。」

「個性は………異形型の中でも一昔前に流行った妖怪型？」

「だろうな。これは次の職業体験では争奪戦になるぞ。」

妖怪型は発現し、本人がヒーローになる気があるならば完全に当たり個性として知られている。

一時期は個性婚の標的として狙われる事もあった。

そういう意味でも妖怪型は良く知られているのだ。

「さあ、どうしました？ どこからでも掛かって来て良いんですよ？」

不敵な笑みを浮かべながら周りの騎馬を待ち構える射命丸。

だが、射命丸から放たれる威圧感に気圧され、周りのチームは寧ろジリジリと後退している。

『射命丸チーム、謎の威圧感で周りのチームを寄せ付けない！』

『一度勢いに任せて突っ込むなら平気なんだろうが、一度立ち止まった状態から動こうとするのはキツイかもな。』

（言わねえけど射命丸は実力では同じ一年からは頭一つ抜け出している。普段はおちゃらけて、それを隠しているみたいだが、理由は知らんがこの体育祭は本気みたいだな。 A組で勝てると思ったら同じく頭一つ抜けてる轟。 格上だろうと関係なく全力

でぶつかるセンスの塊の爆豪。大穴で意外性の強い緑谷つてトコか。B組の連中は良く知らんからもしかしたらつて事はあるかもな。」

少なくともこの競技では射命丸は確実に次の種目に行けるだろう、と予測する。

それほどまでに純粋な飛行型の個性はアドバンテージが大きいのだ。

「ええい、こうなつたら女は度胸！ 行くよ！」

『葉隠チーム、動き出した！ それを見た他のチームも射命丸チームに迫り始める！』

「まあ、もうハチマキは奪われてますから破れかぶれで突撃してくるのは分かっちゃただけだね。」

見えない葉隠の手を弾きながらそう言う射命丸。

「ウソ!? 何で、分かんのか!？」

「そこに実体があるなら風はそれを避けて通りますからね。風を操れる私が風の微細

な動きを感じられないなんて事は無いでしょう?」

「確かに!」

「という訳で葉隠さん。軽い脳震盪モドキ、味わってます?」

直後、射命丸の掌底が正確に葉隠の顎に当たり葉隠は意識はあるものの身体を動かさない状態になった。

「因みに答えは聞いてないのであしからず。」

「お、おい、葉隠!」

「大丈夫ですよ。意識はありますし、暫くすれば復活します。まあ、気分は最悪でしょうが。」

急にぐったりと体の力が抜け、騎馬の上で仰向けになった葉隠に砂藤が呼びかける。

それに射命丸が答え、葉隠チームはスタジアムの端の方に避難していった。

『A組葉隠ダウン! ガチで射命丸の奴、容赦ねえ!』

『救護は必要なさそうだが、恐らく葉隠はもう動けないだろうな。』

『手加減はバッチシってか!? 因みにこれルールのどのなのよ、ミッドナイト!』

『グレーゾーンではあるけどアリよ!』

『ギリセーフ! そんでもって今のを見た他のチームの動きがまた止まった!』

『バカみたいに突撃すれば葉隠の二の舞になるのが目に見えるからな。ハチマキを取れないならまだしも、騎手が動けなくなれば、もう逆転のチャンスは無くなる。必然的に迷うだろ。』

「室内戦闘訓練の時に切島が喰らった奴か。」

「ええ、そうですよ。いやあ、この技便利なんですよね。」

ふ、と一息シャドーで掌底を繰り出す。

「相手を傷つける事無く気絶させる技なのでついつい多用してしまうんですよ。」

「ずっと思ってたんだけど射命丸さんって武術の心得とかあるの？」

「ありますよ。天狗ですから。」

「いや、それ理由になって………る？」

緑谷の質問に対する答えに麗日が首を傾げる。

「まあ、正確には椀の家が武術の道場です。そこで習ってるんですよ。」

「椀さんって、あの病室であった白くてモフモフしてそうなの？」

「ええ。実際モフモフですよ。」

「ええなあ、今度会ったら触らせて貰いたいわあ。」

「何故この状況で和める!？」

騎馬戦の殺伐とした空気の中、突然和み始めた女子達に常闇からツツコミが入る。

「さっきの見て、すぐに私の間合いに入ってこれる人なんてそんなにいないと思いますけど。」

「それは、そうだな。」

「入ってこれるとしたら向こう見ずな人か自分の防御力に自信のある人くらいでしょうね。」

「俺には、関係ねえ!!」

「こういう風に。魔獣『鎌鼬ベアリング』」

横から伸びてきた鉄哲の腕を体を引いて避け、塩崎が操る茨を鎌鼬で切り、鉄哲の顎に掌底を入れる。

「まあ、衝撃を抜けさせて脳を揺らす技なので体の硬さとか関係ありませんけど。あ、ポイント貰っておきますね。」

『続いてB組鉄哲ダウン！ そもでもってポイントを奪われた！』

『硬化系の個性だから効かないと油断したな。』

数少ない轟の氷結から逃れていた鉄哲チームのポイントを鉄哲が倒れる前に回収。

『射命丸チーム、終盤に来てほぼ無双状態！ このまま1000万キープ狙いか!?!』

『残り時間は三分を切ったか。十分にありえるな。』

相澤先生が残り時間を口にしたところであと、嫌な予感に襲われる射命丸。

後ろで争ってる筈の轟チームと爆豪チームを見ると、

「チツ、もうお前に構ってる時間はねえか。仕方ねえ、1000万取れる最後のチャン

スだ。行くぞ。」

「あ、あ、!?! テメエから仕掛けといて何勝手な事言ってるんだ半分野郎！ ぶつ殺すぞ

！」

爆豪を氷の壁でガードし、こちらに向かって来る轟チームとそれを追うように同じく

向かって来る爆豪チーム。

「冗談キツイですって。三つ巴に逆戻りですか、そうですね。」

後ろを向いた射命丸にチャンスとばかりに近寄ってきた拳藤チームの騎手、拳藤を片手間で行動不能にし、やれやれと肩を竦める。

「射命丸さん、どうする?」

「何もなくて良いですよ。三分間、私が抑えますから。逆風『人間禁制の道』」

射命丸が右手を突き出し、そう言うのと射命丸チームの周りを除いて突然強い風が吹き始めた。

風は轟チームにとっての向かい風でその風の強さで行動できない。

すぐに轟が氷壁で風を防ぐが、それ以上はどうしようもない。

他のチームも同じ様な状態である。

「風速はおよそ秒速25〜30m、台風並みの強さです。異形型の個性だとしてもそ

う簡単には動けませんよ。下手をすれば飛ばされますのでご注意ください。」

「んん? ヘイ、イレイザー、これって?」

「……………勝負あったな。少なくとも射命丸チームの一位は決定的だろ。」

「なんか、もう、アレだな!ズリいな!」

『だが合理的だ。盛り上がりには欠けるがな。』

それを聞いた轟チームの騎馬、飯田が轟に話し出す。

「轟君。恐らくだが射命丸君は今、勝利を確信して油断してるだろう。そこを突きたい。」

「……何か策が有るのか？」

「ああ、とつておきがある。だが、その後は俺は暫く個性が使えなくなる。だから仕掛けるなら終了間際だ。」

「分かりましたわ。私達は何をすれば？」

「轟君は射命丸チームの所まで氷でトンネルを作つて欲しい。風の影響を受けないために。」

「分かった。」

「八百万君は鉄の棒を。それを上鳴君に持たせて放電で射命丸チームの動きを止める。」

「ああ。」

「分かりましたわ。」

「仕掛けるのは最後の五秒。それが僕達に出来る最後の攻撃だ。」

そんな轟チームが作戦会議をしている中、射命丸は悠々とポイントを回収していた。

地味にポイントを稼いでいた普通科の心操チーム、上位にいた爆豪チームからハチマキを奪ってきた射命丸は騎馬に一旦戻り、そのハチマキを首にかけていた。

「いやあ、大漁大漁。後は轟さんのトコですね。あそこは普通に反撃してきそうですし時間も余りありませんから一瞬で取ってきますか。」

爆豪チームの反撃が思ってたよりも強烈で時間をくってしまった、残り時間は二十秒を切っている。

ヒュツ、と風に乗った射命丸は轟チームからハチマキを一瞬で奪い、騎馬の上に戻った。

『射命丸チーム、ポイント総取り！ マジでエゲツねえ!! つと、残り時間のカウント行くぜ！ 10、9、8』

「行くぞ皆！ 後は頼む！」

ピキピキと何かが凍る音がし、観客達の目がそちらに向く。

『7、6』

氷が作り上げたのは轟チームのいる氷壁から射命丸チームのいる場所まで続くトンネルだった。

「トルクオーバー、レシプロバースト!!」

それを射命丸チームが認識した数瞬後、その中から轟チームが出てきた。

『5、4』

「今ですわ、上鳴さん！」

「くらウエイ!!」

伸びてきた鉄の棒の先が緑谷に触れたと同時に上鳴の放電が炸裂、射命丸チーム全員の動きが止まった。

『3、2』

動きの止まった射命丸の持つハチマキに手を伸ばす轟。

それを見た射命丸は痺れて動かない体を風で浮かして上に逃げようとする。

『1』

だが、それよりも先に轟の手が射命丸の首に掛かったハチマキの内の数枚を捉えた。

『0!!』

残り時間が無くなった。

『おおお?!?! 何がどうなった?!? 説明の前にまずは順位発表! 一位、射命丸チーム! は当たり前として。』

((一位がスルーされた!))

歓声と拍手があがるも射命丸は悔しそうな表情を見せる。

『二位、まさかまさかの最後に一矢報いた! 轟チーム!!』

一位の射命丸チームよりも多くの歓声と拍手があがるが、轟の顔も険しい。

『三位以降、ナシ! 残りチームが0ポイントで同率!! だが、予定では次の最終種目に

出れるのは四チーム！そこんトコはミッドナイトに任せるぜ、ヨロシク!!」

「ええ！主審の権限の元、残りの三位と四位は射命丸さんが最後にハチマキを取るまで順位の高かった爆豪チーム、及び心操チームとするわ！」

その決定に爆豪は悔しさと暴れ回り、心操は安心と悔しさの入り混じった表情を見せる。

「以上四チームは次の最終種目への出場権を与えます！最終種目は昼休憩とレクリエーションの後で行うわよ！落ちちやった子はレクリエーションでアピールなさい！それでは一時解散!!」

ハッ！ 突然の大スクープの予感！

「ハア~~~~」

解散を告げられた後、蛙吹が投げた峰田の頭を鷲掴みにし、竜巻と一緒に真上へ投げ飛ばし、落ちて来た峰田を障子がキャッチしたのを確認した射命丸は選手に割り当てられた観戦用の席に戻り、席に座ると同時に深いため息を吐いた。

「轟さんに見せ場持つてくれました〜。圧倒的一位の予定だったのにい。」

ぐで〜、と背もたれに寄りかかりながら愚痴を言う、

「ま、まあまあ、一位だったんやし1000万抜きにしても結構な大差だったからええやん。」

「まあ、そうなんですけどねえ。どうにも負けた感じがしまして。次の種目で倍返

しですねコレは。あ、そうだ葉隠さんは大丈夫です？ 頭。」

「まだくらくらする〜。」

「スミマセンね、けど勝負なので恨みっこなしってコトで。」

まだふらつきながら歩く葉隠に謝りつつも反省も後悔もしていない。

「射命丸、それに緑谷、話がある。ちよつと良いか？」

突然、轟から名前を呼ばれた射命丸と緑谷は一瞬顔を見合わせ、轟についていく。

「あの、轟君。話って？」

轟について行き、来た場所はスタジアムの学校関係者専用の入り口通路だった。

「なあ、お前、オールマイトの隠し子か何かか？」

「え、何ですか、そのスクープ待った無しの案件、詳しく。」

切り出された話に射命丸が即座に食いつく。

どこからかメモ帳とペンを出し、ネタにする気満々である。

「いや、緑谷が個性を使う時に何か、こう……オールマイトと似た何かを感じたんだ。障害物競争の最後、アソコでそれに気が付いた。」

それを聞いた射命丸がメモ帳とペンをしまった。

確実性の無い記事は己の立場を危うくするだけなのは良く知っているからだ。

「ち、違うよ、それは。 隠し子だったら違うって言うに決まっているから納得しないと思うけど、とにかくそんなんじゃないやなくて。 逆に聞くけど、何で僕なんかそんな、」

轟の問いにかなり動揺しながら答える緑谷。

そんな彼を見て射命丸はもう一度無言でメモ帳とペンを取り出した。

「その言い方に慌て様。 何かしらの繋がりはあると見ました。 そもそもオールマイ

ト自体が謎に包まれた存在。 ナチュラルボーンを謳いつつ、突然ヒーロー界に降って

湧いたかのように現れたのがオールマイトです。 どんな秘密があったって私は驚き

ませんよ。 さあ、ゲロつちやって下さい！ 私の記事の売上のために！」

ピツ、とペン先を緑谷に向け迫る射命丸。

その射命丸と緑谷の間に手を入れ、止めた轟は話の続きをする。

「悪いがそれは後にしてくれ。 俺の親父はエンデヴァー、知っているだろ。 お前が

ナンバーワンヒーローの何かを持っているなら、俺は尚更勝たなきゃいけない。」

そうして轟は話し始めた。

曰く、轟はオールマイトを越えられなかった父親のエンデヴァーが個性婚で母の氷結

系の個性とエンデヴァーの炎熱系の個性を混ぜて作り上げられたハイブリッド。

オールマイトを越えられなかった父親の代わりにオールマイトを越えナンバーワン

ヒーローに育て上げられた事。

そして、母親は心を病み、炎熱系の個性の宿る左半身が憎いと、熱湯を浴びせられた事。

それを聞いた緑谷は轟の壮絶な過去に驚き、何も言えない。

射命丸はかなりの速度でペンを動かし続けている。

「俺はクソ親父の個性を使わず、一番になる事で奴を全否定する。その為にオールマイトに似た個性の緑谷には絶対に負けられねえ。そして一番になる以上、その一番の障害になる射命丸にもだ。ガキみてえな理屈で突つかかって悪いとは思ってるが、それだけは絶対に譲れねえ。」

「……なるほどなるほど。轟さんの事は良く分かりました。まあ、私もヒーローを目指した切っ掛けは似たようなモノですし、何も言いませんよ。相手になった時はよろしく願いますね。」

「そうか。」

「あ、ところで今の話、記事にします？ そうしたらエンデヴァー、社会的に殺せそうですか。」

「……………いや。これは俺の個人的なエゴだ。そこまでする必要はねえよ。」

「あやや、それは残念。売上伸ばせそうなネタだったんですけどね。気が変わったら何時でも言っして下さいね。」

何処までも記事の売上に関しては何の無い射命丸である。

とは言えど、この記事はエンデヴァーから訴えられる危険性を持つ。

そうなった場合、社会的立場がエンデヴァーより圧倒的に低い射命丸は負ける可能性が高い。

轟本人からの証言があれば別ではあるが、当の本人が乗り気でないのに記事を出した場合、轟が証言してくれる可能性は低くなる。

故に、ここは一旦諦めた。

「気が変わるとは思わねえが、分かった。その時は頼む。」

「了解です。」

一旦、であるが。

「緑谷、お前がオールマイトの何であろうと言えねえなら別にそれで良い。ただ、俺は右だけでお前の上に行く。時間とらせて悪かったな。」

そう言うとう轟は二人に背を向け、歩き出した。

レクリエーションの後は遂に最終種目。

早め早めに準備しておいて損は無い。

「僕はずつと助けられてきた。僕は誰かに助けられてここにいます。オールマイトのようになりたい。その為には一番になるくらい強くなきゃいけない。些細な動

機かもしれないけど、僕だつて負けらんない。僕を救けてくれた人たちに応える為にも。だから、さつき受けた宣戦布告。改めて、僕も君達に勝つ！」

「あ、じゃあ一位になった時は私の取材に答えて下さいね。トツプ目指すなら今からメディア出ておかないとダメですよ？」

「う、うええ!!? あ、でもそれはそうか。オールマイトとエンデヴァーの差はメディアに出る回数とか親しみやすさとか言われているし、ナンバーワンになるなら射命丸さんの言う通り、今の内からメディアに出て」

「勿論、轟さんも一位になったら受けて下さいね。」

「……………まあ、考えておく。」

射命丸の意外な返しに驚いた緑谷は、その理論に納得しブツブツ言い始めた。

そんな緑谷をスルーして射命丸は轟にも体育祭一位になった時の取材の申し込みをする。

轟の返事は素っ気ないが、エンデヴァーを超える為にも、と言えば受けてくれそうなのを察した射命丸はホクホク顔でその場から去る。

「……………おい、緑谷。射命丸も行ったし、そろそろ動け。」

「うえ!!? あ、ゴメンね轟君。じゃあまた後で。」

再度、席に戻った射命丸だが、女子達が居ない。

どこに行つたのかと周りを見渡していると峰田から声をかけられた。

「あ、おい射命丸。女子は全員チアの格好して応援合戦だつてよ。相澤先生が言つてたぜ。」

「え？ それ本当ですか？」

ジト目で峰田を見る。

峰田の言うことは一切信じられないという表情だ。

「ウソじゃねえよ。俺もそう聞いた。」
そこに上鳴も加わった。

「合理主義者たる相澤先生が直前になつてそんな事を言うとは思いませんが。」

「ホントだつて！ 伝えるの忘れてたつて言つてた！ ホラ、先生だつて人間だしそんな事もあるだろ。頼むよ、お前が着替えなきや俺らが叱られちまう！」

「……………そこまで言うなら。じゃあ、女子の皆さんは何処で着替えてるんです？」

上鳴と峰田の必死さに負けた射命丸は何処で着替えるのかを聞いた。

「ありがとう射命丸！ 一番近い女子更衣室だ！」

返ってきた答えに従って女子更衣室に向かった。

その後ろで峰田と上鳴がほくそ笑んでいるの知らぬまま。

『さあ、そろそろ午後の部を始めるぜ！ って、どーしたA組?!』

腹部を出し、へそが丸見えになるほど丈の短いノースリーブに太ももを大胆に見せたミニスカート。

そして両手に黄色のポンポン。

チアコスチュームそのものである。

それを着た1-Aの女子生徒達はスタジアムの中心で立ち尽くしていた。

「何故こども峰田さんの策略にハマってしまふの私。」

崩れ落ちるように八百万が落ち込み。

その背中を麗日が優しくさすっている。

それに対し、上鳴と峰田の二人は満足げな表情で親指を立てている。

それに今すぐ中指を立ててて応えたい衝動に襲われた射命丸だが、大衆の前という事でぐっと堪え、後で二人をシメる事を決意した。

「アホだろアイツら。」

「まあ、本選まで時間空くし、張り詰めててもシンドイしさ。良いんじゃない!? やつ

たろ!」

「好きね、透ちゃん」

恥ずかしがって持っていたポンポンを投げ捨てる耳郎に対し、葉隠は乗り気で身体を動かしている。

『さあ、楽しく競えよレクリエーション!! A組女子も全員じゃないけど応援してくれるってよ! んでもってレクリエーションの後はお待ち兼ねの最終種目!! 第二種目から進出した四チーム、十六人によるトーナメント方式、一対一のガチバトルだ!!』

「それじゃあ、レクリエーションの前に最終種目のトーナメントの組み合わせをくじ引きで決めるわよ。最終種目出場者はレクリエーションに出ても出なくても良いわ。」

それじゃあ、一位のチームから順番に」

「あの、すみません。 辞退させて貰って良いですか？」

そう言ったのはA組の尾白。

周りがざわつき、その理由を問うと

「実は騎馬戦の時の記憶が無いんだ。 そして気付いたら騎馬戦が終わっていて、最終種目出場が決まっていた。 でも、俺はそんな風に最終種目に出られても全く納得できない。 自分の実力も意志でも無いのに勝ってるなんて他の競技者に会わせる顔が無いんだ。 だから、お願いしますミッドナイト！」

「同じ理由で俺も辞退します。」

尾白に続いてB組の床田も辞退を宣言する。

「そういう青臭い話はさあ……好み!! 良いでしょう、二人の辞退を認めます！ 代わりに……そうね、爆豪チーム、心操チームの前にハチマキを取られた鉄哲チームを主審権限で五位とします！ チームで話し合って出場する二人を決めなさい！」

鉄哲チームの話し合いの結果、鉄哲、塩崎の二人がトーナメントに進出する事が決まった。

「繰り上がった二人を加えて十六人が揃ったわ！ そして、全員にクジを引いて貰った結果……組み合わせはこうなりました！」

Aブロック

第1戦 緑谷 VS 心操

第2戦 瀬呂 VS 轟

第3戦 芦戸 VS 飯田

第4戦 射命丸 VS 八百万

Bブロック

第5戦 切島 VS 鉄哲

第6戦 爆豪 VS 麗日

第7戦 塩崎 VS 上鳴

第8戦 発目 VS 常闇

「あやや、何ともまあ、荒れそうな組み合わせになりましたね。そして最初の相手は八百万さん、と。速攻が安牌ですかね？」

トーナメント表を見た射命丸の第一声がこれだ。

Aブロックは射命丸にとって個性の相性は悪くないが実力者が集まっている。

Bブロックは上がってきたB組の戦闘能力にもよるが、射命丸は直感で荒れると思うた。

「試合におけるルールは後ほど発表するわ！」

『つて事でトーナメントは一旦お預け！ 楽しく遊ぶぞレクリエーション!!』

解散が告げられると同時に数人がスタジアムから居なくなつた。

試合のために集中するためだと思われる。

レクリエーションに参加して楽しむ生徒もいれば、応援で場を沸かす生徒もいる。

そんな中、射命丸は誰も居ない女子更衣室で元の体操服に着替え、座禅を組んで集中力を上げていた。

そしてレクリエーションが終わり、セメントスが個性で戦いの場を作り上げた。

『レディイイス、アンド、ジェントルメエン!! ボーイズ、アンドガールズ!! 待たせたな、テメエ等！ 遂にお待ち兼ねの最終種目!! ここまで色々やって来たがやっぱ最後はコレだ！ 身体と身体でぶち当たれ！ ルール説明頼むぜミッドナイトオ!!』

「ルールは簡単よ！ 相手を場外に落とすか、行動不能にする、もしくは相手に『参った』と言わせる！ 行動不能に関しては十カウントね！ 危ない時にはレフエリーストツプが入るわ！ 死なない程度に暴れ回りなさい！」

『サンキュ、ミッドナイト！ それじゃ早速第一試合いくぜ!!』

闘技場の両側にある出入り口からスモークが上がり、出入り口を隠す。

出入り口は赤と青に塗り分けられており、それに合わせてプレゼント・マイクが選手紹介を行う。

『赤コーナー、何だかんだで上位をキープ！ 成績は派手だが顔が地味！ 緑谷 出久
!!!』

スモークの中から緑谷が現れ歓声が上がる。

『対する青コーナー、普通科唯一の最終種目出場者！ 今大会のダークホース！ 心操
人使!!!』

人は誰しもがそうな訳ではないが、逆境に立つ人間を応援したくなるものである。
故に心操に向けられる歓声は緑谷よりも圧倒的に多い。

『さア、行くぜ！ レディーラー、ファイト!!』

カアンと、いつの間にか実況席に持ち込まれたゴングが鳴り、開戦が告げられた。

開始直後に緑谷が何か叫び、心操に近付こうとするもその直後に動きが止まった。

『おお!! どうした緑谷！ 動きが止まった!』

『精神干渉系の個性か。 やっぱり入試は見直すべきだな。 戦闘向けではなくても

ヒーロー向けの個性なんざ幾らでもある。』

『そのまま振り向いて、場外まで進め。』

『あぁー、緑谷！ このまま場外に出てしまうのか!?!』

心操の個性に完全にハマった緑谷は心操の言うことに従い、場外へと歩いて行く。

『精神干渉系の個性ですか。 厄介ですね。』

「あ、どこ行つてたの文ー！」

「ちよつと精神統一に。 まあ、試合なので戻つて来たんですが。 ソレはソレとして、この試合は普通科の人の勝ちですかね。」

観客席の誰もが射命丸と同じ事を考えた。

だが、場外まであと一步という所で緑谷の指が微かに動き、個性の反動で指二本がへし折れる。

その痛みで洗脳が解除された緑谷は振り向き、心操と睨み合う。

そして心操の腕を掴み、場外へと放り投げた緑谷が勝利した。

『大・逆・転!! ギリギリで踏み止まった緑谷の勝利!!』

続く第二試合。

轟対瀬呂の試合は、開始と同時に轟が大氷塊で瀬呂を凍らせ一瞬で勝利した。

第三試合。

芦戸対飯田の試合は、酸を出し思うように飯田を近寄らせない芦戸が有利に進めていたが、ダメージ覚悟で酸の中を突つ切つた飯田が、芦戸の腕を掴みそのまま場外へと放り投げ、勝利した。

そして第四試合。

ゲート前に待機している射命丸は同じく反対のゲート前で待機している八百万を見据えていた。

スモークが上がり、ゲートを覆い隠す。

『赤コーナー、ここまで圧倒的な実力で一位をキープし続けてきた猛者！ 今大会の優勝候補の一人！ 射命丸 文!!!』

プレゼント・マイクの選手紹介に合わせてゲートを潜り、スモークの中から姿を表せば観客席から大歓声上がる。

それに手を振って応える射命丸に気負いは無い。

『対する青コーナー、数少ない推薦入学者の一人！ 因みにお嬢様口調はキャラ付けじゃなくてガチな！ 八百万 百!!!』

八百万がスモークの中から現れるも上がった歓声は射命丸よりも小さい。

両者が所定の位置についたのを確認したプレゼント・マイクは開戦を告げる。

『レディーラー、ファイト!!!』

「風符『天狗道の開風』」

開始のゴングと同時に射命丸はその場で右足の踵を軸に一回転し、地面ギリギリから

すくい上げるように腕を振るう。

するとそれに合わせて、渦を巻く風が吹き、その風が避ける間もなく八百万を飲み込み、場外へと吹き飛ばした。

「八百万さん場外！ よって勝者、射命丸さん！」

『瞬殺ウ!! やっぱ一位キープは伊達じゃねえ!!』

場外で座ったまま呆然としている八百万に手を掴み、立ち上がらせる。

どうやら八百万は何が起こったのかイマイチ良く分かってないようだ。

だが、数秒もたてば状況が飲み込めたようで悔しげな表情を浮かべる。

「八百万さん相手に時間をかければかけるほど厄介になっていきますからね。確実に

勝つ為に速攻で決めさせて貰いました。」

「……いえ、そんな事も予想できなかった私の落ち度ですわ。 完敗です。」

射命丸 一回戦突破

天狗だから、武術は結構得意です！

Aブロックの一回戦が終わり、続いてBブロックの一回戦が始まる。

Bブロックの一試合目は切島対鉄哲。

個性は二人共硬化系。

個性ダダ被りの二人の試合は、完全な殴り合いだった。

ガキンガキンと金属同士がぶつかるとような音を出しながら殴り合っている。

その試合は派手さには欠けるものの、世の男達の心を熱くさせる何かがあった。

そして結果はダブルノックダウンによる引き分け。

後で二人が目覚ましたら腕相撲で勝敗を決めるという事になった。

Bブロック第二試合

爆豪対麗日。

序盤から麗日が仕掛けるも、爆豪は個性で一切麗日を近寄らせなかった。

だが、爆炎とその煙で視界が悪くなっている爆豪のスキをつけて麗日は瓦礫に触り、

その瓦礫を上空に浮かせた。

そしてその瓦礫を落とし、その対処に追われる爆豪にタッチし場外へと押し出そうとするが、爆豪は全ての瓦礫を一発の爆破で処理。

そしてその爆破の風圧で麗日は場外に吹き飛ばされた。

結果、爆豪の勝利。

Bブロック第三試合。

塩崎对上鳴。

開始直後に上鳴が放電。

しかし、上鳴の放電攻撃は第二種目でかなり使っており、その時にその攻撃を見た塩崎は先に対策を練っていた。

個性で作ったツルをアース代わりにし、放電の電気を全て地面に流したのだ。

そして最大威力の放電を放った上鳴は頭がショートしてアホになり、その後は何も出
来ずに場外。

結果、塩崎の勝利。

Bブロック第四試合。

発目対常闇。

試合時間を目一杯使つての発目のセールストークが続いた。

常闇の勝利

『二回戦が終わり、残った勝ち上がった八人は正に猛者！ だかしかあし、だーがーしーかーしー！ まだまだ試合は続くぜ！ さあ、野郎共に女子二人！ 優勝目指して更に這い上がれ！ まずは二回戦第一試合！ 赤コーナー、ここまで個性の使用はたったの二回！ それでいて勝ち残ったアツい奴！ 実力かはたまたラツキーボーイか!? 緑谷 出久!!!』

一回戦同様にスモークが上がり、その中から緑谷が出て来る。

『そして青コーナー、ここまで好成绩を残して来たクールガイ！ 一回戦では相手を瞬殺した凄え奴！ ぶっちゃけ、その個性はズリいと思う！ 轟 焦凍!!!』

そして反対側のゲートからもスモークが出て、その中から轟が現れた。

『行くぜ、二回戦第一試合！ レディー、ファイト!!』

カアン、とゴングが鳴らされ試合開始。

と、同時に轟が大氷塊を作り出すが、それを緑谷は待ち受け、デコピン一発で相殺した。

『緑谷、轟の開幕凍結を防いだ!』

その後も轟から放たれる凍結を時には避け、時には相殺し、何とか耐える緑谷。だが、デコピンする度にその指の骨はバキバキに折れ、変色している。

そんな試合が続いていくと、轟の動きが目に見えて鈍り始めた。

それに気付いた緑谷が、轟が凍結の反動で体温が低くなり、動きが鈍くなっているという推測を轟に叩き付け、それと同時に熱でそのリスクをカバーできるといふ事も言った。

「皆、本気でやってる。勝って、目標に近づくために! 半分の力で勝つ!? まだ僕は、君に傷一つつけられちゃいないぞ! 全力でかかって来い! 君の! 力じゃないか!」

緑谷のそのセリフを聞いた轟は表情を歪めると、左半身から炎を生み出した。

観客席から放たれたのエンデヴァーの大声を無視し、緑谷と向かい合う轟。

「緑谷、ありがとな。」

そう小さく呟くと、高温の炎で周りを覆った。

それと同時に大爆発が起き、煙の代わりに大量の水蒸気が発生する。

そしてそれが晴れていくと、見えたのは破壊されたステージ。

そしてその上に立つ轟と、ステージ外に吹き飛ばされた緑谷だった。

「緑谷君、場外！ 勝者、轟君！ あと、担架呼んで！」

ミッドナイトの判定に観客達が大歓声を上げた。

緑谷は担架ロボに乗せられ、運ばれて行くと、A組の大半は緑谷を心配し、保健室へと走って行った。

続く二回戦第二試合。

A組の観客席に殆ど人が居ないことに気がついた射命丸と飯田はステージの上で互いに苦笑いを浮かべた。

「私たちもこれが終わったなら保健室行きます？」

「うむ、そうだな。 試合だったから緑谷君の所には行けなかった。 後でしつかりと

謝罪せねば。」

「謝罪はいらないんじゃないですかね。」

『行くぜ、二回戦第二試合！ レディー、ファイト!!』

プレゼント・マイクの試合開始の合図と同時にステージの真ん中からゴツ、と低い音が響いた。

見れば射命丸と飯田のハイキックがぶつかり合っている。

「意外だな！ てつきり先程の八百万君と同様に吹き飛ばそうとしてくると思ったが！」

「飯田さんなら、あの僅かな隙に距離を詰められると思ひましてね！」

二人同時に後ろに下がり、距離を取る。

射命丸は後ろに飛んで地面に足をつけた瞬間、一気に踏み込み、距離を縮め、足を横に振るう。

それを予測していた飯田は横に避けると、カウンターに回し蹴りを叩き込もうとする。

射命丸は翼を一度、大きく振るうとその蹴りを上に飛んで避け、そのまま体を捻り、回転させて踵落とし。

それを飯田は腕をクロスさせガード。

そして足を掴もうとするが、ガードされた射命丸はすぐに距離を取った。

そこで互いに仕切り直しとなり、向き合う。

『おお！ 今までの試合とは違ってハイレベルな肉弾戦だ！』

『どちらも格闘技をやってる動きだな。随分と動きが洗練されてる。』

そこで実況と解説が入った。

射命丸は腰を落とし構えを取った。

そして前に出した左の掌を上に向け、掛かってこいと人差し指で合図する。

「ならば遠慮なく行かせて貰おう！ トルクオーバー、レシプロバースト!!」

それを見た飯田が急発進し、射命丸の顎の辺り目掛けてハイキックを入れようとする。

だが、

「ッ!? バカな!」

そのハイキックを射命丸は飛び上がって胴で受け、そのまま足を両腕で掴んだ。

そして蹴りの衝撃を殺すように後ろに回転し、しの勢いそのまま飯田を場外へとぶん投げた。

体勢を立て直すも、空中で動く術の無い飯田はそのまま場外へと落ちてしまった。

「飯田君、場外！ 勝者、射命丸さん!」

歓声が上がリ、それに手を振って応える射命丸。

『射命丸、圧倒的！ ところで、何でコイツ推薦枠じゃないんだ？ 普通に推薦枠で行けたら。』

『推薦試験の応募の書類に不備があつてそれで落とされたんだ。』

『何ソレ、ウケる!!』

「相澤先生!」

突然、担任に失敗を暴露された射命丸は顔を赤くして実況席を睨んだ。

二回戦第三試合。

爆豪対切島の一戦は最初は『硬化』の個性の切島が爆豪の爆破を物ともせず、有利に進めていたが、爆豪が持ち前の戦闘センスで切島の個性の綻びを見付けると、一気に反撃に移り、切島をノックアウトさせた。

勝者、爆豪。

二回戦第四試合

常闇対塩崎。

塩崎が個性による物量に物をいわせて一気に決めようとするが、常闇本人も異形型に含まれ身体能力は高く、それを自分の力で避けていく。

そして、常闇本人が囨になっている間に塩崎の足下まで迫った『ダークシャドウ』が

塩崎を場外へと放り投げた。
勝者、常闇。

決着!

『さあ、勝ち上がってきた四人！ 誰が勝つても可笑しくは無いぜ！ 最後まで気を抜くなよ！ 行くぞ、準決勝！ 第一試合！ さっきの試合で覚醒か!? 氷だけでもチートっぽかったのに炎も追加かよ！ 赤コーナー、轟 焦凍!!!』

反対側のゲートから轟が出て来るのを見た射命丸は自分の頬を叩き、気合いを入れる。

『そして、青コーナー！ ここまで圧倒的な实力を見せつけ勝ち上がってきた！ そして意外な事実、実は案外うっかりちゃん!? 射命丸 文!!!』

「ちよつ、そのネタ使わないで下さい!!」

『悪いがソレは無理な相談だぜ！ 恨むんなら自分を恨みな!』

顔を赤くして実況席を睨むも、当のプレゼント・マイクは涼しい顔だ。

「……………さて、約束通り本気でいきますよ。迷いがあるなら今の内に捨てておいて下さいね。」

実況席から視線を外し、軽く気持ちを落ち着けてから轟に話しかける。

「ああ、お前相手に悩んでいる暇は無さそうだからな。どうするかはもう決めてき

た。」

「そうですか。それは良かったです。」

『そんじや行くぜ！ レディー、ファイト!!』

轟が氷結を放ち、大氷塊を作り出した。

射命丸は一瞬で上空に逃げ、その攻撃を回避。

すぐさま降下し、轟に迫る。

射命丸の上からのライダーキックをバックステップで避け、高熱の炎で大氷塊を熱する。

そしてすぐに氷の壁を作り出した。

「風符『天狗道の開風』！」

大氷塊が熱せられて膨張した空気の作り出す爆風を射命丸は八百万戦で見せた渦を巻く風で相殺した。

「……やっぱりこの程度じゃ無理か。」

「当たり前ですよ。私を風で押し出したいんならさっきの三倍は持ってこいつてヤツですよ。」

『初っ端から飛ばして行く二人！ 魅せてくれるぜ!』

氷壁を熱で溶かした轟と射命丸が向かい合いながら話す。

「つていうか炎使うんですね。 てつきり迷って使わないものだと思ってましたけど。」

「一度使っちゃまったんだから、後は同じだろ。」

「ああ、開き直ったんですね。 ま、それでも倒させて貰いますけどね!」

そう言つて轟との距離を詰める。

轟もすぐに氷壁を張るが、簡単に蹴りで崩される。

だが、それを予想していた轟は間髪入れずに炎で氷壁を熱し、爆発させた。

「!?!」

射命丸は咄嗟に体を丸めるも、爆風を至近距離からまともに受け、吹き飛ばされた。ステージのギリギリで何とか踏みとどまるも、ダメージは少なくない。

高温の水蒸気であちこちに軽い火傷を負い、爆発の音で耳はあまり使い物にならない。
い。

「やってくれましたね。」

キンキン、耳鳴りがしている。

轟が何か言つてるも、読唇術なんて知らない射命丸には何て言つていのかは分からない。
い。

取り敢えず耳を指差してから手でバツマークを作った。

轟は察したようで首を縦に振った。

「それでは、今度は私の番ですよ。」

先ほどとは比べ物にならない速度で轟の目の前まで近づく。

「旋符『紅葉旋風』！」

腕を振るうと同時に竜巻が現れ、轟を上空へと吹き飛ばした。

「そしてこれが私の奥の手。行きますよ！『幻想風靡』!!」

何かを察したのか氷で球体を作り、防御を固めようとする轟に氷を砕いて蹴りを叩き込む。

そしてスピードを上げながら急カーブし、また蹴りを叩き込む。

どんどんスピードは上がって行き、連続で轟に蹴りが入る。

轟も何とかそれに対応しようと炎や氷を出す前兆は見られたが、それより先に射命丸の蹴りが入り、全て体で受けるしかなかった。

それが数秒続いたところで射命丸が地面に降り立ち、落ちて来た轟を受け止めた。

落ちて来た轟は誰の目から見ても完全に気絶していた。

「轟君、戦闘不能！ 勝者、射命丸さん！」

状況から射命丸に勝利の判定が出た事が分かった射命丸は轟を抱えたまま、ステージから下りた。

そして気絶している轟を担架ロボに乗せた射命丸は歓声に手を振って応え、ゲートの

中に入った。

そしてこの戦いを見ていたヒーロー達は互いに意見を交換しあっていた。

「エンデヴァアの息子を初見の技とは言え、こつもあつさりと、ね。」

「一応、怪我を負ったのはこれが初めてだが、まだ余裕があつた。」

「だが、軽くではあるが息が上がっていた。あれが奥の手というのは嘘では無さそうだな。」

「問題は次の試合よ。どちらが上がってくるにせよ、センスの塊の爆豪か近、中距離最強クラスの常闇。さっきの技の対策を練られた状態でどこまでやれるか。」

そんな話をしながら、セメントスがステージを整えるのを見ていた。

そして準決勝第二試合。

爆豪対常闇。

観客の誰しもが接戦を予想していたが、ここで常闇の個性『ダークシャドウ』の弱点

が顔を出した。

『ダークシャドウ』は常闇の影。 故に光に弱いのだ。

それを見抜いた爆豪は爆破の光で『ダークシャドウ』を弱らせ、常闇を場外へと押し出した。

結果、爆豪の勝利。

『さア、長かったバトルも遂に次で終わりだ。 優勝するのは果たして、どっちだ!? 行くぞ、運命の決勝戦!! ここまで来たからには説明なんざいらねえよなア!? 赤コー

ナー!! 射命丸 文!!! そして、青コーナー!! 爆豪 勝ち!!!』

両側のゲートから同時にスモークが上がり、同時に射命丸と爆豪が出て来る。

そして、二人共ステージの上に立って向かい合う。

「おい、カラス女。」

「なんですか? 何となく分かりますけど。」

「俺が勝つ。」

「やれるものなら、どうぞ。」

『行くぜ!! レディー……、ファイト!!!』

「『爆速ターボ』!!」

試合開始と同時に爆破の推進力で一気に射命丸との距離を縮める爆豪。

「挨拶代わりだ!」

そう言つて右手を振りかぶる爆豪。

「遅いですよ。」

だが、その数瞬後に射命丸は爆豪の懐に潜り込み、服の袖と襟を掴む。

そして、背負投げ。

「ぐっ……だらあ!!」

地面に叩き付けられた爆豪は一瞬表情を歪めるもすぐに左手を振るつて射命丸目掛けて爆破する。

だが、それを射命丸は後ろに大きく跳んで避けた。

「さて、天狗らしくちよつと稽古でもつけてあげましょうかね。何時でもどうぞ。」

「上等だ、クソがッ!!」

爆豪が突つ込んで来る。

そして爆破を起こそうと手を振り被つた瞬間にまた射命丸が懐に潜る。

「爆豪さんは少し大振りの攻撃が多すぎる。私みたいなスピード特化型にとつては隙だらけです。最初の戦闘訓練の時に緑谷さんにそれを突かれてからは大分改善したようですが、それでもまだ多いですよ。」

両手首を掴み爆破による攻撃を封じる。

動きの止まった爆豪に頭突き。

「恐らく爆破のイメージのためのルーティンの様なものなんでしょう？ 小さな爆破なら腕を小さく振るい、大きな爆破なら腕を大きく振るう。といったところでしょうか。無論、意識すれば大振りでもなくても大きな爆破も出来るのでしょうか。」

そう言つて両手を掴んだまま、胸を両足で蹴り、その反動で爆豪と距離を取る。

「そう簡単には直せないでしょう？」

「るっせえ!! 俺のやり方に口出ししてんじゃねえ!!」

「口出しじゃなくてアドバイスなんですけどね。それではレッスンの2。」

「っ!? ツラア!!」

一瞬で爆豪との距離を詰めた射命丸は反撃の爆破をしゃがんで避け、爆豪の足を払う。

「攻撃の殆どを爆破に頼ってるが故に足下がお留守ですよ。個性で余り近づかせなかったから足を払われるという経験も殆ど無いんじゃないですか？ だからこそ、そこ

に大きな隙が生まれる。後は爆破の煙で視界が潰されやすいくらいですかね。爆豪さん、思ってたよりも注意点少ないんですね。」

「うるせえ!! 死ねえツ!!」

うつ伏せのまま放たれた爆破を避け、また距離を取る。

「じゃあ、今言ったことは次回からの課題にして下さいね。」

「誰がするか、クソカラス女!!」

「あと、出来ればその口調も直して欲しいんですが………まあ、無理でしょうね。」

「無理じゃねえわ! 勝手に決めんな!! とにかく、今は、テメエをブツ潰す!!!」

「言った側から。まあ、言いたい事は言いましたし、そろそろ終わらせませるか。旋符

『紅葉旋風』」

先の轟戦と同じ様に爆豪を空へと吹き飛ばす。

「そして、『幻想風靡』!」

絶対の自信を持って空へと飛び上がる射命丸。

そして、まず一発目。

上手くガードされる。

だが、それは想定内。

寧ろ、一発目の蹴りはガードされる事を見越して、体勢を崩す為の攻撃。

そして本命は二発目以降。

爆豪の背後から急接近し、蹴りを叩き込もうとしたところで

「ハッ、待ってたんだよ、その技をなあ!!」

下に向けた右手を爆破させ、射命丸の蹴りを避け、直後に上に向けた左手を爆破させ、射命丸の背中にしがみつく。

「まさか!」

「そのまさかだ! 落ちろ、クソカラス!!」

爆豪の爆破の煙が辺りを覆う。

そしてその中から射命丸が落ちて行く。

「っ!」

地面に激突する寸前で腕を振るい、風で勢いを殺し、地面に着地した。

「……………ホント、轟さんと良い、爆豪さんと良い、やってくれますね。」

背中の痛みを顔をしかめながら呟く。

『射命丸、撃墜された!! 一気に面白くなってきたぜ!!』

『爆豪の奴、射命丸の絶対的なアドバンテージを潰しやがった。』

背中の翼はもう殆ど使い物にならない。

『さっきの轟戦の時に見せただけのアレをこんな短時間で攻略してみせるとはな。』

思

い付いても、実行できるかどうかは別だぞ。』

『つまり爆豪はマジモンの天才ってこつたな!! さあ、今ので射命丸はもう自由に飛べなくなつた! どうするつもりだ!?』

「どうするも何も、やるしかないでしょう。」

真上から迫る爆豪の攻撃をバックステップで回避。

出た煙の中に突つ込み、拳を握る。

当たつた感触はある。

だが、手応えはそこまででもない。

(掌底を警戒してますね。その分、私が近接に移つた時の反応が良い。)

風を操り、煙を散らす。

(最後ですし、出し惜しみは無しでいきましょうか。)

「これで終わりだ、クソカラス女ア!!」

そう言いながら爆豪が突つ込んでくる。

爆破で体を回転させ、その回転のスピードを更に上げながら。

大技が来る。

そう直感で確信した射命丸は走り出す。

「ぶっ飛べ!! 『榴弾砲・着弾』!!」

ステージ上で大爆発が起きた。

『お、オイ、コレ射命丸の奴大丈夫か?!』

プレゼント・マイクの焦った声がスタジアム全体に響くも、爆破の音に耳をふさいだ観客達には聞こえない。

直後、煙が一気に晴れた。

「全く。しづといですね。」

ステージ中央で立っていたのは射命丸。

あちこちが爆破の煙で黒くなっているが、ダメージは無いように見える。

そしてステージのギリギリで立っているのは爆豪。

必殺技の反動で手を負傷しながらも、射命丸の事を睨みつけている。

『あ、あく〜、何があつた？ 爆豪、なんでそんなトコにいらんだよ。』

『射命丸は爆豪の爆破をスライディングで避けた。それ以降は知らん。爆破の光で

良く見えなかった。』

「さて、これでお互いの必殺技はお互いに潰したワケですけど。」

「知るか。俺はテメエをブツ殺して一位になる。そんだけだ。」

「でしようね。ま、勝たせて貰いますけど。」

「上等!!」

互いに獰猛な笑みを浮かべながら走り出す。

「風符『天狗道の開風』!」

先に仕掛けたのは射命丸。

渦を巻く風を放つ。

爆豪はそれを爆破で横に跳び、避け、さらに距離を縮める。

爆破で急加速し、射命丸の目の前まで一気に迫る。

「『閃光弾』!!」
スタンダレネット

目の前で閃光重視の爆破を起こし、視界を潰す。

「つ、竜巻『天孫降臨の道しるべ』!」

そして次の攻撃に繋げようとしたところで射命丸が自分を中心に巨大な竜巻を作り出した。

竜巻に吞まれ上空に吹き飛ばされた爆豪。

だが、直後に体勢を立て直し、射命丸に迫る。

視覚が潰された射命丸に反撃ができる訳無いと考え、最大限の爆破を起こそうとする。

そして、爆破が当たり射命丸が吹き飛ばされる。

そのまま場外に落ちるかと思われたが、風で自らの体の勢いを殺した射命丸はステー

ジ上に残った。

（思ったよりも爆破の威力が強かった。空気の動きで爆豪さんの動きも分かりますけど、流石に爆破の威力までは分からない。それに爆破で空気が一気に膨張すると一秒に満たない程度ですが空気の動きが分からなくなる。……………控えめに言ってもヤバくないですか？）

ええい、目よ早く治れと念じながら、目を擦る。

（なんてやっても治るモンじゃありませんしね。攻撃こそ最大の防御！ 爆破で分からなくなるなら爆破させなければ良い！）

そう考え、空気の流れから爆豪の居る位置を把握し、走り出す。

『射命丸の奴、目を瞑ったまま走り出した！』

『騎馬戦の時に言ってたろ。あいつは空気の流れで相手の位置が見えて無くても分かる。』

『って事は爆豪が射命丸の視界を潰したのは完全に無駄なことか!？』

『完全に無駄って訳ではねえが、効果が薄いのは事実だな。』

「つつてもよお！ 俺の動きが分かっても、爆破のタイミニングと威力は分かんねえだろ!？」

（気付くのが早いですって！）

爆豪が振り被ったのを確認した射命丸はそのまま突き進む。

そして空気の膨張を確認した瞬間に風の盾を張り、爆破の威力を殺す。

(つ、流石に一瞬では爆破の威力を完全には殺せませんか。けれど、これで爆豪さんの視界も悪い筈!)

「突風『猿田彦の先導』!」

痛めた翼を無理やり広げ、風にのって爆豪の鳩尾に蹴りを叩き込む。

爆豪が吹き飛ばされたのを確認した射命丸は翼の痛みに顔を顰めながら腕を振るう。

「風符『天狗道の開風』!」

風が爆豪に迫るも、爆豪は爆破で横に跳び、それを避けた。

「いい加減、しづとい!」

「それはこっちの台詞だ、カラス女!!」

二人が同時に走り出し、先に爆豪が腕を振るって爆破を起こす。

「デメエ、さつき爆破の時に少し戸惑ったよなア?」

そこから連続で爆破を起こしながら近づいて行く。

それを感じた射命丸は動きを止めた。

爆破の音が近づいてくるのを感じながら回復してきた目を少し開ける。

「空気の動きを感じるんだったら、俺の爆破時の空気の膨張で動きが分かりづらくな

るんじやねえか？」

(ホント、嫌になるくらい戦闘に関しては察しが良いですね。けど、そろそろ目も治ってきましたし、少し芝居といきますか。)

構えを取りながら、音のする方からじりじりと後ずさる。

『おっとお!! ここで射命丸、後退る!』

『どうやら爆豪に気付かれた様だな。』

『気付かれたって何を!?!』

『空気の動きを感じられない瞬間を作れる事にだ。爆破の直後がそれだ。』

直後、爆破の音が一気に迫り、咄嗟に風で壁を作る、が

(周りをグルグルと回っていますか。けれど、)

ゆつくりと目を半開きにし、聴覚と視覚以外の感覚をシャットアウトする。

(ここまで風を使い過ぎてきましたし、そろそろ集中も切れるはず。だからこそ、賭けましょうか。)

爆破の音が鳴り響く。

数秒後、爆破の音が背後から聞こえた瞬間、目を開き伸びてきた腕を掴み、放り投げる。

「ッ! テメエ、騙しやがったな!」

「勝手に騙されたんでしよう!? 旋風『鳥居つむじ風』!」

爆豪に向けて二つの竜巻を発生させ、右手に風を集める。

例え爆豪が上から避けても横から避けても、あるいは正面から竜巻を突破したとしてもその場所に即座に風を放つ為。

「ツラァ!」

そして爆豪は爆破で二つの竜巻をかき消した。

爆炎と煙が残った風で吹き飛ばされるその中心目掛けて風を放つ。

「!」

だが、風を放とうとしたその瞬間、集めた風が霧散し空中に消えた。

「今度こそ終わりだ!!」

それを見た爆豪が突っ込んで来るのを見た射命丸は俯き、

「これで終いだ!! ぶっ飛べ!!」

「なんちゃって。」

満面の笑みを浮かべて上に飛び、翼に風を受け、爆豪の背後を取った。

「風符『天狗報即日限』、合わせて突符『天狗のマクロバースト』！」

その足には風が集められ、渦を巻いている。

「名付けて、突風『天狗即報一番』!!」

飛び後ろ回し蹴りの形で放たれた射命丸の足は綺麗に爆豪の背中を捉え、蹴り抜いた。

足に溜めた風が真後ろから爆豪の体全体を押し、その勢いを空中でマトモに受けた爆豪は爆破で勢いを殺そうとするも、運悪く吹き飛ばされた方向が一番場外に近い位置だった事により、場外へと押し出された。

それを確認した射命丸はその場で大の字に倒れる。

完全に集中力を使い切っただけでなく、ぶつつけ本番の思い付いただけの新技を使った事により、0を振り切れてマイナスになってるのではないかとバカな事を考える。遅れて優勝した事に気付き、起き上がるのも億劫だったので、右手を上に向けた。

「爆豪君、場外！ よって、優勝は射命丸さん！」

それを見たミッドナイトの宣言で会場全体から歓声と拍手が巻き起こった。

射命丸はそれを聞きながら、熱気が籠もった、けれど何処か心地の良い風を肌で感じ
ていた。

表彰式

試合が終わり、大の字に倒れた射命丸を心配して担架ロボが来たが、それを見た射命丸が弾みをつけて起き上がり、観客全員から『立てるんかい!!』とツツコミを入れられる等の事はあったが、無事に全種目が終わり、表彰式へと移る。

「それではこれより、表彰式に移りますー!」

ミッドナイトのアナウンスでそう告げられ、表彰台の上に立つ四人にスポットライトが当てられる。

三位、轟焦凍及び常闇踏影。

二位、爆豪勝己

そして優勝、射命丸文。

轟と常闇はしっかりと前を向き、爆豪は舌打ちしてからズボンのポケットに手を突っ込んでそっぽを向き、射命丸は会場中に笑顔で手を振っている。

射命丸文。

自分の立てた計画はキッチリと最後までやり通すタイプである。

なお、後日マスコミや知らない人から声をかけられることも予想済みである。
アフターフオローも忘れない。

「メダル授与よ！ 今年、一年生にメダルを贈呈する人はもちろんこの人!!」

「私が！ メダルを持って「我らがヒーロー、オールマイトオ!!」持ってきたんだけ……ど……なあ。」

メダル授与の為に登場したオールマイトと司会をしていたミッドナイトの台詞が完全に被ってしまい、落ち込むナンバーワンヒーロー。

それにミッドナイトが手を合わせて謝る。

「ま、まあ気を取り直して………メダル授与だ!! では第三位！ まずは常闇少年！」

同率三位の片方、常闇の前に行き、銅メダルを常闇の首にかける。

「実に良い健闘っぷりだったが、弱点対策も忘れずにね。弱点を突かれてヒーローが立ち往生なんて笑い話にもならないぞ。」

「無論、これからも懸命に励む所存。」

「うむ！ 頑張りなよ！ 続いて同率三位！ 轟少年!!」

同じ様に轟の首に銅メダルをかけた。

「憑き物が落ちたような顔じゃ無いか！ 今の君なら多くの人を救えるヒーローになれるだろう。」

「いや、まだ色々やらなきやいけない事があるんです。それを全部終わらせたら……その時こそ今の言葉が分かる気がする。」

「そうか。だが、今の気持ちは決して忘れずにね。それはとても大事なものだ。気張れよ！そして第二位、爆豪少年！」

一段上がって爆豪の前に立つオールマイト。

銀メダルを首にかけようとする爆豪はそれを手で弾いた。

「いらねえよ。」

「ムー！ 何でだい!? 十分に立派な結果じゃないか！」

「オールマイト、俺が欲しいのはトップだけだ。それ以外なんざ世間が認めようが俺が認めねえ。そんなモン、ゴミと同然なんだよ。」

「わお、超ストイック。」

「るっせえ！ 黙れクソカス死ね！」

「なるほど。ならば、これは君が今回の悔しさを忘れない為に持つておきなよ！」
「いらねえって言うてんだろ！」

「H A H A H A!! いらなくても押し付けるさ！ 受け取りたくないなら家に送ってお

いよう！」

「……………チツ」

どう考えても、押し付けられる事を察した爆豪は銀メダルを奪い取り、さっさとポケットに入れた。

「ウム！　そして、優勝!!　射命丸少女!!」

「はいっ!」

「正直に言って君の今の実力は既にプロでも通用するレベルだと思う!　けれど、ヒーローを目指すからには慢心せずに更に上を目指して欲しい。」

「Plus Ultraですか。」

「その通り!　Plus Ultraだ。是非とも頑張ってくれ!」

そう言って射命丸に金メダルをかけ、肩を叩くとカメラの方へと振り返った。

「皆さん!　この大会で彼らが示した通り、次の世代の優秀な金の卵達は着々とその力を伸ばしています!　そして、彼らを見て、また新たな金の卵達が産まれる!　次世代の芽は常に何処かで育っているのです!　それでは最後に一言!　皆さんご唱和下さい!　せーの!」

「「「Plus 『お疲れ様でした!』ウル……………えっ!」」」

「そこはPlus Ultraでしょ!?　オールマイト!」

「ああいや、疲れただろうなと思って。それに開会式で射命丸少女がやってたし。被るかなあって。」

ピッ

薄暗い部屋の中、数少ない光源だったテレビが消され、部屋が更に暗くなった。

「……………あの糞ガキ生きてたのかよ。その上、雄英体育祭優勝だと……………!? あー、あー、あー、あー！ ムカつくなあ。」

ソファに寝っ転がりながら首を掻くのは先の雄英高校襲撃事件の首謀者、死柄木弔。「ふむ、あれが弔の言っていた生徒か。惜しいねえ。」

そして、モニターに映るコードのような物を沢山繋がれた人影。

「惜しいって何がだよ、先生。」

「あの娘の目はね、歪んでいた人間の眼だよ。もう少し早く会えていれば確実にこちら側に引きずり込めたんだろうが。いやはや、やつぱり努力は惜しむものではないねえ。だが、後悔しても仕方無い。さて、ヒーローの卵があれほどアピールしていたんだ。君も負けるわけにはいかないだろう?」

「……………ああ、そうだな。あつちがあんだけ派手にやったんだ。こつちだつてど派手にやんなきゃな。」

「ふふ、その通りさ。舞台と道具はこちらで準備しよう。魅せてくれよ、次世代のヴィラン君。」

「たっだいまー!!」

群がるマスコミを『今日は疲れてるんで』ですり抜け、帰宅した射命丸。玄関のドアを開ければ既に漂ってくる酒の匂い。その匂いに苦笑いしつつ中へと入って行った。

命名式

「うへえ。」

雄英体育祭翌日の朝、起きてリビングに行った後の射命丸の第一声である。

それもそのはず。

床に散らばる無数の酒ビン。

むせ返りそうなくらいに溢れる酒の匂い。

そして、その中で豪快に寝ている二人の色々な意味で頭の上がらない師匠。

実のところ、頭の上がらない人物はもう二人居るのだが、どうやら既に帰ったらしい。

序に持って帰ってくれば良かったのに、と射命丸の心の声。

「まあ、『触らぬ鬼に祟り無し』もとい、『触らぬ神に祟り無し』です。ここは見て見ぬふり。」

ゆつくりとリビングの前を通過し、着替えとタオル、携帯と財布、自転車の鍵を持って外に出た。

今日は雄英体育祭の振替休日。

そして玄関の前には待ち構えていた報道陣。

内心、うへえ、と音を上げながらも、その様子は一切顔に出さず、一礼。

自転車の鍵を外して、外に出れば、待ち構えていたかのようにはマイクが向けられる。

「あ、取材は良いですけど、家とかは後で加工しておいて下さいね。」

先に釘を刺し、

「今から稽古に行く予定なんですけど、撮りますか？」

先手必勝とばかりに自分から食い付きそうな話題を持ち出す。

撮影許可？

昨日の内に射命丸本人が取ってます。

勿論、何人かが撮影許可について聞いてきた。

そして射命丸は黙って良い笑顔でサムズアップした。

道場の中心、畳の上で目を閉じ、正座をしながら待っていた。

「……………来ましたか。」

彼女の憧れ、目標、いつか越えたい巨大な壁。

そんな存在がテレビの向こうで、とは言え大立ち回りし、頂点に立った。

普段は浮かべないような獰猛な笑みを隠し、荒れ狂う血潮を鎮める。

目を開け、道場の入り口を睨むと同時にその扉が開いた。

「文さん、いきなりで申し訳無いのですが、一手ご指南頂けますか?」

「はて、ご指南? 挑戦の間違いでしょうか? 少なくともご指南なんて気配では無い

のですけど。ルールは?」

「個性無し、武器無し、その他武道に反する行為は一切禁止、どうですか?」

「分かりましたよ。受けて立ちます。」

射命丸の後ろから入ってきた有象無象マスコミは置き去りに。

道場の中心で向かい合った二人は互いに礼をしてから構えを取った。

二人共全く同じ構えだ。

左足を前にした半身、右手は引いて腰の辺りに、左手は軽く前に出して拳を握る。

それを見たマスコミが急いで撮影を開始し、

空気が爆ぜた。

体育祭の振替休日^が明け、生徒は全員いつも通り登校した。

「来るときめっちゃ声かけられたー！」

「俺も！ 電車乗ってたら『応援してる！』なんてさ！」

「俺、小学生にいきなり『どんまい』って言われたんだけど。」

「どんまい。」

「おっはよーございまーす。」

談笑を続けるクラスに登校してきた射命丸。

「そう言えば、文、テレビに出てたよね!？」

真つ先に話に言ったのは葉隠、内容はそのまま、射命丸がテレビに出ていたことだ。

「この個性社会でプライバシーなんてあつて無いようなモンですからね。朝起きたら家の前にマスコミが張つててビビりましたよ。」

個性の使用が当たり前になった現代、マスコミは必ず一人は追跡系の個性を持つ人を抱えている。

なので、ほぼ確実に住所が判明してしまうのだ。

因みにオールマイトはマッスルフォームとトゥルーフォームを使い分けることでマスコミを撒いている。

「てかき、文がテレビで行つてた道場ってどんな所なん?」

「個性に合わせたカリキュラム組んでくれるだけの普通の道場ですよ? 一応、個性使用の許可は取つてありますけど。ああ、あと椗の実家でもありますね。そこそこの名なのでちよつとネットで調べれば出てきますよ。私の名前も載せてますし。」

「あ、ホント。めっちゃキツイけどタメになるつて有名だつて。」

すぐに携帯で調べた麗日がその画面を見せる。

その卒業生の写真を見ていくと八百万がある事に気が付いた。

「プロヒーローも何人も排出してるみたいですね。」

「ホントだ。しかも生徒の異形型の個性率高つ。」

「個性柄、妖怪型の殆どが親戚なんですよ。だから自然と異形型に対するノウハウが高くなってるって、自然と。」

「えっ、ちょ、これもしかしてホークス?! リューキュウっぽいのもいるし!」

と、盛り上がっている女子達を見ていた男子は、

「緑谷、知ってた?」

「同じ道場出身っていうのは。まさか犬走さんの道場だったなんて。」

「頼んだらちよつと教えてくれねえかな。良い経験になると思うんだけど。」

「確かに! ちよつと今度の土日にも教えて貰えねえか聞いてこようぜ!」

先立って切島が女子グループに突撃し、それに続いて男子グループも会話に混ざり始めようとした、その時。

「待つんだ! もうすぐホームルームの時間! みんな席につくんだ!」

飯田からの注意が飛び、時間を確認したA組全員が席に付いた。

そして直後にチャイムが鳴り、それと同時にグルグル巻だった包帯を取った相澤が入ってきた。

「おはよう。」

「ケロっ、相澤先生、包帯取れたのね。良かったわ。」

「婆さんの処置が大げさ過ぎただけだ。さて、今日一時間目のヒーロー学だがちよつと特別だぞ。『コードネーム』。ヒーロー名の考案だ。」

「「心膨らむヤツきたー！ー！！」」

蛙吸の言葉にことも無さげに答え、その後放たれた台詞にA組全員が歓喜の声を上げた。

それを相澤は視線一つで黙らせ、説明を続ける。

「というのも、先日話した『プロからのドラフト指名』に関係してくる。指名が本格化するのを経験を積み、即戦力と判断される2年や3年から。……つまり今回来た指名は将来性に対する興味に近い。卒業までにその興味が削がれたら、一方的にキャンセルなんてことはよくある。」

「頂いた指名がそのまま自身へのハードルになるんですね！」

葉隠がそう言えば相澤は頷いて肯定する。

つまるところ、体育祭は唯の切っ掛け。

本番はこのドラフト指名から、という事だ。

「そうだ。そして、その指名結果がこれだ。」

相澤が手元のタブレットを操作すると、教室の前の黒板の前に白いスクリーンが降り

てきて、それに結果が映し出された。

A組指名件数

射命丸	4029
轟	3461
爆豪	2264
常闇	332
飯田	328
上鳴	202
八百万	88
切島	54
麗日	18
瀬呂	9
尾白	4

「例年のもつとバラけるんだが、今年は三人に偏った。」

指名の来っていない半数近くが溜め息や悲痛な声を出し、指名が来てもトップの三人との差が大きく、驚きを隠せていない。

ただ、麗日だけは指名件数が予想よりも多かつたようで、前の席の飯田の肩を掴んで

揺さぶりながら喜んでいる。

そして、騒ぐ生徒を睨み付け黙らせる相澤。

「まだ5月の筈なのに既にクラス内でのテンプレが出来上がり始めている。

「これを踏まえ、指名の有無に関係なく職場体験に行つて貰う。プロの活動を実際に体験して、より実りある訓練にしようつてこつた。職場体験つつつてもヒーロー社会に出ることには違いない。つまり、お前らにもヒーロー名が必要になってくる。」

「まあ、仮ではあるが適当なもんを付けたら……」

「地獄を見ちゃうよ！ この時の名が世に認知されてそのままプロ名になつてる人は多いからね！」

「ミッドナイト先生!!」

相澤の台詞を引き継ぐように登場したのは、18禁ヒーロー、ミッドナイト。

そのまま教壇の前に立った。

「その辺のセンスはミッドナイトさんに査定してもらおう。俺はそういうの出来んからな。将来、自分がどうなるのか。名を付けることでイメージが固まり、そこに近づいていく。それが『名は体を表す』つてことだ。よく考えてヒーロー名を付けよう。」

そう言つて相澤は寝袋の中に入って寝始めた。

その後、ボードとペンが配られ、そこに思い思いの名前を書き込んでいく。そして数分後、

「じゃあ、そろそろ出来た人から前に出て来て発表してね」

まさかの発表形式という形にクラスがざわめく。

そんな中、最初に手を上げたのは芦戸だ。

「はい！ アタシ出来ました！ リドリヒーロー、エイリアンクイーン！」

「血が強酸性のアレを目指してるの!? やめときな！」

「ちえー。」

トップバッターがアレだったので微妙な空気が教室中に漂ったが、次の発表者の蛙吸がフロッピーというお手本のような名前を出して、そんな空気を変えてくれた。

その後も、切島が尊敬するヒーローの名前をリスペクトして、烈怒頼雄斗と名付けた。

「あ、次私行きます。」

「良いわよ！ どんどん発表しちゃって！」

「はい、ドーン！ 鴉天狗ヒーロー、あやや！」

「あだ名?!」

「この際、自分のプライドとかどうでも良いので！ 覚えやすさと親しみやすさを重視で

！」

「確かに覚えやすいけど、良いのそれで。」

「疾風鴉とか風雨鴉とか考えたんですけど、ねえ?」

「……………まあ、確かにそっちはどちらかと言えば男の子がつけそうな名前ね。特に

問題も無いし良いか。」

と、射命丸のヒーロー名はあややに決定した。

その後、全員のヒーロー名が決定し、指名してきたヒーロー達の名前とその事務所の書かれたプリントが渡された。

この中から選べ、という事だ。

射命丸はその分厚いプリントの束に内心面倒に思っていた。

職場体験、またの名をコネ作りの機会

多数のプリントが山を作り、その山を崩しながら読み進め、内容から仕分けし、複数の山を作っていく。

バイトの関係上、文字に触れる事が非常に多い射命丸ではあるが、あまりの多さにため息が漏れる。

だが、流石にこの量のプリントを全部家に持ち帰りたくないため、早め早めに仕分けし、出来る限り量を減らそうと必死に動いている。

具体的な仕分け方法としては、主な活動と活動場所、そしてヒーローランキングである。

例えばオールマイトなら活動内容は戦闘、捕縛をメインに救助も少し。

活動場所は都市、ランキングは1位。

ワイプシなら活動内容は救助

場所は山岳、森林地帯、ランキングは32位といった具合である。

そんな仕分け作業をし、家に持ち帰る枚数を100枚前後まで減らした。

その殆どが戦闘、捕縛系のヒーローであるが、元々そちらの方面に行くつもりであったので当たり前といえれば当たり前である。

(さて、どうしたものですかね。

普通に考えれば、トップ20位くらいの所に行くのが良いんでしょうけど、実力も含めて考えるとやっぱりトップ10が良いですよね。

なら、私と同じ飛行系の個性のホークスさんとこ行くのが一番？

それとも純粹に経験豊富そうなエンデヴァー？

隠密系のエッジショットもアリですし。

それ以外でもアングラ系のヒーローの中には相澤先生の如く実力のある人だっていますし。

うーん、迷いますね。)

そう考えつつ、さらに仕分けを進めて20人程に絞った射命丸は考えるのが面倒臭くなって、目を瞑って適当に選んだ人の所に行く事にした。

「どーれーにーしーよーかーなっ！」

抽選の結果選んだのは……………

「と、いう事で宜しくお願いしますね、エンデヴァーさん！」

「貴様、何をとは言わんが舐めてるのか？」

エンデヴァーの所だった。

「ふん、まあ良い。」

荷物を持って、今からすぐに移動する。」

着いたばかりにも関わらずすぐに移動すると言うエンデヴァーの言葉に首を傾げる。

「移動、ですか？」

しかも荷物ごとって、どこへ？」

「保須市だ。」

例のヒーロー殺し、ステインを捕らえに行く。」

それを聞いて、ステインに関する情報を思い出す。

「確かにステインは一度姿を表せば暫くは同じ都市で犯行を4から6件繰り返しますし、先日保須市での犯行をしたばかりですからね。」

狙うならうってつけ、って事ですか。」

「……理解が早いな。」

概ね、その通りだ。

残りの理由としては、一人ヒーローがやられれば、その都市のヴィラン及びヴィラン予備軍が活発化する。

特にヒーロー殺しが現れた街では一、二ヶ月間で5人はやられるからな。

ヒーロー殺しが去った後を狙って、他からヴィラン共が集まってくる事がある。

それに対して、他の都市のヒーローがその都市に応援に行くことよって抑止力となるのだ。

それと同時に経験の浅い雑魚が昼間であろうと暴れる事がある。

そういった相手は貴様らの様な職業訓練の生徒にとっとうってつけの相手だからだ。」

（おお、意外にも私達のことを考えてくれる。）

などと、失礼な事を考えながらもエンデヴァーの後について行っている。

因みに、轟も同様の事を考えていたりする。

「無論、四六時中パトロールというわけでは無いからな。

空き時間はしつかりしごいてやる。

射命丸は肉体部分と体術はしつかりしているが、個性によつて風が乱された時の風のコントロールがまだ甘い。

特に俺の様な炎熱系の個性だと、火災旋風を巻き起こすのに利用されかねん。

アレが起きればコンクリートだろうと溶かされるほどの高熱になるぞ。

そうならない為、もしくは起きてしまった時に止められなくとも勢いを削ぐ為にも、風のコントロールを学べ。

焦凍は氷のコントロールはこれまで、それだけでやってきただけあつて、流石の一言だが炎の方が使つてなかつた分、甘いな。

今は0か100かの二択しか無いが、最終的には温度を十度単位で調節出来る様になる。

そうすれば、酸素だけを燃やして気絶させる、重傷を与えない程度に火傷させて動きを止める、もしくは鈍らせるなど戦略に幅が出てくる。

下手に炎熱耐性を持ってない相手に本気で放てば殺しかねんからな。俺が長年付き合ってきたこの『ヘルフレイム』の制御技術を全て教えてやる、しっかりと学んでお前の物にするのだ。

保須での活動は移動中に俺のサイドキックから聞いておけ。

俺から言う事はそれだけだ。」

それだけ言うのとエンデヴァーは黙った。

射命丸は完全に今の自分の事を把握されていると感心していた。

(なるほど、流石にヒーロー名が努力なだけあって、経験から来る洞察力が凄いですね。

純粹に実力だけで二位を維持し続けているだけではありませんか。

まあ、本人に言ったら怒りそうだから言いませんけど。)

そんな事を考えながら保須へと向かう車に乗り込んだ。

車に乗って三時間ほど。

保須市にある拠点に到着した。

この様な大きい都市だと、外からヒーローが応援として数日泊まり込みで来ることもあるので、1日単位で借りる事のできる建物が幾つかあったりする。

普段から収入が入るわけでは無いがヒーロー活動の補助金が国から支給されるので赤字になる事はあまり無い。

今回、エンデヴァーが借りたのもその様な建物の一つで、地下に個性訓練用の施設がある。

無論、泊まるだけならホテルに泊まって訓練の時のみ、それ用の施設へと行った方が割安ではあるのだが、様々な機密情報を扱う事もあるヒーローに取ってはその様なセキュリティ面も考えられている建物を借りる事が多いのだ。

更に旅行などの私事ならまだしも、ヒーロー活動をしていると、助けを求めて駆け込んでくる人もいる。

その時にホテルだと駆け込んできてから保護するまでにタイムラグがある事に加え、状況が悪化するとホテルのすぐ側で戦闘が発生する事もあり、ホテル側の安全も考え、この様な建物を選ぶ、という訳である。

そして今回エンデヴァーが借りたのはその様な建物の中でもトップクラスのものである。

指定された部屋に荷物を置き、ヒーローコスチュームに着替えてからロビーに集まる。

「では、これからパトロールを始める。

まずはここの住民と潜在ヴィラン共に俺が来たという事を知らせなければならんからな。」

それだけ言うとは歩き始めるエンデヴァー。

エンデヴァーの言葉を補足するサイドキックの言葉を聞きつつ、射命丸達も後をついて行く。

建物の外に出ると噂を聞きつけたのか既に人が集まってきた。

歓声上がるも、エンデヴァーは一瞥した以降は完全に無視。

射命丸はそれなりに時間のかかるサインのみ断り、それ以外はファンサをし、轟は若干戸惑いながらも普通にファンサをしていた。

待ちつつ少しイライラしていたエンデヴァーの様子を見てサイドキックのバーニンがある程度捌けた所でストップをかけて、パトロールが始まった。

「知っているとは思うけど、一応確認ね。」

仮免も無い以上、独断での個性使用は命の危機が無い限りは禁止。
戦闘も禁止。

一応、エンデヴァーさんや私達が許可を出せば使える事にはなっているから、基本エンデヴァーさんの側からあまり離れない様に。

もし戦闘が発生したら、市民の避難案内とか個性を使わない事をやってね。

エンデヴァーさんが言うには、丁度いい塩梅のヴィランがいたら追い込みと囲い込みは私達がやって君達に戦闘させるらしいから、一応そのつもりで。」

(丁度良い塩梅のヴィランとは。)

無論、軽犯罪を繰り返す様な精神的、個性的に小物なヴィランである。

「でも、そんなお逃え向きのヴィランなんてそうそうでないとおもうけどね。」

フラグである。

「死ねえッ!!」

異形型の個性持ちの拳を真つ向から掴み、そのまま関節技へと持ち込む。

(殺意も拳も軽い。)

死ねとか言いつつ、相手を殺してしまふ事が頭をよぎって本気を出せないタイプですか。

確かにこれは雑魚だ。

というか、普通に生きてたら犯罪とか犯さないタイプの人でしょ、コレ。

金に困つてのひつたり、つてとこですか。)

地面へと押し倒し、拘束する。

犯人は先程までの暴れ様が嘘かのように大人しくなった。

それを見ていた野次馬から歓声が上がる。

犯人が大人しくなった所で抑え役をサイドキックが変わり、射命丸は軽く服を叩いて立ち上がる。

「流石だな。」

確か貴様に戦闘のいろはを叩き込んだのは鬼の3人組と天魔、犬走の当主だったな。

やはり流石に師が師なだけあって、普通ならまだまだ未熟な筈の体術が既にプロの域

に入ってるだろう。

焦凍も射命丸のそれは参考にすると良い。」

サイドキックがエンデヴァーがやけに射命丸に対して高評価な事に少しざわめいている。

「なんかエンデヴァーさん、やけに褒めてないか？」

「ほら、あれよ。」

焦凍君と射命丸さんをくつつけようって企んでるんじゃない？

奥さんだって最近少し和解したらしいけど、元々は個性婚狙いだって話だし。」

「ああ、あれか。」

あの人、プロとしては尊敬できるけど、それ以外がアレだからなあ。」

「聞こえてるぞ、貴様等ア!!」

わざとである。

サイドキックとしてもエンデヴァーの家庭問題は直接口こそ出さないもののどうかして欲しいと思っている為、これ以上エンデヴァーが余計な事をしない為に釘を刺すつもりで聞こえる程度の声で話したのである。

因みにエンデヴァーがどれだけくつつけようとしても、射命丸がその気にならない限りは射命丸の本家の方から完全にシャットアウトされるので骨折り損のくたびれ儲け

だったりする。

この後もある程度。パトロールを続け、拠点へと引き上げた。

そこで今回のパトロールの反省会が行われ、二人は戦闘以外でのヒーローとしての心得を学ぶ。

そして翌日は個性訓練で1日を過ごし、3日目、それは起こった。